# 地域交流研究

2014年度 年報 第11号

## 目 次

--第 10 回地域交流研究フォーラム--『センターの歩んだ 10 年と新たな挑戦(図エ・美術教育からの提案)』

開始及び主催者挨拶	地域交	流研究センター長	杉本	光司	4
センターの歩んだ 10 年	地域交	流研究センター長	杉本	光司	6
図工・美術教育からの提案「たからばこ	.作戦」	司 会:	鳥原	正敏	9
☆研究協力者の紹介					-l \
☆発 表  ・「たからばこ作戦」について(概要)  ・システム「たからばこ」について説明  ・システム「たからばこ」の操作と紹介  ・「たからばこ作戦」における研究活動の報告	鳥原 正敏 杉本 光司 大輪 知穂 吉 舘山 拓人	(情報センター教授  (情報センター職員	受) 受) d) E准教授)	エ」王宰	者)
—2014(平成 26	年度)活動	物報告—			
I. 2014 年度の活動について(概況)					36
Ⅱ.各部門の活動					39
Ⅱ-1. フィールド・ミュージアム部門 Ⅱ-2. 発達援助部門 Ⅱ-2-1. SAT事業 Ⅱ-2-2. 地域教育相談室 Ⅱ-2-3. 地域情報教育 Ⅱ-2-4. 地域美術教育					
<ul> <li>Ⅲ. インターフェイスとメディアの活動</li> <li>Ⅲ-1. 第10回地域交流研究フォーラムの開館</li> <li>Ⅲ-2. 各種講座の開催</li> <li>(1)都留文科大学現職教員教育講座</li> <li>(2)都留文科大学子ども公開講座</li> <li>(3)県民コミュニティーカレッジ講座</li> <li>Ⅲ-3. 『地域交流センター通信』の発行〔第</li> <li>Ⅲ-4. 学部共通科目の開講</li> <li>(1)「地域交流研究Ⅱ」-生きもの地図をつく</li> <li>(2)「地域交流研究Ⅲ」-「山梨」を知り、</li> <li>(3)「地域交流研究Ⅳ」-地域の交流誌をつる</li> </ul>	崔 2 6号〕 ·くるー 歩き、知らせる	<u> </u>			66
IV. 地域貢献活動 IV-1. 山梨県地域教育フォーラム南都留集会IV-2. 都留市放課後子ども教室事業IV-3. 文大ボランティアひろばIV-4. 地域交流研究センターサテライトIV-5. 文大名画座IV-6. 学級づくりの向上を目指す実践講座	*				77
<ul><li>V.地域交流研究教育プロジェクト</li><li>V-1. 田んぼクラブ -稲作体験実習の取り</li><li>V-2. 食育つる推進プラン</li><li>V-3. 「谷二ラボ」活動について</li></ul>					89

## 第10回地域交流研究フォーラム

### 『センターの歩んだ 10 年と新たな挑戦 (図工・美術教育からの提案)』

2015年9月27日 都留文科大学 第10回地域交流研究フォーラム

### センターの歩んだ10年と

### 新たな挑戦(図工・美術教育からの提案)

### 2014年9月27日(土)午後1時~午後4時

会場:都留文科大学2102教室(2号館1階)

主催:都留文科大学 地域交流研究センター









10

- ■午後1時~1時30分 センターの歩んだ10年 (地域交流研究センター 杉本光司)
- ■午後1時30分~午後4時

図工・美術教育からの提案『たからばこ作戦』

発表者:鳥原正敏、杉本光司、舘山拓人、大輪知穂

助言者: 小松佳代子(東京藝術大学 准教授)

研究協力者: 渡辺雅彦(都留市立旭小学校教諭)

上田由紀子(西宮市造形教室「こどもアトリエ」主宰者)

問い合わせ:地域交流研究センター

電話:0554-43-4341(内線41)FAX:0554-43-4347

e-mail: cKouryu@tsuru.ac.jp

### センターの歩んだ10年と

### 新たな挑戦(図工・美術教育からの提案)

都留文科大学における地域交流推進の礎として「地域交流研究センター」が設立されてから 10年という時間が流れました。センターにおける年間最大行事でありますフォーラムも今回 は第10回という節目の年を迎えました。

今回のフォーラムですが、当初、本年2月22日(土)の開催を計画しておりましたが、私たちの記憶に強く残る2月14日から降り続いた1メートルを超える積雪被害の影響により延期とさせて頂きましたが、ようやく開催することができることになりました。

これまで歩んだ10年を改めて振り返ると同時に、センターにおける新しい取り組みを発表させて頂く機会として今回のフォーラムを開催いたします。

センターにおける三つの部門活動「フィールド・ミュージアム」「発達援助」「暮らしと仕事」の一つであります「発達援助部門」における新しい活動として、図工・美術教育と情報教育の連携による、子どもたちの作品を撮影し画像・映像化した作品をデータベース化することを目的とした取組『たからばこ作戦』を実施してきました。この取組では、アニメやゲーム等の一方通行な交流ではなく、ICTを使った双方向な交流により、心や感性を磨き、造形表現活動を通して自己表現力やコミュニケーション能力の向上を目指しています。

『たからばこ作戦』と名付けた新たな研究活動について、ここに関わる人々による活動の概要、これまでの成果そして今後の計画について発表させて頂きます。

どうぞ地域交流研究センターにおける活動に対してご関心をお持ちの方々をはじめ、図工・ 美術教育にご興味をお持ちの皆様のご参加を心よりお待ちしております。

### プログラム

13:00 開会

「センターの歩んだ10年」

杉本光司(地域交流研究センター長)

13:30 図工・美術教育からの提案『たからばこ作戦』

司会:鳥原正敏、 助言者:小松佳代子(東京藝術大学准教授) ☆研究協力者の紹介

☆発 表

- 『たからばこ作戦』について:鳥原正敏(初等教育学科教授)
- 研究成果の報告: 舘山拓人(初等教育学科特任准教授)
- ・システム『たからばこ』について:杉本光司(情報センター教授)
- システム『たからばこ』の課題:大輪知穂(情報センター職員)

☆意見交流

16:00 閉会

### 開始及び主催者挨拶

地域交流研究センター長 杉 本 光 司

#### ○開会 司会:佐藤優海

みなさまおまたせいたしました。それではこれから第 10 回地域交流研究センターフォーラムを開催させていただきたいと思います。私は、本日進行担当させていただきます初等教育学科 4 年の佐藤優海です。どうぞよろしくお願いいたします。

#### 【拍手】

それでは、開会にあたり本日の予定を説明させていただきます。13:00よりセンター長の開会のあいさつとテーマのひとつ「センターの歩んだ10年」についてお話しさせていただきます。10分程度の休憩後、引き続き13:30よりもうひとつのテーマ「センターの新たな挑戦」について鳥原正敏・杉本光司・大輪知穂の3名から一時間程度の発表があります。



その後5分程度の休憩後、この取り組みの研究成果の報告を舘山拓人から20分ほどさせていただきます。その後は、今回の発表・報告を受けてのコメントを小松佳代子先生からいただき、今回参加いただいておりますみなさんと共に、ご自由にお話しできる時間とさせていただきます。プログラム終了時間は16:00を予定しております。

それではこれよりフォーラムのプログラムを始めさせていただきます。まず、本年度フォーラムの開催にあたり、地域交流研究センター長の杉本光司より開会のあいさつと、引き続き「センターの歩んだ 10 年 | についてお話しさせていただきます。

#### ○開会のあいさつ 地域交流研究センター長:杉本光司

みなさま、こんにちは。

本日はこんなにも良い天気で絶好のお出かけ日和でもあり、またお忙しい中にもかかわらず、わざわざお時間を作ってお出で頂き、ありがとうございます。

ただ今、ご紹介にありましたように、本学の地域 交流研究センター長を、2009年(平成21年)の4 月からさせて頂いております杉本と申します。私は、 情報センター所属の教員として本学の情報教育およ びネットワーク環境運営全般を担当しております。 このセンターとの関わりは、発達援助部門の一つで あります情報教育の分野で、地域の小中学校との教



育活動を通して 2007 (平成 19年) 年から参加させて頂いております。また、3年前から新たに発達援助部門活動の一つとして参加して頂いており、本日も主催スタッフの一人として参加しております鳥原正敏教授を中心とした初等教育学科の図工・美術教育教室と、この都

留市をフィールドの一つとした連携プロジェクトをスタートさせており、本日のフォーラムテーマであります、図工・美術教育における新たな挑戦「たからばこ作戦」に参加しております。

さて、当センターも 2003(平成 15 年)年 4 月 1 日に開設され 10 年の年月が経ちました。開設以来、センターの年間最大の行事として受け継がれております、この「地域交流研究フォーラム」も、本日、ここに第 10 回目として開催することができました。今回は、私たち地域交流研究センターにおける過ぎ去った 10 年を改めて振り返り報告させて頂くと共に、センターにおける新しい取り組みを発表させて頂く機会とさせて頂きました。

本日ここに、第10回地域交流研究フォーラムを開催できます事、これまで地道に成果を 積み重ねてこられた関係者の方々のご努力、そして本日この会場にお出で頂きました皆様を 始め、力強く支えて下さいました多くの方々に対して改めて深く感謝する次第でございます。 これからの時間、非常に限られた時間ではありますが、ともに集い、大いに語りあい、そ して、私たちの日頃の取り組みに対する熱い思いを大いに感じて頂ければと願っております。 それでは、第10回地域交流研究フォーラムの開催にあたって、始まりのご挨拶とさせて いただきます。ありがとうございます。

### センターの歩んだ 10年

地域交流研究センター長 杉 本 光 司

それでは、これより本日のフォーラムプログラムに入りたいと思います。

先ず、資料の確認をさせて頂きます。こちらの 封筒の表面に記載されております資料が全て入っ ているか確認をして頂きたいと思います。もし、 不足しているものがありましたらお手をお上げく ださい。大丈夫でしょうか?

その資料の中から、これからお話しさせて頂きます「センターの歩んだ 10 年」に関する資料をご用意ください。 1 点目は、A4 サイズの両面印刷されました「都留文科大学・地域交流研究センターの歩んだ 10 年」と書かれました、こちらの資料です。

2点目は、本学の「学報第 123 号」でございます。こちらの 2ページから 5ページに「地域交流研究センター設立 10 周年」の特集記事が掲載されております。 2・3ページは、創立時の今泉初



代センター長を支えて次長として、また、2代目のセンター長としてご尽力いただきました 森博俊先生の「当センターの創設のころ」の説明が、そして、4・5ページには、10年が経っ た現在のセンターの状況を4代目のセンター長として、私から説明させて頂いております。

この2点の資料で私たち地域交流研究センターの設立から10年の活動の状況を簡単に説明しております。

さて、センター創設の際にも、センターを特徴づける契機となった問題の一つとして掲げられておりました、「地域交流」についてです。「地域交流」といっても、結局は大学に「地域貢献」を強いることになるのではないかということです。大学は研究活動や学生を育て社会に送り出すことで社会貢献するのが基本だという考えです。この点は、創設以後、学科を超えた新しい研究・教育の「かたち」をセンターから発信するという役割を確認し、大学の「地域サービス」活動に矮小化しないように努めてきており、その考えは、当然、現在にも引き継がれております。

最近では、大学の役割とか責務とは、教育・研究・社会貢献であるということを耳にします。そんな中、2013年3月には、文部科学省による、新規事業「地(知)の拠点整備事業」(COC: Center Of Community) 計画が発表されました。これまで地域交流研究センターにおいて実践してきた多彩な取り組みや活動実績は、地域をフィールドとした研究活動をとおして得た成果を教育に活かし、そして地域に還元するという目標を掲げて活動を続けており、この COC 事業の趣旨とは、まさに本センター活動における趣旨そのものであると確信しました。当然、採択を目指して申請したわけですが、その際にも、私たち「地域交流研究センター」のこれまでの取り組みが基礎となっておりました。結果は、一次審査は通過しました

が、採択には至らず、今年度も申請はしたものの、厳しい制限を突破することはできませんでした。しかし、学内では、文部科学省からの補助金なしでも、この COC 事業を進めるべきであるという決定がなされ、新たに「COC 推進機構」という組織を設立し、ここの専任教員の採用も決まり、いよいよ 10 月 1 日に赴任することになりましたので、今後は、地域交流研究センターとの連携の下、大学を核とした「地(知)の拠点整備」事業について、大きく飛躍することが期待されております。

皆様にお配りした資料の説明を少しさせて頂きます。

「センターの歩んだ 10 年」の一覧をご覧ください。2003 年にセンターが発足しました。初代センター長はムササビの観察活動で、広くマスコミにも登場しておりました今泉吉晴先生が就任してスタートしました。部門活動として「フィールド・ミュージアム部門」「発達援助部門」「暮らしと産業部門」これは後に「暮らしと仕事部門」と名称を変更いたしますが、これら3つの部門活動と様々な地域に関わる取り組みを行っております。それらの詳しい取り組みについては、年報の中で説明させて頂いておりますのでご確認頂けたらと思います。

この会場の周りの壁面には、今回のテーマにあります「センターの歩んだ 10 年と新たな挑戦 (図工・美術教育からの提案)」に関する資料が掲示されております。

その中で、こちらから見て入り口の左側に、私がセンター長として着任してからのフォーラムのポスターと、国立科学博物館で2010年3月から6月まで開催されました「大哺乳類展」の懐かしいポスターを掲示させて頂いております。

第7回の「ボランティアの力が地域をかえる!」では、都留市社会福祉協議会との共催ということもあり、県内各地からボランティアに関心のある方を中心に220名が参加してくれました。また、翌年の第8回では、元学長の大田堯先生の出演したドキュメンタリー映画「かすかな光」を基調講演として、その後、大田先生にもご参加頂き大いに語る時間を設定いたしましたが、大田先生が直前に腰を痛めてしまい、会場に来ることが出来ず、急きょ、私のゼミ生を先生の自宅に派遣し、先生の自宅と会場をネットで接続した遠隔会議を実施しました。その際には、当時94歳という年齢にも関わらず、機敏に会場からの質問にも答えられた姿勢には大きな感動を覚えました。

「大哺乳類展」には協賛団体として参加しましたので、ポスターや新聞広告に「都留文科

大学」の名前が、花王、三井物産、竹中工務店、TOPPANという大企業とともに掲載され、文系の大学がなぜ?理系学部があるの?といったことばとともに驚きの声が聞こえました。また、会場内における展示協力、北垣先生の講演会やギャラリートーク、それからフィールド・ノートの編集に関わる学生による展示説明等、多くの聴衆を集め、大きな反響を呼びました。この催しには、最終的には35万人の入場者があり、「ムリネモの森にようこそ」と名付けた、地域交流研究センター



のフィールド・ミュージアム部門の地道な活動成果の展示をとおして、その後の多様な交流 のきっかけともなった大きな出来事だったと思います。

このように駆け足でセンターの 10 年についてお話しさせて頂きました。今後、ますますセンターへの要望が高くなっております。どうぞ皆様には引き続き暖かなご支援を頂きたいと思います。本日はどうもありがとうございました。

このように、センターの 10 年の歩みのなかで、ほんの一部の催しの説明をさせていただいておりますけれども、現在も本日のテーマであります、図工・美術教育の新たな挑戦をどんどん続けておりまして、私たちも負けずに残された時間を、私自身の残された時間がありますけれども、私もセンター長としての任期を今月で終わります。来年3月まであるのですが、9月30日で一旦終わりにしまして、10月1日の後期からは研修をさせていただくということで、この後の発表にも関わってきますが、東京藝術大学のほうに研修に行くことになりましたので、また新たな勉強が出来るかと思いまして、いろんな取り組みに活かす勉強をさせていただきます。その後、残りの6か月に関してはセンター長として体育の麻場先生に引き継いでいただくことになりましたので、10月1日からは麻場先生がセンター長として来年の3月30日まで皆さんに引き続きご支援をいただきたいと思います。このように、センターの10年について駆け足でお話させていただきましたが、今後ますますセンターへの要望が高くなると思います。どうぞ皆様には引き続き温かな支援をいただきたいと思います。本日はどうもありがとうございました。

### 図工・美術教育からの提案「たからばこ作戦」

#### ○「たからばこ作戦」について(概要)

#### ◆鳥原正敏

「たからばこ作戦」研究代表の鳥原です。「たからばこ作戦」について説明させていただきます。発表に先立って、今日来ていただいております、ゲストの方々のご紹介をさせていただきます。後ほどそれぞれご発言いただく機会があるかと思いますが、その時に詳しい自己紹介をお願いできればと思います。ここでは、名前だけ簡単に説明させていただきます。



連携協力者の上田由紀子先生です。兵庫県西宮市で

「こども造形教室」を主催されています。とてもユニークな造形活動をされていて、私も長く注目している先生です。次に、旭小学校の渡辺雅彦先生です。我々の研究は現場あってのことですが、現場で最もご協力いただいている方です。渡辺先生なくしてはこの研究はできません。最後に、東京藝術大学の小松佳代子先生です。藝大というと芸術家かな、というように思われる方もおられるかと思いますが、教育哲学がご専門です。これまで我々が美術教育研究会(東京藝術大学)で行った発表を通して「たからばこ作戦」について知っていただきながら、いろいろと支えていただいています。あとでコメントなどいただければありがたいと思います。

では、ここからは「たからばこ作戦」についての発表と、これまでの様子についてご報告させていただきます。

まずは、「たからばこ作戦」の名前の由来から説明させて下さい。「たからばこ作戦」とは、子どもたちの作品や活動の映像資料を集めること、集めた画像・映像をデータベース「たからばこ」を使って整理、活用しようという試みです。我々は、子どもたちの作った作品や活動の資料は子どもたちにとっての「宝物」となるだけではなく、それを取り巻く我々研究者や教員にとっても「宝物」である、という発想から「たからばこ作戦」という名前を付けました。

具体的な活動内容は二つあります。まず一つめとしては、子どもたちの図画工作の活動や作品を画像・映像資料にして収集することです。もう一つは、その収集した資料・データを、データベース「たからばこ」で整理したり管理したりしながら、これに関わる方々と共有・活用することです。またこれに関する目標ですが、三つあります。一つ目は、近年ICTを活用した教育環境を作るといったことが施策の一つとして示されていますが、図画工作のなかでもそういった環境を作りたいと考えています。二つ目は、子どもたちの心の広がりについて検討することです。図画工作の授業というと皆さんは、技術的な科目、モノをつくること、つまり技術であるとか道具や材料の知識などが中心の教科とお考えになるのではないでしょうか。しかし、我々が考えるのはそうではなくて、作品を通したコミュニケーション、我々はそれを心のコミュニケーションと呼んでいますが、そういった考えを提案したいと考えています。そして三つ目として、ICTをこういった考えに組み合わせることで、今までにない新しい図画工作の考え方になるんじゃないかと我々は期待しています。このように、こう

いった新しい図画工作のイメージ、教科のイメージ、教科観といったものを皆さんと一緒につくっていきたいと考えています。

これまでの経緯を簡単に4段階のステップに分けて整理しました。まず、はじめに活動の動機から説明します。私は本学に着任して10年近く経ちます。本学では図画工作について学生に指導・説明する立場にあるのですが、勤め始めたころ私の手元や大学には地域の図画工作に関する資料、作品に関する資料というのはほとんどというか、全くありませんでした。作品は勿論、それに関わる写真・映像に関わる資料もありませんでした。これでは授業がうまくできません。それで、なぜ作品と資料がないのか理由を考えてみました。その結果、二つの原因があると考えました。一つは作品自体が壊れやすいので保存ができないということです。今映像で流れていますが、この作品は油粘土でできた作品なので授業が終わって一定期間展示すると、こわして粘土の箱に戻しちゃうんですね。つまり、これはもう形がなくなってしまいます。だから図画工作でつかう素材の性質上、保存が困難で収集ができないというのが一因と考えました。

もう一つは、当時、図画工作では実際の作品を通して活動を行うこと、実物を見せるということに意味があるという考え方が非常に強かったものですから、なかなか画像・映像資料が残らなかったと考えました。

しかし、私が授業で説明するときに具体的な話をするためには、作品の資料がないと何ともやりにくいもので、それで困ったなという気持ちになりました。そこで、個人的に小学校の図画工作の作品の資料を集めようと思いました。知り合いの小学校の先生にお願いして、「写真を撮らせて欲しい」とか、「ください」と言うと最初は「いいですよ」という話になるのですが、実際にやろうとすると、様々な制約があって、例えば校長先生の理解をどうやって得ようかとか、PTAの方にどうやって説明しようかとか、なかなか集めるのが難しいと感じました。そこで考えたのが、じゃあ小学校の作品が無理なのであれば、例えば小学校以外の活動で学生に説明するために有効な資料はないかと考えました。ちょうどそのころ上田先生の活動を知りました。活動の様子がこの会場の壁に貼ってありますよね。版画とかガラス絵なんかをね。それからあれは地球儀の展示風景ですね。

これならば学生に説明するうえでとても有効な資料になると考え、上田先生にお願いしたところ、快く資料をいただきました。早速、授業で資料を使ってみたのですが、これらを資料として使うためには整理しておかないと、デジタルデータですからパソコンのなかに入るとすぐにどこかにいってしまいます。そこで、これはデータをデータベースで管理したほうがいいんじゃないかなと考えるようになりました。それで平成22年度に子どもたちと作品に関する研究で、データベースを実際に作ってみました。

その結果、有効性は高いものの、いくつかの大きな課題にぶつかりました。市販のデータベースソフトは大きな画像用データを扱うことを想定していなかったようで、上手く動きませんでした。また情報管理の安全性も気になりました。それと、最も大きな問題として著作権がありました。著作権というのは近年どんどん厳しくなってきています。

こういったことから平成24年度に私と杉本先生で研究チームをつくりました。その後、 舘山先生や大輪さんにも入っていただいて、都留文科大学の重点領域(学内の競争的研究) に応募し、幸いにも採択されました。また地域交流研究センターからご支援を頂けるように なり、教育委員会にもお願いしていただきました。これでようやく「たからばこ作戦」にた どり着いたということです。

次は実際に「たからばこ作戦」で使っているデータベース「たからばこ」について見ていただきたいと思います。これは、杉本と大輪のほうから説明させていただきます。

#### ○システム「たからばこ」について説明(1)

#### ◆杉本光司

いま、鳥原のほうから第一段階の概要の部分を説明させていただきましたが、「たからば こ作戦」のシステムについては、システム担当である私と大輪で皆さんに紹介します。こちらが情報センターの職員で私たちのプロジェクトチームの一員である大輪知穂さんです。 (大輪「よろしくお願いします」)

それでは、実際にシステムを稼働する状況を皆さんにも見ていただきます。今日のレジュメにも用意させていただいた、「たからばこ作戦」のシステムについてのページもご覧ください。このシステムは、できるだけわかりやすくということと、誰もが使いやすいということを心掛けて作成されました。インターネットの環境さえあればどこからでも登録できるということを、ここにある画面上で説明させていただきます。

このような「たからばこ」というサイトがありますが、このサイトのサーバーは学内のものではなく外部のサーバーを利用しています。いろいろな人たちがアクセスするサイトに、学内のサーバーを使うのは、セキュリティの面を考えるとあまり良くないので、お金はかかってしまうが、当初から外部にサーバーを設置しました。実際にアクセスすると最初にログイン画面が出ます。これにより、誰にでも公開できる状況ではありません。自由にインターネット上に公開してしまいますと、セキュリティの問題だけではなく、先ほど鳥原のほうから説明がありました、著作権の問題や個人情報の問題があり、作品がひとり歩きしてしまうことや、子どもたちの著作権が無視されてしまうことが考えられるので、ユーザーIDとパスワードを使った会員制のシステム構成を設計して立ち上げました。ここでユーザーIDとパスワードを入れてログインします。このように、インターネットの環境さえあれば、どこからでも

利用できます。ログイン後は、トップ画面に表示される「プレゼンテーション検索」「作品検索」「新規プレゼンテーション追加」「新規作品登録」の4つのアイコンから登録・検索作業を始めることができるようになっています。

それでは、最も基本となる登録する方法を、 舘山先生が実際に会場内にある子どもたちの作 品を撮影した写真を使って、大輪のほうから説 明させていただきます。



#### ○システム「たからばこ」の操作と紹介

#### ◆大輪知穂

情報センターの大輪と申します。ここからは私が 10 分ほど操作の説明をさせていただきます。始めに、舘山先生がデジタルカメラで撮影した SD カード内の写真をパソコンに取り込みます。現時点では、「たからばこ」が出来てからの 850 件の作品が登録されています。

それでは、写真を登録していく作業をやってみたいと思います。SD カード内には舘山先生が撮影した9月27日付の写真がたくさんありますね。今日はちょっと時間がないので、上の3つの写真を「たからばこ」のほうに登録していきたいと思います。まずは、「新規作品登録」というアイコンをクリックします。そうしますと、作品登録の画面が表示されますので、1番最初に「たからばこ」にログインします。次に、国、都道府県、組織、種別等をプルダウンであらかじめ決められたものから選択します。あらかじめ決められたものに該当しない場合でも、項目を追加することができます。ここでは、3つの写真を一括登録して

みます。都道府県から山梨県を選択し、キーワードにフォーラムと入力します。そして、先ほどの3つの写真を選択し、「こちらにドロップ」と表示されているところにドラッグします。今回は参照から SD カード内の写真を選択して、取り込みます。今表示されている緑のインディケーターが終わった段階で登録が完了となります。舘山先生に撮っていただいた写真には、キーワードにフォーラムと入力してあるので、その情報を持った状態でデータベースに入っていきます。



次に、取り込んだデータを利用するという観点から、写真を検索して出力するという作業もやってみたいと思います。作品というところをクリックして、「作品検索」というアイコンをクリックします。今回はフォーラムというキーワードで検索しますが、例えば絵の具を使った画像だけを表示させたいとか、針金を使ったものだけの画像を見たいという場合には、該当する項目を選択して検索することが可能です。検索を開始すると、フォーラムと入力されている画像が抽出されますので、ここから必要なものを選択し出力します。これで、他の媒体で閲覧できるようになります。ほかのシステムと違うところは、情報というものをデータで持っていますので、検索してデータを抽出できるという点です。それでは杉本先生に細かいご説明をしていただきます。

### ○システム「たからばこ」について説明(2)

#### ◆杉本

ざっと、カメラで撮影して登録・検索するまでの一連の流れを見ていただきました。皆さんが考えているよりも簡単だったのではないかと思います。インターネットの接続されている環境さえあれば簡単にこの作業ができます。ということは、小学校とかいろいろなところで今後メンバーとして入っていった場合、それぞれがみんな同じ大学に来ることなく、自分の場所から登録することができますよっていうことです。

これから、私たちの「たからばこ作戦」全体のイメージを説明させていただきますが、今 表示されているのが、全体のイメージ図です。皆さんに資料が用意してあります。一番上の ところに、作品データベース「たからばこ」が位置します。それがインターネット上にあり ますので、ICT を使ったコミュニケーションを通して、鑑賞活動を行うことを示しています。 右側のところには参加する対象が示してあり、今は他地域、他校とありますけども、私たち の希望としては、いずれ海外まで広げられたらいいなという希望を持っています。世界中が インターネットでつながっており、このシステムは場所の制約を受けませんので、海外にま で広げることは可能であると考えられます。これらに、学校や団体、大学などが関わってい きます。下の方のデータベースのマークは、今後の希望としてこんなこともしたいなってい うことで色を変えてあります。既に行ったこととしては、旭小学校の子どもたちに対して、 旭小学校の5年生の作品を収めた CD を作って卒業のときにプレゼントして渡してあげると いったことをしております。「たからばこ作戦」の大きな目標は、左側の一連のところに示 されているように、ゲーム等の一方通行の交流ではなく、ICT を使った双方向的な交流に より、心や感性を磨き、造形・表現活動を通して、自己表現力やコミュニケーション力の向 上を目指すことです。旭小学校との連携については、まずは小規模学校から始めたいという ことで、市内にある旭小学校の渡辺先生の協力をいただいたことからスタートしました。そ の後は、上田先生の作品、子どもアトリエの作品を登録して活用を始めました。

それでは改めてシステムの紹介をいたします。先ほど皆さんに一回見ていただきましたも

のですが、これが外部サーバーを利用した専用サイトになります。ログイン後のトップ画面はシンプルな構成となっています。先ほど大輪のほうからも説明がありましたけれども、4つのアイコンから登録・検索作業を始めることができるようになっています。そのアイコンの下に「最近あなたが作成したプレゼンテーション」と「最近あなたが登録した作品」という項目があります。ここには、皆さんが自分の名前で登録した最近のものが表示されるようになっています。左側の丸の中に書かれている数字が現在の登録数となります。848というのが作品の数を表しており、1というのはプレゼンテーションの数を表しています。このようにして出来るだけシンプルというのを心掛けています。

データ登録は先ほど皆さまに見ていただきましたが、共通する場合、例えば授業の中で一括登録する場合、子どもたちの作品が 10 作品あったら 10 作品まとめて全部登録することが可能です。その場合は共通する部分だけを先に登録をしてしまいます。どこの学校、学年、といった授業ごとに登録することが出来れば、共通する部分が多いので、共通する部分だけ先に設定をして、一括選択をして登録をしてしまいます。

検索の部分も先ほど見ていただいたと思いますが、該当する検索項目を複数選択すること も可能です。複数選択した後、さらに複数項目を検索することもできます。これにより、小 学校1年で針金を使った作品だけを検索することができます。

次に、プレゼンテーションについて説明します。プレゼンテーションというのは教材のことであり、作品を別のメディアにて保存することによって、教材として作成することができますよということです。プレゼンテーションという名前が誤解を招いてしまうのですが、つまりは教材をつくるという機能を充実させています。

まとめに入りますが、この「たからばこ」のサイトは、会員制のサイトとして運営しております。このシステムを設計する際に最も考慮した点は、誰もが使いやすい環境であることです。それからデータ登録や検索だけでなく、交流プログラムの適応性ということも考えています。あとは著作権や個人情報への配慮ということも考えなければならないので、写真のところに©マークで「たからばこ」と入るようにしてあります。先ほど言ったように会員制ということで個人情報の流出にも配慮しております。課題として残っていることは、今回舘山先生に作品を撮影してもらいましたが、作品の撮影や登録に関するガイドラインが統一されていないことです。解像度の問題や写真のファイルの問題等を今後考える必要があると思っています。著作権や個人情報やセキュリティの問題に関して先ほど鳥原のほうから説明がありましたけれども、このあたりは非常に大きな問題ですので、今後どのようにして理解してもらうかが課題となります。国のICTを使っていろいろな教育が浸透しておりますので、学校現場とも連携して、セキュリティポリシーに対するモラル教育も一緒に考えていかなければなりません。情報リテラシーやメディア・リテラシーの啓蒙ということも併せて考えていきたいと思っています。

それから、インターネットを使った登録を考えている以上、今後過疎化・小規模化する学校における環境整備を充実させるということが、とても大事なのではないかなと考えております。そのあたりで支援することができたらと思っています。ただ、この点については、システムとは別にハードの面の部分で不安があります。一方で、新規参加希望校がおりまして、いろいろなところが参加したいと言っていますが、私たちにはまだ余裕がないので大きく広げることが出来ないのが現状です。今後この状況に対してどうすべきかを考えるのがシステムの方での課題として残っています。以上が私たちの「たからばこ作戦」に対するシステムの説明となります。

#### ○「たからばこ作戦」の実践について

#### ◆鳥原

私からは、皆さんにスライドをあと2枚ほど見ていただきながら、現状説明をさせていた だきます。

一つ目のスライド、現状で直面した課題、システムが実験レベルではあるもののひとまず完成したこと、著作権についても最低限のやり方ではあるのかもしれませんが、テストのレベルではクリアしています。こういったことが整いましたので、小規模ではありますが実験的に活動をしています。メインの研究フィールドは旭小学校で渡辺先生にご協力いただきながらやっています。

また、旭小学校だけでは研究を深めづらいという理由から研究対象・比較対象の地域として兵庫県の造形教室「こどもアトリエ」を対象として活動しています。旭小学校は皆さんご存知のとおり、山の中にある1クラス平均すると10人くらいの小さな小学校です。一方、「こどもアトリエ」は海が近い場所にあり、学校ではないので図画工作の枠にとらわれることなく、いろいろな学年・年の子たちが参加しています。その他に昨年は、実験的な例として都留市立第二中学校と宝保育所にも活動を広げてきました。これまでの成果ですが、著作権については実験的なレベルで実践ができました。作品データも850点ほど収集できました。

その他の成課としては、先ほど杉本から話があったとおり、研究フィールドで信頼関係を築けたことや、旭小学校で鑑賞や評価について提案することができたことです。またここで得た研究成果や課題を学会や研究会などで発表しております。これら成果は次号の大学紀要に掲載する予定です。

もう一つ大きなところで言うと、これは皆さんの資料の中にも入っていると思いますが「図画工作について」という冊子を作りました。これは図工・美術教室で図画工作についての教科観、図画工作ってこんな教科ではないかというのを皆さんで考えたいという趣旨で、非常勤の先生や一部学生にもご協力頂いて作られました。これは本学の図画工作の科目である「図工実技演習」のテキストでもあります。また教員免許状更新講習のなかでも使いました。ここに載っている写真は全部「たからばこ」で著作権をクリアしたものです。ですから著作権をクリアした写真を使い、活動のなかで得た考え方をまとめて授業で学生にフィードバックしています。最近、デジタル黒板が図工・美術棟にも入りましたので、こういったものを使って映像資料を活用していくということも考えています。

これらの活動をしていくなかで、当初想定していたこと以外にもさまざまな教育的な問題と可能性が見えてきました。このことも少しずつではありますが整理しています。この件に関しては、この後、舘山のほうから説明をさせていただきます。どうもお疲れ様でした。私の説明はひとまずここで終わります。

《休憩 10 分》

#### ○「たからばこ作戦」における研究活動の報告

#### ◆舘山拓人

舘山と申します。本学では図工・美術教室で立体実技と図画工作に関する授業を行っています。私の発表は20分程度ですので、いろいろ画像などをお見せしながら「たからばこ作戦」の教育的可能性についての研究成果を発表させていただきます。よろしくお願いします。

このデータベース「たからばこ」に作品を登録するには、子どもたちの作品をデジタルカ

メラで撮影することが大前提になります。撮影をすればするほど作品の登録数は増えて充実するのは確かですが、忘れてはならないのが、この活動では教育現場にある子どもたちの貴重な作品を扱うということなんです。撮影のために現場に何度も足を運ぶ中で、私たちは、ただ作業的に撮影し登録するだけではなくて、何らかのかたちで発展的にこのデータベースを活用し教育現場に還元していくことも大切なのではないかと考えるようになりました。そういっ



た考えからこの数年間で取り組んだ次の二点について、一つ目はメッセージカードを介した 交流、二つ目は作品画像を活用した鑑賞活動についての実践を紹介したいと思います。

それでは、一つ目のメッセージカードを介した交流のことについてご紹介したいと思います。まず、撮影活動についてですけれども、我々研究チームの研究フィールドとして協力いただいている旭小学校に定期的にお伺いしまして、様々な作品を撮影してまいりました。今お見せしている6年生の「わたしの小さな部屋」は、油粘土による作品ですが、この作品を撮影するときに研究メンバーの他に本学の図工・美術教室の学生にも参加してもらいました。それで、せっかく教員を目指す学生が実際に現場に行って参加するわけですから、先ほども申しましたとおり、単に作業的な撮影になるよりは、児童に向けて何か発展的な活動をしていきたい。そういう思いで、画像を使ってメッセージカードをつくり、制作して子どもたちに還元していこうということになりました。ですので、撮影する際も最終的にはカードに置き換えて子どもたちに渡すという前提で学生のみなさんには撮影してもらいました。

作品を撮影する際は、まずは作品の全体像を、そして学生の目線で子どもたちのいろんな工夫した点といったものをいろいろ感じ取りながら「ここがいいな」っていう部分に構図を絞り、撮影してもらいました。これがちょうど撮影している風景になります。ライティングや背景紙を置いてきれいに撮れるような状況にします。これは作品の全体像の撮影風景ですね。これは作品を鑑賞し、いろいろ読み解きながら部分の撮影を行っているところの写真です。次に撮影したものを何点かお見せしたいと思います。これは作品の全体像ですね。これは学生の視点でクローズアップした画像になっております。いくつかご紹介します。この写真はおそらくおうちの2階部分をクローズアップしたものだと思います。このように全体像と部分をセットで撮影をしてもらいました。

次に作品に対する感想をメッセージカードとして子どもたちに還元する試みを行いました。それがこちらになっております。これは二つ折りの構造になっておりまして、全体の写真と部分の写真を配置して子どもたちに向けてメッセージが書かれております。大きいスクリーンですと光が入って細かい部分が見づらいかもしれませんが、このような形で11名の子どもたちに向けてそれぞれオリジナルの11枚のメッセージカードを制作して、子どもたちに渡しました。

このカードを制作する上でいくつかの課題がありました。この撮影というものは基本的に放課後に撮影をします。ですので、子どもの姿がないわけですね。つまり、作品を目の前にして子どもたちと会話をしながら、「あっ、ここはこんなふうに工夫したんだね」っていうようなコミュニケーションがとれない、そんな制約がありました。ですけれども、そんな制約がありつつも、特にこの作品は粘土の作品ということもありまして、例えば指跡が残っていたりだとか、いろいろ力加減、なんと言いますか息づかいの痕跡が必ず作品に残っています。ですので、撮影する時に作品からの声を感じとったり、こだわりを持って制作した箇所を読み解く、そういった観察力、表現を読み取っていくってことが非常に大事になってきます。そういった表現をもとに言葉に置き換える、子どもたちに伝わるように表現するっていうことが課題としてありました。

この制作に関わりました学生のコメントも簡単ですけど少し紹介します。「なかなか現場に行くっていうことは難しいので貴重な体験ができた」或いは、「実際に制作の様子を見たわけではないですけど、いろいろ読み解くことで制作途中の情景ってものが浮かんできた」また、4年生が参加したこともあって、「卒業制作や論文の多忙な時期であってもこういった純粋な生き生きとした児童の作品に触れることは、やはり非常に良い刺激になった」というようなことを寄せてくれました。

このように制作されましたメッセージカードを後日、子どもたちに送らせていただきましたところ、感謝の言葉が寄せられました。全部は読めないですけれどもこれもいくつかご紹介します。例えば、「二階にお風呂があって楽しそうだね」という学生のメッセージに対して、本人はその部分を非常にこだわって作ったところらしく、「わかってくれて嬉しかった。コメントを寄せてくれた大学生に会ってみたい」といったことが書かれていました。それから、このカードはブラジルからの学生が作ってくれたので、ある種国際交流と言えますね。それから、そもそもこの図工の授業では、作品を大学生に見てもらう前提では制作されていませんので、「まさか大学の人から見てもらえるとは!嬉しい」っていうようなことも寄せられています。あと、あるコメントには「宝箱みたいなメッセージカード」って書いてくれて、たからばこ作戦っていうネーミングでやっているので、研究チームとしても非常に嬉しかったと思ったこともありました。このように「本人に会ってみたい」だとか、「分かってくれて嬉しい」という言葉からも、充実した言葉や心のコミュニケーションが図れたのではないかなと振り返っています。

次に、二つ目のデータベースを活用した新たな鑑賞ということですけれども、画像の有効的な活用を考える中で、今回、タブレット端末を用いた装置を試作しました。実はみなさんの一番前のテーブルの上に置いてありますのが実物なんですが、宝箱の形をしたものと紙芝居の形をしたものがあります。宝箱のふたを開けるとモニターを覗き込める構造になっておりまして、子どもたちが下を覗くと中に動画になった作品が見られる構造になっております。もう一つは紙芝居型の装置です。紙芝居の装置は、我々は馴染みがあるんですけど、今の子どもたちは分かるかなと思ったんですけど、図書室にもあるようで、この外見から「あ、紙芝居の箱だ」と子どもたちから反応がありました。これをですね、実際に研究フィールドであります旭小学校に設置をしてもらいました、子どもたちに見てもらう機会を設けました。まずはどういう動画なのかを、ちょっと短いですけどお見せしたいと思います。休憩時間にこの装置を後ろに置いておきますので、お時間ある時にちょっと見ていただけたらと思います。これはちょっと昔のロゴになっておりますけど、(スクリーンに子どもたちの作品が音声と共に流れる)これは2年生の作品を撮影したものを動画に編集したものです。画像は図工・美術教室の2年生から4年生にそれぞれ作品を撮ってもらいましたので、メッセージカードと同様にコメントを寄せてもらい、改めて動画編集して見られるようにしました。長

いのでちょっととばしますけれど、最後は映画風にエンドロールを作りました。子どもたちにお見せするバージョンでは子どもたちの名前も「作品を作ったみんな」というような形でクレジットし、コメントを寄せてくれた学生の名前とともにエンドロールに加え編集しました。これを実際に子どもたちに見てもらっている風景がこの写真です。この写真は研究協力者でもあります、渡辺雅彦先生に撮影してもらったもので、私もいろいろインタビューしましたけれどもせっかくですので、渡辺先生にこの時の2年生の様子であるとかいろい

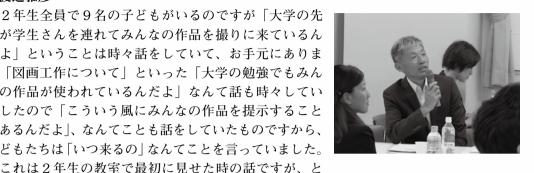


ろお話いただけたらと思います。この時はどんな状況でしたかね。

#### ○旭小学校における説明

#### ◆渡辺雅彦

2年生全員で9名の子どもがいるのですが「大学の先 生が学生さんを連れてみんなの作品を撮りに来ているん だよしということは時々話をしていて、お手元にありま す「図画工作について」といった「大学の勉強でもみん なの作品が使われているんだよ! なんて話も時々してい ましたので「こういう風にみんなの作品を提示すること もあるんだよ |、なんてことも話をしていたものですから、 子どもたちは「いつ来るの」なんてことを言っていました。



ても興味を持って見ていて初めて自分の作品が出てきたときに「おれの出た」とか「だれだ れちゃんのだ」とかとても興味を持って見てました。それで2回目の時も、「あ、じゃあ、 次は誰のが出るね」というようにそれなりに楽しみながら興味を持って見ているなと思いな がら見てました。

そのあと、玄関から他の階に上っていく階段の一番下のところに置いておいたんですけど、 休み時間が終わるときに外から遊んで帰ってくるあたりで見れるかなと思って置いておいた のですが、他の学年の子が「これはなんだなんだ」というようなことで覗いていると2年生 がそばにいて「これはだれだれちゃんのだよ」とか「おれのだよ」なんて解説をしながら満 足げな顔をして見ていました。ちょっと恥ずかしそうに遠巻きに見ている2年生もいたんで すけど、こういうことを介してまた他の学年の子どもたちと実際図工の作品のことを休み時 間に話をするなんてことは今までなかったことなので、良い機会になったと思いました。こ の「たからばこ |のかたち(紙芝居型のたからばこの投影装置)と同じような形が図書室にあっ て、それとすごく似ているので子どもたちには馴染みがあったかなあと思っています。この 大きさも、覗くような感じで皆がひたいをくっつき合わせながら見れるのでなかなかよいな と思いました。

#### ◆舘山

非常にあたたかい言葉でありがとうございました。そのようなことも子どもたちのなかで あったようです。私のほうで学生のメッセージを動画に編集した場合に課題が一つありまし た。先ほど紹介しましたメッセージカードと同様に、動画でもそういった交流が出来るかな あなんて考えていたんですけれども、やはりカードを読むのとは違って、動画上で表示され る時間がちょっと短かったので、なかなか充実した交流を図るにはまだいろいろ課題が残っ たと思ってます。けれども、現物の作品を教室や廊下等に展示して鑑賞すること以上に、他 者とのコミュニケーションが図れる可能性がある、つまり、動画を用いることで、同学年や 上級生といった他学年との時間であるとか、空間を共有することがあると。より作品を皆に 見てもらいたいとか、自分の作品が映像に出てきた時に言葉で伝えたい、というような学年 を超えた広がりのある活動になっていたのではないかなと振り返っています。

ちょっと時間が伸びておりますので、簡単にまとめをさせていただきたいと思います。ま ず撮影活動からメッセージカードまでのやり取りのなかでは、子どもの姿がありません。で すので、直接言葉を受け止めたりすることは出来ませんでした。ですけれども学生の様子を

見ていると、子どもたちに向けた様々な工夫や意欲的な活動というのが見られ、双方に分かってもらえた喜びっていうのがありました。では、なぜそういった言葉、あるいは心の交流が図れたかっていうのをちょっと考えていくと、今回ご紹介しました通り、直接学生が作品を見て撮影をしているっていうところ、あとそういったところから制作過程を読み解いてみようとする前向きな様子が見受けられたっていうことですね。「デジタル化された映像を用いた心のコミュニケーション」ていう風に言ってしまうと、一見するとドライな印象というか希薄な印象を持たれるかもしれません。ですけれども、この実践では今お話ししましたとおり、学生自らが撮影していること、そういった過程で作品と直接的な関係を持つことが出来た、そこに意味があるのではないかと考えております。もしその出会いがなければ、デジタル化された画像から読み解いたとしても、深まることは難しくて、ひょっとしたら表面的な交流になっていたかもしれません。ですけれども、その作品と学生と児童との直接的な接点がなくともこういった交流が出来たのは、そこの接点に活かせたっていうところにあるのではないかと考えております。

それから、図画工作科ということで学習指導要領に定められている内容とちょっと照らし合わせてみたいと思いますけど、現行の指導要領では各教科においても言語活動の充実に配慮するよう求められています。図画工作に関しては、A表現、B鑑賞というような活動があるなかで特にB鑑賞の指導のなかで、今スライドに出ているようなかたちで言語活動の充実について十分配慮することが記載されています。前提としては子ども同士が活発に意見交流できる環境をつくる、そういった配慮が述べられています。都留という地域特性を考えていくと、どうしても都市部と地方では子どもの人数に差があるというのが現状としてあります。なので多様な作品を理解し共感し合うことっていうのは人数比率で言うのもあれですけど、やはり難しい側面があると思うんですね。そういったなかで地域特性を考慮した環境の構築を考えるうえで、この実践での動画を介した交流であるとか、このメッセージカードといった言葉のやり取りというものは、子どもたちにとって広がりを持った新たな環境を提供できるのではないかと考えております。ですので、教育現場と大学が連携してこのような活動ができれば、図画工作における作品をより豊かに読み解くこととか、心のコミュニケーションの充実、あとは広い社会を視野にした言語活動と鑑賞活動の充実が図れるのではないかというふうに考えています。

最後ですけれども、ここでの子どもと学生の広い意味で言えば社会の間を取り持つのは作品です。作品が媒体となった心のコミュニケーションのあり方が、そもそも図画工作や美術がもつ特性でもあると考えています。ですので、この実践を活かすとともに図工美術の特性を理解しながら、都留という地域特性を理解して発展的な関係を構築していくことが大切なのではないかと思っています。ちょっと時間をオーバーしてしまいましたけども、以上で発表を終わりたいと思います。ありがとうございました。

#### ○まとめ

#### ◆鳥原

では、私のほうから「たからばこ作戦」について簡単にまとめさせていただいて、その後、 小松先生から少しコメントをいただきたいと思います。その後少し休憩をとりたいと思って いますので、もうしばらく頑張ってください。

では、「たからばこ作戦」について現状のまとめをしたいと思います。まず、今後の「たからばこ作戦」を考えるうえで我々のイメージ、認識しておかなければならない問題が三つほどあると思います。少子化や高度情報化社会については杉本のほうから話があったので、ここでは省略します。ここでは図画工作の今後の課題として、新たな能力観について注目し

ておきたいと思います。最近さまざまな能力観が提案されています。去年、初等教育学科の特別講演でも小松先生に来ていただいて、OECDが提案する能力観についてレクチャーをしていただきました。新しいところでは、「国際バカロレア」といったキーワードも聞こえてきます。こういったことを全く無視して、図画工作のプログラムを考えても、図画工作の意義を説明することは難しいのではないかと思います。私は、少なくともこういったことを視野の端に捉えていなければならないと考えています。

そして、「たからばこ作戦」で我々が提案したいことをまとめると、以下の三つになると思います。まず図画工作のイメージを「作る」といった技術指導中心の発想から、それをベースに心のコミュニケーションを積み上げられないかと考えています。

これは、これまでの図画工作を否定するという発想ではなく、これまでの様々な活動概念が積み重なって今の図画工作のかたちがあるわけですから、その上に更に「心のコミュニケーション」という考えを積み上げることを提案したいと思います。次に子どもたちのイメージする世界、教室だけでやっていた活動が大学につながったり地域につながったり、将来的には遠隔地・神戸につながって、自分たちは都留のまちに住んでいるけど、世の中にはいろいろな人がいて、様々な地域があって、そういったなかで自分も関わり合いながら自己を意識したり世界をイメージしたりしながら、図画工作を通して子どもたちの世界観を広げられないか、という可能性を提案したいと思います。

最後にICTを使いながらも、舘山の話にもあった通り、ドライな活動ではなく図画工作本来の考え方、のびのび生き生きとした表現活動と心の通い合う環境をつくっていきたい、こんなことを提案したいと思います。

これまでご説明してきたとおり「たからばこ作戦」を行ってきましたが、課題も山積しています。ここで課題について少し説明させていただきます。杉本のほうから話があったように、新たな参加希望者にどのように対応するべきかについてです。ここでは著作権がとても大きな問題となりました。皆さんにお配りした資料の中に、こんな1枚紙が入っています。ここで読むには文章も長いですし、前半は専門的すぎてなかなか難しいのかなと思いますが、後半のところだけでも是非お時間のある時に読んでいただきたいと思います。これを書いたのは、私の藝大時代の恩師であり上司である、北郷悟先生です。藝大では著作権は非常に大きな問題になっていまして、音楽を例に挙げますと、演奏会直後に舞台袖で著作権担当の事務局員が待機して、舞台に上がる前に許諾のサインを書いてもらうそうです。なぜかというと、1人でもサインがないと、その映像とか音源が使えなくなっちゃうんです。それくらい厳密にやらなきゃいけない。これが国際的な規格だそうです。

ですから図画工作で著作権をどのように考えていくべきかというのは、非常に難しい問題です。これは厳しくやればいいということだけではないんですよね。厳しくやりながら使いやすい現実的な方法を模索しなきゃいけないのかなと思います。その著作権を僕たちだけで考えていてもなかなか深まらないので、今後はよその実践例・先行例を見ながら具体的なやり方を模索していかなければならないと思います。また、どうしても我々は大人だけの立場で考えがちなのですが、こういった活動の可能性や価値は子どものほうにもあるわけですから、子どもの立場に立って考えていく、こういったことは現場の先生から声をかけていただいて、ご意見を拾っていかなきゃいけないと思います。

現在「たからばこ」にはデータが 850 点ほどありますが、どんどん規模が大きくなると、著作権だけではなくサーバーの容量だとかシステムなど様々な技術的な問題が出てきて、研究規模が大きくなっていく可能性があります。ですから、我々としては大型の研究費にも挑戦したいと思っています。また、ICT の技術はさらにどんどん進歩しています。新たな技術として最近テレビで 3D プリンターなんかをよく紹介していますが、都留にいるとなかなか子どもたちが 3D プリンターの実物を見ることは無いと思います。しかし、東京の秋葉原

あたりを歩いていると、電気屋さんの店先に置いてあって子どもたちが普通に見ています。ですから今後、我々の想像以上のスピードで普及していくと思います。先日も東京藝術大学の恩師である彫刻家の深井隆先生との話しの中で、すでに 3D というのは作家が木や石を選ぶように素材の一つ、それくらいになっている。だから、小学校でも当然そういったものが入ってくるだろう。また今の子どもたちのほうが、導入のハードルが低いので急速に普及するのではないか。こういったことについての対応を考えるべきだ、とアドバイスを受けました。このように新しい技術へ対応していくことも大切であると考えています。最後に我々が行っている研究はまだ実験レベルで、実質的な活動は1年、2年程度なんです。ですから、やり残しがたくさんあります。当初想定していたところでは旭小学校や他の学校を、他の校種や他の地域につなぐこともやってみたいと思っています。

では最後に、図画工作に関する考えを少し述べさせていただきます。「図画工作って一体何のための授業なんだ?」ってよく言われます。特に、昨今、図画工作不要論もよく聞かれます。図画工作の活動はべつに芸術家を生み出すための活動ではありません。私が考える図画工作のもっとも大きな目標とは「美しい」とは何か、「良い」とは何か、そういうかたちのないものを突き詰めて考える、そういうことを通して、世の中のいろいろなものを理解して、よりよい文化的な社会のための基盤をつくることなんじゃないかと考えております。そうすると「美しい」とか「良い」とかを感じ取ったり、考えたりできるそんな『力』というか僕は『心』に近いんじゃないかなと思っていますが、そんな『心』を育むことが大事なのではないかと考えています。

以上で私からの「たからばこ作戦」の説明と報告とさせていただきます。

### 「たからばこ作戦」意見交流

助言者:東京藝術大学准教授 小松 佳代子

東京藝術大学の小松と申します。アドバイスは出来ないですが感想でいいと言われたのでやってきました。「たからばこ作戦」については、去年、東京藝大で開催されました美術教育研究会で鳥原先生と舘山先生が発表されて、その時からすごく興味深い実践だなと考えています。その興味深さの中身について、私の専門が美術教育なのでその観点からお話しできればと考えております。

一つ目は、先ほど舘山先生の発表で子どもたちがいな いところで、子どもの生の声が聞こえないという制約が



あるという風におっしゃったのですが、私は、実はそれは制約ではなくてそこに意義があると思いました。この発表を最初に聞いた時から思っていたことで、中田基昭さんという方が書いた『教育の現象学』という本のなかに書かれていることなんですが、図工の時間で子どもたちが作っている時間はずっと流れているのですが、図工の時間が終わって子どもたちが帰った後に撮影が行われる。撮影について中田先生が書かれているのではなくて、教師の言葉がけということを中田先生は書いていて、つまり人間の経験・体験ということはここの時点では意味が決まっていないということですね。例えば、何かを描いたり消したりして子どもたちが何かを描いている。その最後に先生が「何、もたもたやっているの」って言ったらその経験はすごくダメな経験になってしまう。

でも、もしその先生が同じことをやっている子どもに違う言葉をかけたら、例えば「すご く試行錯誤してよく考えたねしって言ったら、この経験の意味は変わりますよね。でも、やっ ていることはもしビデオをとって巻き戻したら同じことをしていますよね。子どもがやって いることは同じことなんですが、その後の教師の言葉によって後から意味ができるってこと が、中田先生の本を読んでいて「同じだな」と思ったのです。つまり、子どもたちが作る時 は別にこれが「たからばこ」の画像になるとかそんなことを期待して、あるいは大学生にい い言葉をもらおうとか期待して作っているわけではなく、ただ作りたくて作っているんです けれども、撮影をしてそのあとメッセージが来て、そのことによって、つくったことの意義 が初めて「これはすごく素敵な作品になったんだ」という意味が生まれる。だから私は、そ れは制約ではなくてすごく可能性があることだと思いました。特に学生さんが撮影されてい るということで、学校の先生がこの中にもたくさんいらっしゃると思うのですが、その場に もし、子どもがいたらその子が何か言ってきますよね。それに対してその場で言葉がけする のはすごく難しいですよね。その場で反応するというのはベテランの先生だったらいいです けど、まだ勉強中の学生さんたちが、その時に子どもたちの経験の意味を生み出すような言 葉を言えるかというと難しいと思います。結構経験値がないと言えない。そうなると一旦持 ち帰って子どもたちのいないところでじっくり見てメッセージを返すってことはすごく意味 があるなっていう風に思います。で、そのことをジョン・デューイという教育学者が書いて いる『経験としての芸術』という本があって、そのなかのひとつの言葉を考えながら想起し ました。デューイは、「経験された事柄が充足に達して初めてひとつの経験をしたというこ とになる」と言っています。「経験」と「ひとつの経験」は同じ言葉ですよね。でも、「充足」 に達して初めて「ひとつの経験」となると言っているんですね。「充足」って「フルフィル メント」ですけれど、それは何かというとデューイにはいろいろな考えはあるんですけど、私はこの文章を読んだ時に「この私のかけがえのないこの経験」という意味だと理解しました。「この私のかけがえのないこの経験」というのは自分のこととしてそのことを経験できる。ただ図工の授業だからそれを作ったのではなく、自分の作品になるからそれを作ったということを経験するという、そういうことが「充足」だと私は理解しました。ひとつのつまりこの私の一回きりのこの経験=「ひとつの経験」と理解しました。その時にこの「私の」っていうことが重要なキーワードになると思っています。それはさっき鳥原先生がおっしゃったインターナショナルバカロレアという政府のほうで推進しようとしている教育にも関わってきます。

バカロレアというのは、もともとフランスの大学などに入学するための資格です。日本で いうと大検にあたる…。少し違うのですが、そのバカロレアをとると大学に行けるという資 格のことなんですが、これを国際的に世界全部の大学に行けるようにインターナショナルな 制度やカリキュラムを作ろうとして 1968 年から始まったものなんです。今、安倍政権になっ て、2018 年に日本にそのインターナショナルバカロレアの認定校を 200 校にしようという 目標が立てられています。そういう政策になってきたのはグローバル人材育成の流れの中の 政策なんですけど、もともとインターナショナルバカロレアっていうものは 50 年くらい前 にできたものなんです。そこで目指されていたものは、実はそういうことではありません。 これはいっぱい本が出始めているので、書店に行かれるとすぐ目につくかと思うのですが、 私が考えるのは、IB(インターナショナルバカロレア)っていうのは、世界の調和的未来 のために出されたカリキュラムなんです。それを日本ではなぜか、国際競争力という名前の 下に、経済界の求めたものに応じて教育が動いてしまっているのでちょっと違うのですが、 その教育の中身のことをいいますと、一番大切なのはいろんな調査や探求をすることにあり ます。日本でいうと総合的な学習の時間というようなものをたくさんするんです。そこで一 番大事にされているのが、自分の問題としてものごとを考える。どんなに遠くの問題でも自 分の問題として考える。さきほど言った「私の」というのがキーワードとなるというのはそ ういう意味です。つまり、インターナショナルバカロレアっていうのは今の日本の政策にお いては、世界で日本の物が売れる、日本の企業が儲かることに結びつけて考えられています けれど、もともとの意味はそういうものではなかったと私は思っています。

そのうえでもう一点だけ、杉本先生がおっしゃったことと関わってインターナショナルバ カロレアとつなげて考えたいなと思いました。それはインターネットというのは場所の制約 がない、場所を問わないということですが、そのことと杉本先生は双方向と言われました。 そのことが「たからばこ」ではすごく大事なことだと思ったのです。双方向というのはイン ターネットの世界に対して地域の方からネットの世界に向けてアクセス・アップロードして いく、やりとりをしていく、そのやりとりというのは世界の問題=場所のない問題と、場所 =自分の生きている場をつなぐということなんです。さきほど舘山先生と鳥原先生が、イン ターネットという ICT を使いながら心の問題を考えたいとおっしゃったときに、世界観を 広げるとおっしゃったんですけれども、世界観というのは、実はほっといて広がるものでは なくて、世界の問題、例えばインターネット上に世界の子どもたちの絵がアップロードされ たときに、それをもう一回自分の問題として考える。自分の問題として考えた時にこのイン ターネットの先にもうひとつの別の地域があるという、その先に人がいるというローカル→ グローバル→ローカルみたいな感じ、ローカルのものをグローバルとつなげるその先のロー カルのものに思いを馳せることができるという、そういうつなぎ方ができるということが本 当のグローバル人材だというふうに思うんですね。国際的に物を売りに行く人が、ディベー トをして相手を打ち負かして国際競争力を高めることがグローバル人材のもともとの意味で はないと私は思っていまして、インターナショナルバカロレアというのは先ほど言ったよう

なそういう子どもを育てたいという理念で始められたんだという風に思っています。そうい う意味でこれは図工・美術の実践ですけれど、図工・美術は最後に鳥原先生がおっしゃった ように、形のないものの「良さ」とか「美しさ」とかそういう形のないものを感じとる心を 育てるものです。今むしろ世の中は形を求める方にいこうとしているんですね。形のないも のではなくて、形のあるもの(具体的なもの)を具体的なままに、具体的なものを具体的な 数字で表せることを重視する。機能化と言いますけど、たとえば GPA とか大学の先生しか 分からないですけど、どういう成果がでましたとか、何パーセントの子どもたちがどのくら いの学力が伸びましたとかいうような、学力テストもそうですけど、そういった具体的な数 字とか、具体的なものを具体的な数字で求めることに対して、図工・美術というのは形のな いものをきちんと感じとって、形のないものをなんとか形にしていくという、そういう抽象 的なものを形にしていくということです。この「たからばこ作戦」について私が考えたこと は、そういう「良さ」や「美しさ」を感じられる子どもを育てられるということ。その理念 自体も形のないものですけれど、そのなかでこの都留という地域で、でも子どもたちがちゃ んとした世界観をもって世界の子どもたちとつながっていくという、これも形のない理念で すけど、それを形にしていくシステムなんだろうなという風に思ったというのが私の感想で す。以上です。

(拍手)



#### 鳥原

小松先生ありがとうございました。このことについて 後ほど少し時間をとって更にお話を聞ければと思います。 ここで一旦休憩を取りたいと思います。 3 時まで休憩 とさせていただきます。その後は、上田先生から、先生 の主宰されている「こどもアトリエ」の活動について写 真などを見ながらお話しを聞きたいと思います。

#### 舘山

休憩時間の間に、後ろにたからばこ型と紙芝居型のモニターが見られるように準備しておきます。興味のある方はご覧ください。

#### 【休憩】

#### ○「こどもアトリエ」の活動

鳥 原: では時間になりましたので上田先生の活動について写真を交えて上田先生からお

話しいただきたいと思います。改めてご紹介します。兵庫県西宮市の造形教室「こどもアトリエ」を主宰されています上田由紀子さんです。 参加人数は何人くらいですか?

上 田: 60人くらいです。

鳥 原: ほぼ旭小と同じくらいの人数ですね。後ろの 壁をご覧ください。地球儀の作品の展示風景が ありますが、年2回「さつき展」という展覧会 をされていて子どもたちが1年間制作した作品



を展覧会で発表するといった活動をされています。そのなかで、こちらの壁にありますのはガラス絵ですか?

上 田: こちらはガラス絵で、こちらは木版画です。

鳥 原: 皆さんはガラス絵って知っていますか?上田先生、少し簡単に説明してください。

上 田: ガラス絵っていうのは、ガラスの裏から絵を描いていく絵で、本来絵を描いていく上で、一番最後に描くところを一番初めに描きます。例えば魚の絵でしたら、魚の目なんかは一番最後に決めて描くことが多いと思いますが、ガラス絵では、まずは、目の位置を決めてそれから体の中のひれを描いたり、細かい所から描いていって、絵を描く順番が逆になります。それをやった後に、裏に板を置いてあるのですが、その板にも色が塗ってあって色が複雑になっていくようになっています。そして周りのフレームも自分たちの絵に合わせて自分自身で色づけしていきます。

**鳥 原**: 小学校のなかではやらない課題に挑戦されているところが非常に興味深いです ね。ではいくつか他の写真を見ながら上田先生に少し説明をお願いしたいと思い ます。

上 田: これは、ちょうど今年のさつき展のときの写真です。歌川広重の「冨士三十六景」 の絵の模写をしました、同じ課題で幼稚園から高校生まで制作しました。手前が 中学3年生の男の子で、向こう側が年少さんで、3歳か4歳くらいの女の子が同 じ机で作業をしています。

鳥原: まったく同じ課題ですか?

上 田: まったく同じ課題です。

**鳥 原**: 学校では校種や学年を超えて一緒に活動をすることはあまりないと思います。ひとつの机で向かい合ってやっているということが面白いと感じました。これを見るとずいぶんいろんな子どもがいますが年齢的にはどうなっているのですか?

上 田: 年齢的には本当にばらばらで中学生3年生と高校1年生と小学6年生・4年生くらいですね。小さい子になるともっと小さく幼稚園生から6年くらいの人がいます。さっきの(映像は)高校生と小学生くらいが狭い所にきゅっとみんなで同じモチーフを見ながら同じ作業をしているところです。

鳥 原: 少し作品をみせてもらえますか?これは何年生ですか?

上 田: これは2年生です。2年生の男の子の作品で、魚が好きな男の子の作品です。

鳥原: これは、何染めというんですか?

上 田: これは絞り染めなんですが、針と糸で彼の場合は魚の形をちくちくと縫っていって絞って色をつけて、上手くできているかどうかは開くまで分からない、という作品ですが上手くいきました。

鳥 原: 非常にきれいですね。実際の制作風景はこれですか?

上 田: 制作風景はこれですね。

鳥原: これは違う人の作品ですか?

上 田: これは違います。これは幼稚園の子の作品です。

**鳥 原**: 非常に小さな子がこういった作業に集中しているというのはとても興味深いと思います。

**上 田**: そうですね。幼稚園の子どもたちがちくちく縫うのがすごくかわいくて写真を 撮ってしまったんですけれども。

**鳥 原**: 導入はある程度完成するイメージを説明してからやるのですか?実際に作ったものを見せるのですか?

**上 田**: これの場合は、自分が今、何をやっているかということを理解しながらやってい かないとなかなか子どもたちも納得していかない、「何かをやらされている」とい うことになってしまうので、こちらで作ったサンプルを見せて手順を説明します。 子どもたちは自分たちがそれができるのかどうか考えながら、ワクワクしながら 楽しみながらやってくれました。初めにどういう説明をしていくかということが 結構大事なポイントだと思います。

鳥原: では、少し違うシリーズにします。これについても説明お願いします。

上 田: これはスタンプです。数字の大きいスタンプ、これは私の手作りなんですけれど、これを使って好きなように構成をしながらぺたぺた押していってくださいと言いました。大きなハンコと小さなハンコといろいろなサイズのハンコを用意してあって後は好きにしてくださいと渡したら、こうやって0とか8が花の模様になったり、更に指を使ったりしました。

鳥 原: 完成した作品を見せてください。これは何年生くらいですか?

上 田: これは3年生の女の子ですね。

**鳥 原**: 小学校の活動で「版に表す」という活動があります。版画とも若干違う活動なので、こういった活動例は参考になると思います。これなんかはそういったものを使って魚自体もスタンプですか?

上 田: 魚自体も同じスタンプを使って、形にどんどん押していって黒くしていく作業をしていて、後は、水のイメージをどういう風にしていくかっていうのを数字で押していきました。

鳥 原: 小学校とは少し違った雰囲気ですね。これは、何歳くらいですか?

上 田: 幼稚園年長さんです。

鳥 原: 電動糸のこぎりですか?上手に使えるんですか?

**上 田**: 使えます。力が足りない子は、少し手伝ってと言われるんですがやっぱり自分で やりたがります。

鳥原: やりたがりますか?

上 田: やりたがります。ちょうどこの時はボード板を使って時計をつくろうと言って木 工作業をしていました。そのボード板を、電動糸のこを使って好きな形に作って いくその途中ですね。

鳥 原: 機械を使うことについて、特に小さい子は怖いとか難しいといいませんか?

上 田: いや。意外とないですね。怖いけれどもやりたがる子どもの方が多くて、幼稚園 の子などは、我々が後ろについたり少しサポートしているので大丈夫です。でも 反対に怖いということが分かっているので思わぬケガをしたということは一回も ないです。見ている方も怖いけれども、木が自分の思った形に切れることの方が 楽しくて仕方ないようです。

鳥 原: 完成した作品をいくつか見ていきましょう。これは時計ですね。このように小学校ではやらない課題ということと、小学校では想定していない学年の子どもたちに道具を使わせている。道具を使うチャンスを積極的に与えていくことが非常に興味深いなと思います。もうひとつが、年齢や校種が違う子どもたちが一緒に作業して、お互いの作品をみるということが、「たからばこ作戦」の概念に重なっていてとても参考になりました。

上田先生ありがとうございました。限られた時間ではありますが、質問や感想でもかまいません。皆さんと少し対話が出来ればいいなと思います。

発言者: 私、都留文科大学非常勤講師の竹内と申します。私はこの学校で、図画工作実技 演習を担当しています。教育現場の情報がないと生きた授業が出来ないと常々感 じています。学生による撮影、メッセージカードによる関わりなどは、表現活動 や観賞活動の充実が図れると思いました。 鳥原: 舘山先生なにかひとこと。

**舘 山**: 感想ありがとうございました。観賞活動ですが、図画工作の教科観を考えたときに、こういった活動をぜひとも大学の授業の中で反映していただけたらと思います。先ほど小松先生の話もありましたが、私は、学生が撮影する上での子どもたちの声が聞けないといった制約があると言いましたが、子どもたちの制作のプロセスの中では、むしろ、様々な思いや自由なアイディアがめぐり思考を重ねながら制作しているわけです。後に撮影された画像であっても、時を経て鑑賞する機会があることで、子どもたちにまた一つの経験、循環していくというところが大切なんだと。また、そういったサイクルを学生が感じることで学生自身の感性が養われるのでは、そういったサイクルを学生が感じることで学生自身の感性が養われるのでは、そういった視点を持った教員を育てることができる、そんな可能性があると思います。もちろん現場の活動の中で充実を図るのもそうですし、今お話しした観点からでもそういった充実が図れるということは、教科観を見据えていく上で非常に大切なんだなと、竹内先生の感想と共に先生の話を聞きながらそんなことを考えていました。

鳥 原: たからばこ作戦の話なので、少し私からも。我々大人や大学の人間という立場から、小学校の子どものところへズケズケと入り込んでいっているのではないか、ご迷惑なのではないかといった罪悪感のようなものを感じます。こういった活動について子どもたちはどんなふうに反応しているのか、子どもたちが本当に喜んでくれているのか、子どもたちも言いたいことがあるんじゃないかなとか考えたりします。その辺のことに関して、渡辺先生どうですか。何か子どもたちからの反応について忌憚なくご意見いただければと思います。

渡辺: 今回、2年生に作品を見せたのですが、子どもはもう自分の作品がモニターの中に出てくるだけですごく嬉しいようです。自分の作ったものがああいうかたちで出てくると、なにか別のものになったような感じがして、すごく充実感というか喜びを感じているんじゃないかなと思います。まあ、僕は2年生担当なんですが、2年生のなかでも他の学年の子が作品を見るようなときに、ちょっと遠巻きで見ていたり、ちょっと恥ずかしいんだろうなというところを見せる子もいましたので、高学年になってくるともしかしたら私の作品を見せたくない、というような事を考える子どももいるのかなぁと感じました。その辺のこととか、色々な作品が出てくるときに、なんであの子の作品はあって、この子はないんだろうとか、色々考えていかなければいけないところとか、こっちの方で心がけていかなければいけないこととか、まだまだたくさんあるのだろうとは感じています。でも、やっていること目指していることはとても有意義で、現場の私たちにとっても役立つことかなあと考えております。

**鳥 原**: ありがとうございました。では「たからばこ」についてどなたか、ご意見・ご発言頂けるかたいらっしゃいますか?感想でも。

発言者: 都留文科大学初等教育学科2年の西野と申します。ぼくの体験をちょっと話したいと思います。ぼくは小学校のころから図画工作が大好きでした。しかし、最初から好きだったわけではなくて、幼稚園と小学校のそれを通してよい先生に恵まれたから好きになったと思います。どんな先生かというと、僕は非常に凝り性で時間を飛び出して授業の終わった後も作り続ける方だったので、どうしてそんなに時間をたくさん使うんだとか、授業の時間内にやってくれとかそういう風に言うのではなくて、むしろ完成させたときに「何々君良くがんばったよね」とか「みんなは知らないと思うけど、学校が終わった後に何々君は残ってやっていたんだよ」という風に先生がいってくれたりとか、もしくはその作品で賞を取ったりし

たらそのことも、クラスでみんなに教えてくれたり、たくさん評価してくれました。 そういうことがすごく僕にとってエネルギー源になりました。もうひとつ大事だ なと思うのがその周りの友達と作品を共有するということがすごく大切だったな と、それをするために先生たちが作品を周りの友達に紹介してあげることが有意 義だったなと思っています。

それで紹介することで「お前の作品ってすごいな」と周りの人から言ってもらえたり、アドバイスをもらえたりとか、そういうことがすごく原動力になったので、この「たからばこ作戦」というのは非常に有意義だなと思いました。

**鳥 原**: はい。ありがとうございました。「たからばこ作戦」に限らず今日の先生の講演 も含めて何か質問とかあれば。

質問者: 本学専攻科1年の早坂と申します。昨年度、図工・美術専攻として活動していて 卒業しました。今年の冬に専攻科で研究論文を書いて修了するのですが、さきほど の小松先生の説明にあった「この経験は、ひとつの私の経験」ということについ て小松先生に質問したいと思います。図画工作は作品を作っていく過程があって、 それで作品ができて教師からの一言だとか周囲の一言でひとつの経験になるとい うお話だったと思うのです。私は今年の研究論文では、作文教育について研究をし ています。表現するということで図画工作と似ている点がたくさんあると考えて いますが、作文は図画工作とは逆に一つの経験が個人のなかにあって、それを表 現することで作品が出来上がると思っています。ですが、子どもたちの意識のな かには、「こんなことがありました、楽しかったです、うれしかったです、また今 後生活に活かしていきたいです」というような一つのかたちが出来上がっていて、 表現することによって逆にそれが自分のものでなくなってしまうということが多 いということがあって、教師側としては表現することで図画工作と同じように自 分の経験として表現してほしいということがあるのですが、子どもたちの意識と 教師側のねらいのその差を埋めるにはどうしたらよいのか自分のなかで悩んでい ます。

**鳥 原**: 専門が若干ズレるようなところがあるので、答えにくいのは重々承知ですが、小 松先生の経験から何かアドバイスやコメントがあればお願いします。

**小 松: 今の作文教育というお話を聞いていて、今日の話をする時に生活 綴 方について** ちょっと考えていました。生活綴方と「たからばこ作戦」は何が違うのかという ことを考えたんですけど、生活綴方っていうのは、自分の身近なところから社会 の問題を考えるっていうことなんですよね。だから、そういう意味では、社会に 開かれていく実践ではあるんですけど、それをもう一回自分の問題に戻していく ところの仕掛けがあまりないなと思ったんです。「たからばこ」のほうには、さっ きの学生さんたちからのメッセージカードとか、そこにある「たからばこ」とか、 自分のところに返ってくる仕掛けがたくさんあるんですよね。だから作文教育も一 回表現するときにはたぶん子どもたちのなかにあるフォーマット、何々がありま した、楽しかったです、もっと何々したいと思いますっていうように、なにかフォー マットで書いてしまって、それはまあ図工で言ったらキットでこういうふうに作っ たらランプが出来ますみたいな、そういうもともと教材として売られているキッ トをつくるみたいな感じで、作文教育はおそらく自分のものでなくなってしまう。 むしろ場所性がなくなってしまうっていうふうに思うんですけど、それをもう一 回本当にそれが自分の作品なのか自分の表現なのかっていう問いを子どもに戻す。 具体的なアドバイスは出来ないんですけど、そういう仕掛けがもっとたくさんあ るべきだろうと。それは別に図工とか作文とかだけじゃなくてあらゆる教科に必 要だろうと思うのです。公式を覚えて問題が解けたら終わりではなく、それをもう一回自分のものにするっていうところが、たぶんそれが、私がさっき言った国際バカロレアでは全ての教科においてなされているので、今着目されているのだろうと。すみません、具体的なアドバイスじゃないんですけど、そういうふうに思います。

- 鳥 原: はい、ありがとうございました。まだ若干時間がありますが、いかがでしょうか。 上田先生、「たからばこ作戦」についてご意見いただけませんか?実は上田先生に は、初期の研究からもう5~6年、間接的・直接的に関わっていただいて、様々 なことにご協力頂いているのですがせっかくの機会なので、いいことも悪いこと も忌憚なくご感想や要望などあればお願いします。
- 上 田: 私が教室を開き始めたときに、手探りでいろんな工作を始めたのですが、1年2 年やっていくうちに、やっぱりこれはだれか家族とかに見せていかないと子ども たちがやってきたことが誰にも知られないまま消えていくんじゃないかなと思っ て、展覧会を開き始めたんです。それはちゃんとした展示というよりも展覧会を していきたいなと思って、それで展覧会を1回2回と開いてみたのですが、親御 さんとかおじいさんとかおばあさんとかが来た時に、自分たちの子どもの作品を 見たらスッと帰って行ってしまったんですね。それを私はずっと会場で見ていて、 なんかそれが展覧会じゃないなっていうのを感じ始めました。じゃあどうしたら 他の人の作品も見に来れるような良い展覧会にできるのだろうか、というところ から展示に対する考えがどんどん変わっていきました。だから、時間をかけて良 いものを作ってたくさんの人に見てもらって、子どもたちもお茶出しとかに手伝 いに来たりだとか、いろんな場面でいろんな人に褒めてもらったり、それが言葉 にならなくても「わー」の一言や、展覧会場に入ってきたときの皆の雰囲気で感 じとるようになってきました。こうして鳥原先生とか皆さんがそれに参加してき てくださって、いろいろと評価してくださって、だんだんとみんなも次の展覧会 のときにはこうしたいとか、子どもたちからの発信も出るようになってきました。 だからいろんな人が子どもたちの作品に関わっていくっていうことの大切さはす ごく感じているので、これをどんどん広めていただければ良いかたちが出来てく るんじゃないかなと思います。
- **鳥 原**: はい、ありがとうございます。多くの方に見てもらえるように頑張りたいと思います。
- 杉本: 先ほどのシステムの説明のところで、画像=写真のことだけしか説明していなかったんですけど、映像も登録できるということを皆さんに紹介したいと思って用意しました。映像もですね、先ほどの上田先生のアトリエの作品なんですけど、このような映像を作ってみました。(映像をみせる) こんな風に映像を作って登録しておけばサイトでも直接見ることができます。もうひとつは、舘山先生がつくってくれたものなんです。(映像をみせる) これは写真に撮ったものを組み合わせることによって映像に変えていく、これはデジタル画像の得意とするところなんですけど、こういうふうにして映像を登録しておくとこんなふうに使うことができますし、いろんな加工をして教材として使うこともできると思います。こういう画像だけでなく映像も登録できて活用することができるという紹介の補足をさせていただきました。
- **鳥 原**: これは実際旭小学校で見せたんですね。せっかくなので旭小学校で映像を見せた 時の様子などをちょっと話していただけますか。
- 渡 辺: ちょっと前になってしまってうろ覚えなんですけど、この時、取り組みの最初の

頃にやってくれたものです。これは子どもたちのパラパラ漫画という、紙の端っこを留めて手でパラパラパラとやると絵が動いて見えるっていうものなんですけど、それを一枚ずつ写真に撮って動画にしてくれたものをCDにまとめてもらいまして、それを子どもたちに暗い中で見せたんですけど、コメントが出てきたりだとか動画のアレンジがあって、面白いところを何回も繰り返してくれたりとか何回もやってくれたりとか、子どもたちはすごく興味を持って楽しんで見ていました。それをまた子どもたちは何回も見たりだとか、次の学年の授業の前に見ることでまた意欲を喚起するなんてことにも使えましたので、とても良かったと思っています。

鳥 原: はい、ありがとうございます。実は、我々はこういった取り組みをしているなかで昨年ですかね、南都留の教育フォーラムのなかでも提案というなかで発表させてもらいました。今日も来ていただいていますが、教育事務所の小林さんに感想といいますか、なにかお言葉をいただければありがたいと思います。

小 林: こんにちは。富士東部教育事務所の小林といいます。建物は都留文のすぐ下にあります。「教育事務所」という言葉は何となくスッと耳に入ってくると思いますが、一体なにをやっているところなのか、なかなか理解してもらえないところです。簡単にいえば県の教育委員会の出先機関というように捉えていただければよいと思います。そのなかで私が担当しているのは、いわゆる「社会教育」です。この事務所のなかでは、「地域教育」と呼



んでいます。具体的にどのような仕事をしているのかというと、各団体が連携活動をするなかで、お互いに持っている力を発揮できるよう、地域全体で子どもたちの健全な育成を図ってくことを目的として、地域のいろいろな団体、または幼稚園・保育園から小・中・大学、お年寄りまで関わりながら活動をさせていただいています。そういったなかで、たまたま鳥原先生のほうからもお話がありました通り昨年、教育フォーラムに「たからばこ作戦」から提案をしていただきまして、大きな反響がありました。その後、どのような活動を展開しているのか興味があったので本日参加させていただきました。感想として二つほどお話をさせてもらいたいと思います。一つ目は「たからばこ作戦」のなかで作品の収集にあたり、子どもたちが学生さんたちからメッセージをいただいているようですが、子どもたちがとてもよい経験をしている、先ほどの小松先生からもお話がありましたが、かけがえのない、いい経験を得ていると思いました。

これは次への活動意欲、表現意欲につながるような、そういったお手伝いをしていただいているなというようなことを感じました。作品自体が、複数人の子どもたちの作品を映画のように上映していただいたんですけど、おそらく個々の作品をまとめて個人の作品集のようなかたちでおそらく最後は手に入れることも今後は可能なのかなと、「たからばこ」のなかから自分の宝物だけをアルバム的に取り出すことも可能になるのかなと。私も地元に子どもがいるんですが、思い入れがある作品を学校から持ってくると、しばらく掲示するんですけど、しばらく経ったあと、どうするのか。いつか処分しないといけないんですけど、どうやって納得したかたちで処分するのか。写真集とかアルバムと同じように見たいときに見れる形になっているっていうのは、やっぱり子どもにとっても、何年経っても何十年経っても大人になっても見返すことができるっていうようなことで、そういった意味でとても将来性のある価値のある記録、「たからばこ」の素材なのではない

かと感じました。それから、都留文科大学の学生さんたちに関わっていただいてい るということで、将来は指導者として子どもたちに関わると、そういった指導の場 面で、直接子どもたちとのやりとりというのは当然出てくるわけですよね。その 子どもたちとのやりとりのなかで必要なのは、やっぱり作品をどう受け止めてそ の場で子どもに返してあげる、といった感性的な部分とか、評価的な部分という のが当然必要になってくるんですけど、そういったアンテナの部分になるところ を、今回の作品を収集するなかで学生さんたちは磨かれているんじゃないかなと いうふうに思います。おそらく、将来は指導する子どもたちに対しての声かけで すとか、接し方などの一端を学んでいるんじゃないかなというふうに感じました。 それは指導者としてとても有効なことですし、やがて指導者にならなくても、い い保護者になるんじゃないかなと、父親・母親として自分の子どもに対してどう いった言葉かけをするのか、どう接するのかっていうことはとても大切な部分で、 そういったことをこの活動のなかで磨いているんだなっていうようなことを感じ ました。小学生の子どもたちにとっても、とても有効な活動であり、学生さんにとっ ても有効な活動である、そうして地域全体を見ると学校と大学が連携をしながらお 互いに良い部分をとっている、お互いに磨き合っている、そういった活動を仕組 んでくださっている、ということで地域交流研究センターの活動、鳥原先生の活 動にはとても感謝しています。我々も今後、いろいろなかたちで支援・協力でき る部分はさせていただきたいと思っておりますけど、改めて違う部分でもご指導・ 刺激をいただければと思います。今日はありがとうございました。

鳥 原: ありがとうございました。大変心強いお言葉をいただいたと思います。予定の時間がきましたので、最後に簡単ではございますが私のほうからあいさつをさせていただきます。私はこの研究活動の責任者をしておりまして、いろんな方にご迷惑をかけたり応援をいただきながら活動をしております。本格的な始動は2年前なので、まだ2年しか本格的な活動はしておりません。今後も続けていきたいなと思います。そういったところでは地域の方々にはご支援をいただかないと出来ないということです。ですから、改めて今後ともひとつよろしくお願いします。それからとても大事なポイントとして、今日来ていただいた三人の先生方は活動のキーになる方々です。今後とも引き続きご協力をお願いします。それでは、改めて最後に今日来ていただいた先生方に感謝の気持ちを込めて拍手をしたいと思います。(拍手)

では、これで「たからばこ作戦」の発表を終わります。ここからは司会に変わります。

#### ○閉会 司会:佐藤優海

ありがとうございました。本日はみなさまのご協力もありまして滞りなくフォーラムを進めることができました。ここでみなさまに2点ほどお願いがございます。まず1点目でございますが配布いたしましたアンケートについてお願いいたします。お帰りの際に受付にて回収箱を備えてありますのでそちらにいれてお帰りいただけるようお願いいたします。筆記用具がない場合は受付にご用意してありますのでそちらをお使いください。2点目ですが、今日受付におきまして受付名簿にお名前を書かれていないかたがもしいらっしゃいましたら、恐れ入りますがご記入をお願いいたします。それでは以上をもちまして第10回地域交流研究センターフォーラムを閉会とさせていただきます。本日はみなさまありがとうございました。どうぞお気をつけてお帰りください。

(拍手)

\*本文は発言を録音し、文字に起こしたのち発言者に確認したうえで、趣旨を損なわない 範囲で修正しました。

### 「第 10 回地域交流研究フォーラム」 参加者からいただいたご意見・ご感想

- ・図工や美術教育は、作品をつくり、展示されて終わるだけのイメージで、そこをとおってきた自分にとっては技術的な科目で、つまらない思い出が多かった。しかし、今回のフォーラムに参加して、技術的な制作と、その過程と結果について返してあげる言葉や感想が、子どもたちを育て、鑑賞することの楽しみを知り、そこからつくる楽しさを知るというのは非常に興味深く、面白いと思いました。これからも今回のように、1つのことについて掘り下げ、新しい視野を広げてくれるような企画に参加したいと思います。 (20 代、男性)
- ・初めてフォーラムに参加させていただきました。情報といえば、1枚のチラシのみで、フォーラムの内容はおろか主旨すら把握していなかったのですが、皆様の発表を聞くことで目的や意義を理解しました。「たからばこ作戦」で作品と音楽と言語が同時に表現されたのはとても感動しました。少子化やインターネット社会など、自分が子どもの頃とは状況が違い、制約やリスクもたくさんあると思いますが、今後さらに多くの人たちに広がっていくことを期待しております。

(30代、男性)

- ・山梨大学に通う子どもの付き添いで来ました。美術教育専攻の為、何か得られた のではと思いました。良さや美しさを感じ取る「心」が子どもたちにたくさん生 まれる事を願います。 (50 代、女性)
- ・鳥原先生のもとで勉強させていただくようになって3年目ですが、毎年「たからばこ作戦」の活動が充実しており、大変興味深く思うと同時に、都留を離れてからも何らかの形でこの活動を見続けていきたいと思います。教員として関われたらなお幸せだと思います。誘っていただきありがとうございました。 (20代、男性)
- ・地域における教育活動の拠点として地域交流研究センターの存在をありがたく思います。これまでも多面に渡り尽力いただいてきましたが、今回の発表で更にこれからの良質な提案や情報を発信していただければありがたいと思います。

(50代、男性)

- ・著作権の問題を、予期しない作品の二次使用(悪用)防止がうまくクリアされれば、せっかく記録された作品を広く一般にも公開でき、もっと楽しい世界が…と夢が広がります。著作権は本当にむずかしい。「地域交流センター通信」は楽しみにしています。Web版で読んでいます。今後もよろしくお願いします。 (50代、女性)
- ・著作権の問題などもあるかもしれませんが、撮影した作品を学校の HP 等で紹介することなどが出来れば面白いのではないでしょうか。 (30 代、男性)
- ・将来教師をめざすにあたり、私も苦手意識がある図工を教えていく自信がありませんでした。今回のフォーラムを通して、頑張ってみようと思えてきました。また、資料の県民コミュニティーカレッジも関心を抱きました。参加してみようと思います。 (20代、男性)
- ・「たからばこ作戦」をするに至った経緯が今回よくわかった。子どもたちが学校で作った作品を家庭に持ち帰らせるとそれは作品からゴミとなり、捨てられてしまうことが多くなってきている。平面作品は保存しても立体作品は収納場所の関係で子どもたちの成長の証として保存されることは少ないと思われる。子どもたちの達成感を維持するためにも、この試みは注目されるべきものだと思った。また、

画面を通したコミュニケーションは、今後多様な活用が期待でき、楽しみである。 課題もあるが今後も研究を続けてほしい。 (60 代、女性)

- ・教育や自然をテーマに都留文科大学ならではの取り組みの発表が大変いいと思います。今回の「たからばこ作戦」は、図画工作と ICT との融合という視点がユニークで興味深い取り組みだと思いました。今後の進展が楽しみです。 (50代、男性)
- ・自分が受けてきた図画工作や美術の授業のイメージとは異なるイメージを得ることができてとても貴重な機会だと思いました。 (20代、男性)

# 活 動 報 告

2014年度

#### 都留文科大学 地域交流研究センター

## 活動報告

2014 (H26 年度)

## 1. 2014年度の活動について〔概況〕

地域交流研究センター長 杉本光司 (2014/4/1 ~ 2014/9/30) 麻場一徳 (2014/10/1 ~ 2015/3/31)

2003 年度の地域交流研究センターの創設当初から継続されてきたそれぞれの部門活動においても、新たな取り組みやメンバーも加わり、これまでの10年を振り返り、新しい10年に向かうという意志を確認すべき場として2014年2月22日(土)に開催を予定したフォーラムの中止を受けて、2年越しの今年度に気持ちも新たに「第10回地域交流研究フォーラム」を2014年9月27日(土)に開催することができたことが非常に印象深い年であった。

一昨年度(平成24年度)に文部科学省から発表された「地(知)の拠点整備事業」(COC: Center Of Community)に対しては、地域交流研究センターにおいて実践してきた多彩な取り組みや活動実績を基盤として、平成25年・26年の2回の申請には地域交流研究センターが大きく関わることとなった。残念ながら最終採択には至らなかったが、都留文科大学の独自事業として、学内にCOC推進機構を組織し取り組むこととなった。これまでは大学全体の中においての地域交流・地域貢献に対する主軸として位置づけられてきた本センターにとっても多大な影響をもたらす組織として、COC推進機構が2014年10月にスタートしたことは非常に大きな出来事であり、新しく専任教員として着任された山口博史先生がセンター会議のメンバーとして加わったことにより、地域交流研究センターにおける今後の活動においても更なる連携・協力が必要となるだろう。

また、センター創設以来のメンバーとして関わってこられた畑潤先生の定年退職により大きな戦力を欠いてしまったままの一年ということで、特に、畑先生が編集長として発行してきた「地域交流センター通信」やフィールド・ミュージアム活動においては、一部の活動を縮小することとなってしまった。

本センターにおける各部門活動に目を向けてみると、フィールド・ミュージアム部門では、「フィールド・ノート」は年4回の発行が順調に行われ、81号から84号まで発行した。この他に、2012年度から本年度までの間、都留市郷土研究会によって企画された「富士道を歩く会」において、大月市にある甲州街道との追分から、富士吉田市の北口本宮冨士浅間神社までの国道139号を中心に、2カ月に1回ほどのペースで歩いて記録したまとめとして、2015年3月に『富士道を歩く会』と題したブックレットを発行した。また、オープン・アーカイブ事業においても「ミュージアム都留」との連携も定着し、2014年3月22日から5月6日の期間、ミュージアム都留において、「写真が伝える都留の思い出 ー未来へ贈る地域の記憶ー」と題した企画展を開催することが出来た。大学キャンパス内においても、ムササビライブカメラの稼働、キャンパスにリスを呼ぶ会の活動も引き続き順調に実施されている。

発達援助部門でも、SAT事業におけるこれまでの活動の実績により、平成22年度入学生が4年生となった平成25年度から開講された、必修教職科目「教職実践演習」がカリキュラムの主軸として運用されたことに伴い、学内においても新たに「教職支援センター」が組

織化され、担当教員も配置された。このため授業運営に関しては、これまでの地域交流研究センターから教職支援センターに移管されたものの、これまで発達援助部門において活動を続けてきた経緯もあり、SAT-A・B・Cの3つタイプにおける活動内容や予算等に関する課題、更に科目「学校参加」における課題についても、大学全体における検討事項として取り組みをする必要性を強く感じている。地域教育相談室においても、継続的に教育委員会主催の研修会や校内研の講師としてスタッフを派遣してきた結果、その研修会の参加者の情報によって相談室の活動が伝わり、その存在や役割がさらに認知されてきている。地域情報教育においては、旭小学校に無線LANの使用できる環境を整備したことにより、これまで実施されなかった遠隔授業においても新たな形での支援を検討している。そして、2011年度から参加した地域美術教育分野の活動においても、引き続き、小中学校の図工・美術担当教員との研究会や研修会を開催するとともに、都留市や県内各地の美術教育活動への協力や支援を行った。また、図工・美術教室と情報センターとの連携による、デジタルデータベースを使った図画工作の新たな取り組み「たからばこ作戦」プロジェクトにも大きな期待を寄せられている。

暮らしと仕事部門においては、今年度は担当教員の不在ということであるが、部門そのものも無くすのではなく、これまでの活動分野の引き継ぎや新たな分野における活動の発掘も模索するという形で維持した。

『地域交流センター通信』については、退職された畑潤編集長の後任として、これまでの経緯もあり、北垣憲仁先生に編集責任者の任務をお願いすることにした。これまでは、年2回の発行を行ってきたが、本年度は2015年3月に第26号を発行した。巻頭文は畑潤先生による『都留文科大学「地域交流研究センター」の設立とその理念』と題し、センターの10年の歴史を振り返り、これからを見通す思いを書いて頂き、地域交流研究センターの一年を振り返るということで、年間を通して行われている活動について、それぞれの担当者や参加者による非常に丁寧な説明や思いを力強い言葉で表現し、読む者それぞれの心に強く語りかけてくれた。この『地域交流センター通信』を読むことにより、センターにおける一年の活動の全容を知ることが出来る、まさに本センターの機関誌としての位置づけに相応しいものとなった。

地域貢献活動においても、これまでの恒例的な取り組みに対する参加・支援は継続され、新たに連携する組織や機関も増えている。これまでの着実な取り組みや粘り強い働きかけが実り、本センターが、各部門の活動を組織的にサポートし、継続的に動機付けていく機能を持つことの意義を改めて確認したい。特に、教育委員会の「放課後子ども教室」プログラムとの連携による「子ども公開講座」の開設は、今年度は新たに麻場一徳先生にも参加して頂き 10 講座を開講し、他の地域にはない都留独自のスタイルとして、担当教員の協力を頂き、センターが大きく貢献している取り組みとして注目されている。

また、これまでにも、センターにおける活動が拡充するにつれ、スタッフ・体制の拡充を求めてきたが、本年度は、センター事務局の担当者としては前年度から引き続き小林氏に、昨年度から開設となった「都留市まちづくり交流センター」内の本センターサテライト(分室)には佐藤氏が新たに派遣され、センター全体の運営担当者である田中正樹学生課課長補佐との3人の職員の努力と連携により、センター運営業務に対しても、スムーズな対応が行われたことに感謝している。しかし、望まれるセンターとしての体制づくりには、まだまだ遠い道のりである。また、センターそのものの活動スペースの確保についても、コミュニケーションホールにおける騒音に対する防護策もないまま、移転も含めた将来的なセンター再編構想に向けて、4号館1階への移転という計画は立てられたものの、未だ実現できておらず、引き続き粘り強い交渉が求められる。

最後に、大学全体の中での「地域交流研究センター」の位置づけである。特に、最近は、

若手教員による、センターへの地域交流研究教育プロジェクトに対する取り組みを通した参加はあるものの、日常的なセンター活動に関わる教員は、まだまだ一部であると強く感じる。特に、「暮らしと仕事部門」における担当教員不在という現状に対しては、今後の部門活動の継続も含めた将来構想における検討が重要と考える。また、学生に対する認知度も非常に低く、「フィールド・ミュージアム」や「SAT」といった個々の活動は知っていても、センターそのものの存在を知らない学生が多いようである。今後は、学内の他分野の教員に対しても参加を促していくだけでなく、学内掲示を中心に学生に対する広報活動の必要もあるだろう。更に、昨年度からオープンした「都留市まちづくり交流センター」内への、本センターのサテライト設置を機に、市民に対するより一層の広報活動にも工夫が必要である。また、「COC推進機構」との関係性についても、その設立の経緯や今後の構想を考えると、本センターとの業務や運営に関する連携や体制についてもより一層の工夫が必要と考える。

地域交流研究センターの活動状況、役割、そして外部からの大いなる期待を考えても、現センターの場所からの移転は喫緊の課題として取り組む必要を痛感するとともに、改めて、地域との交流は、幅広く、奥深く、そして、多くの可能性があると感じている。

(文責:杉本光司〔前期 地域交流研究センター長〕)

## Ⅱ. 各部門の活動

## II-1. フィールド・ミュージアム部門

#### 目 次

はじめに

- 1. 生きものに親しむキャンパスづくり
- 2. 研究・教育活動
- 3. 地域の現代的な課題に取り組む事業
- 4. 地域を調べ、記録し、学び合う事業
- 5. 地域の自然や生活の記憶を収集し、保存し、活用する事業
- 6. 展示・出版活動

まとめ

#### はじめに

地域交流研究センター(以下、センターと記す)にフィールド・ミュージアム部門(以下、部門と記す)が位置づけられて12年目が経過した。その間、平成19年度文部科学省「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」(現代GP)採択を経て、自然観察会や地域の希少な生物の保全活動、ムササビ・ライブカメラ事業など本学の教育や研究の特徴を活かした事業ができるようになり、またフィールド・ミュージアム部門の機関誌である『フィールド・ノート』も学科・学年を超えた参加により年4回発行できる体制が整ってきた。この機関誌の編集に携わっている学生は、オープンキャンパスやビオトープ作業の他、フィールド・ミュージアム部門のさまざまな関連事業で活躍している。

「ミュージアム都留」など市内の公共施設との連携も、共同で企画展を開催するなど、それぞれの施設の特性を活かした連携が成果を出しつつある。公共施設と連携して事業を進めることで、たとえば平成26年度の企画展「写真が伝える都留の思い出―未来へ贈る地域の記憶―」では会期中に約900人の来場者があった。これなど市民との交流を広げ、深めていく契機となるだろう。

私たちはこうした諸実践を振り返り、平成26年にはフィールド・ミュージアム部門の理念を次のようにパンフレットにまとめた。「都留文科大学のキャンパスでは、動物園や博物館ではみられない生き生きとしたムササビにいつでも出会えます。都留フィールド・ミュージアムでは、地域でこのような生きものや人びととの出会いを楽しみ、ていねいに観察し、ものごとからじかに『学ぶ』ことを大切にしています。そうして、自然(nature)との関わりや、私たちの暮らし、文化のありようなどについて、みなさんとともに探究していきます」(『フィールド・ミュージアムへようこそ』、2014年3月発行)。

動物園や博物館では、動物や物を、生息していた場所やもともとあった場所から切り離して展示する。しかしそれでは生息していた場所やもともとあった場所との関係は失われてしまう。私たちは、ほんらいものがもつこのような関係性を大切にして、ていねいに観察することで物事の本質を理解しよう、という姿勢を大切にしている。それは自然に限ったことではない。地域の文化のありようについても同じような姿勢で探究し、教職員・市民とともに学び合う本学らしい取り組みをしていきたいと考えている。

以上のような理念のもと、これまで多岐に渡って取り組んできた事業を次の6つに整理した。①生きものに親しむキャンパスづくり、②研究・教育活動、③地域の現代的な課題に取

り組む、④地域を調べ、記録し、学び合う、⑤地域の自然や生活の記憶を収集し、保存し、活用する、⑥展示・出版活動、である。平成 26 年度の部門の事業も、この 6 つの項目をもとに行なった。したがって本報告書では、この 6 つについて事業の内容・成果・課題を報告する。

平成 26 年度は当初計画した事業をほぼ予定通り終えることができた。だが、けっして順調に事業が進んだわけではない。兼担教員への過度な負担、学生や市民の要望が多いにもかかわらず現在の体制では対応しきれない、など多くの課題が残っている。本報告書では、こうした課題と展望についてもまとめた。

なお、2014 年度の部門の活動の概要や参加者の感想などは、『地域交流センター通信 26 号』 にも掲載されているので参照していただきたい。

## 1. 生きものに親しむキャンパスづくり

本学のフィールド・ミュージアムの活動は大学が拠点となる。大学のキャンパスを自然に親しむ入り口と位置づけ、ビオトープやさまざまな生きものたちに出会える空間を整備するなどして教育や市民との交流の場にしようという取り組みである。おもな事業として①附属図書館ビオトープ事業、②1号館とグランドの中間にある「つるりん」のビオトープ事業、③キャンパスに生息するムササビの生態を多くの人びとと解き明かしていこうという「ムササビ・ライブカメラ」事業、④キャンパス周辺に生息するニホンリスとの出会いを楽しみ身近な自然への関心をもとうとする「キャンパスにリスを呼ぶ会」の事業などがある。

#### 1-1. 附属図書館ビオトープ事業

2004年に附属図書館ビオトープが造られて以来、部門が学生とともに植物の剪定や移植などの手入れを担当している。このビオトープには、大きく三つの目標がある。一つは、都留市の昆虫相の特徴でもあるチョウやトンボ、鳥類の種数の多さを考慮して、大学近辺にあるチョウの吸蜜植物や幼虫が食べて育つ食草・食樹を育て、池を整備し、エゴノキなどの鳥が好む樹木の手入れをしようというものである。二つ目は、キャンパスを挟むようにしてある山裾をこのビオトープでつなぎ、生きものの回廊を造ろうというものである。三つ目は、学内の教育や市民との交流に貢献する生態・教育園として整備していくことである。そうすることで附属図書館の読書環境を良好にするとともに、後述する「つるりん」やほかのキャンパス内外のビオトープとネットワークで繋ごうというものである。

附属図書館ビオトープの作業に参加した学生は、2014 年度は6名で、毎週1回(火曜日)、1時限に剪定や移植、草刈りなどの手入れをした。附属図書館ビオトープではエノキやアワブキなども定着し、大学周辺に普通にある植物の見本林としても機能しつつある。こうした生きものについての解説板や、学内外に広くビオトープの魅力を伝えたり、ビオトープで観察会をしたり、情報を共有する広報活動をしていくことが今後の課題となるだろう。この附属図書館ビオトープ事業に参加した社会学科環境・コミュニティ創造専攻2年の伊藤瑠依さんは、「この1年間の活動を通し私たち自身も変わっています。植物の生長の早さに驚かされたり、自分が手入れした草木が生長することに喜んだり、活動をするにつれてビオトープへの愛着がわき、活動時間外でも足を運ぶことが多くなっていきました」と感想を記している。こうした作業は、植物や昆虫の生長や関係のありかたをじかに観察することにもつながり、座学での学びを実地に理解するなど教育的な効果も高い。

#### 1-2. 「つるりん」の事業

1号館ビオトープは、約40年前に本学の教員と職員により作られた、都留周辺の山地植生を模したビオトープである。現在は「つるりん」という愛称で呼ばれている。ビオトープという言葉の存在すら知られていなかった当時、本学の教職員が山から苗木を採ってきて汗水流して植樹をした。途中で何度か伐採の危機に遇いながらも、40年経った現在、樹高が20mを超えるブナやミズナラ、モミ、エノキ、ケヤキなどが林立する立派な林となり、夏には天然の緑のカーテンとなっている。先代たちが残してくれたこの林を、教育へ活用するために、初等教育学科の教員と学生が中心となり、授業や課外活動のなかで、生物相の調査や自然観察、解説板や展示の作成を行っている。H26年度も、生物学実験や専門演習 I・Ⅱ (生物学)の授業で植物相や動物相の調査、自然観察等を行なった。H26年度の特記事項としては、ブナの実生(種子から芽生えた1年目の幼個体)が大量に出現したことだろう。これまで何度かブナの成り年はあったが、種子が発芽したのは恐らく今回が初めてだろう。今後も学生たちとのブナの実生の生き死にや生長の調査を通して、自然のサイクルや生き物と環境との関係を学生たちに教えていきたい。

#### 1-3. 「ムササビ・ライブカメラ」事業

本学の美術棟に隣接した森(「ムササビの森」)にはムササビが生息している。ムササビは 樹上性の哺乳類で、活動の開始時刻が日没後約30分からとほぼ決まっていること、都留で も長いあいだ行動学的・生態的な研究がなされてきて、観察の手法もほぼ確立されており研 究の蓄積もある。だが、いまだに繁殖期の生態など不明な事が多く、多くの人と生態を観察 することにより謎を解明しようとする事業である。この事業は現代GPの採択により実現し たもので、ムササビの生態の解明だけでなく、ムササビの観察をとおして身近な自然に親し む契機とし、本物に学ぶというフィールド・ミュージアムの理念を多くの人と共有しようと いう目的がある。

この事業に参加した初等教育学科2年の加藤萌香さんは、「日が暮れた青い空に、木々のあいだを黒いシルエットが滑空していく。その光景は、実に幻想的で美しいものです。もっと多くの人に関心をもってもらい、ムササビという魅力にあふれた生きものを知って、好きになってもらいたい」と感想を記している。

2014年度の活動は次の3点を重点に行なった。①学生や市民からの要望が多かった夜間の行動も観察できるよう夜間対応のカメラに変えた。これらは現在、本学のホームページ上でも閲覧できる。②近年は、巣箱にムササビが入り繁殖することも多いため、巣箱からの出巣を観察するムササビ観察会を開催した(2014年5月29日)。③ホームページのブログをセンター事務局と情報センター、学生が協同して取り組むようになり、ムササビや自然の魅力を学内外に広報している(2014年度のHP訪問数は、2014年5月から2015年1月まででアクセス数10,839件となった)。

課題としては、現在、2台のライブカメラを使用しているが、1台は昼間のみの対応で、映像の映りも良くない。可能であれば、現在のカメラと同等の夜間の活動にも対応したカメラを今後設置したい。

#### 1-4. 「キャンパスにリスを呼ぶ会」事業

キャンパス周辺には、ムササビだけでなくニホンリスなどさまざまな哺乳類が生息している。哺乳類は感情移入がしやすく子どもから大人まで幅広く人気がある。本事業は、キャンパス内の植生になるべく影響を与えないようにニホンリスの食物であるクルミを移植したり、餌台を設置したり、ニホンリスが移動しやすいように横木による通り道を造るなどしてニホンリスとの出会いを楽しもうとするものである。

この事業では、教職員・学生の会員に向けてメール・ニュースを配信している。2014年度は、カナダやイギリスに語学研修に参加した学生から現地のリスとの出会いの感想が寄せられるなど、リスへの関心の輪が広がりつつある。会員は約80名におよび、メール・ニュースではニホンリスの動向だけでなく、キャンパス内の自然に関する情報も配信している。

4年前に開始したこの事業を、豊かな自然環境に恵まれた本学のキャンパスでムササビや ニホンリス、ネズミ類、モグラ類などに出会える環境を整える構想につなげていきたい。

#### 2. 研究・教育活動

本学の研究・教育の特色を活かして、キャンパス周辺の自然を、教職員・学生・市民とと もに観察し、学び合うことをテーマとした事業を行なっている。

#### 2-1. 自然観察会

部門では H26 年度も本学の環境 ESD (Education for Sustainable Development) プログラムの実習生を 14 人受け入れ、自然観察会を 4 回行なった。 6 月 14 日、7 日 12 日、11 月 8 日、12 月 8 日に実施し、延べ 80 人ほどの市民が参加した。参加者は 6 歳から 70 歳代までの様々な年齢層で、親子やリピーターも多かった。参加した学生の感想はセンター通信26 号に掲載されているのでそちらを参照していただきたい。学生たちはこの観察会を通して皆それぞれたくましく成長しており、この観察会の学生たちへの教育効果が非常に大きいことを実感する。また、観察会の参加者の皆さんも、毎回学生たちを温かく見守ってくださり、時には学生たちに地域の歴史や昔の自然、暮らしの知恵などについて教えてくださる。学科も年齢も立場も異なる人々が集まり、皆で自然を楽しみ、分かち合い、学び合う。学生も、指導している教員も、事務職員も、準備段階ではもちろん大変なのだが、いざ観察会を実施して終わってみると、何ものにも代え難い充実感がある。しかしながら、H27 年度は部門の人員体制が整わないため、観察会は休止することになった。H28 年度には観察会を再開できるよう、H27 年度中に部門の体制を整えたいと考えている。

#### 2-2. 都留文科大学附属小学校における総合学習

都留文科大学附属小学校は、豊かな自然に恵まれた環境にある。特色ある学校教育の一環として、総合的な学習の時間を使って4年生が校舎裏にある観察スペースにくる動物たちの観察をしている。2014年度は、4年生11人を対象に「人と自然とのよりよい関係について考える」をテーマに総合学習の授業を行なった。

授業は、2時間連続(90分)で野外と教室を使って計七回実施した。第一回目は5月27日で、校舎裏の森を散策しながらリスの食痕やシカの足跡などを探した。第二回目は6月24日でモグラの仲間であるヒミズの観察と観察装置のメンテナンスを行なった。第三回目は7月11日で野ネズミと出会う工夫について校舎裏の森で野ネズミの痕跡を探りながら考える授業をした。第四回目は9月26日に実施し、附属小学校の近くにある森でリスや野ネズミの観察用としてクルミ拾いをした。子どもたちはクルミの実は知っていてもじっさいにどのような木なのか、どのようにして実っているのかほとんど知らなかった。クルミの木をじっさいに観察することでクルミの実や堅い実を食べるリス、野ネズミに対する愛着も深まったことが子どもの感想ノートからうかがえた。第五回目は10月31日に行ない、第四回目で拾ったクルミの実をリスの餌台に置き、リスの野外観察と、リスの生態についての学習をした。第六回は11月17日に実施し、野鳥の巣箱を子どもたちがグループで製作し、校舎裏の森に設置した。そして野鳥についての学習をした。最終回の第七回は1年間のまと

めとして、じっさいに野生哺乳類に出会い学ぶことをテーマに親子ムササビ観察会を 12 月 5 日に行なった。この観察会には本学の学生も参加し、ムササビの事前観察を通して解説を担当した。

担任の先生のお話によると、親子で観察することで、家庭での共通の話題となり子どもたちの裏山の森、ムササビ、野生哺乳類、自然への関心が高まったという。子どもたちによる授業後のノートには、「作業がとても楽しかった。またやりたい」とか「友だちといっしょに観察できてよかった」、「かたいクルミをわってたべるリスはすごい」といった感想が記されていた。

#### 3. 地域の現代的な課題に取り組む事業

都留は昔も今も自然豊かな場所である。だがその一方で、カワラナデシコやカジカなど昔はたくさんいたけれども、年々数が減ってきている生きものもいる。あるいはもともと数が少ない上にさらに減少してきている生きものもある。こうした絶滅が危惧される地域の生きものを保全するために、教職員・学生・地域の人びとが連携協力して研究・教育活動を行なっている。

#### 3-1. カワラナデシコなどの保全活動

初等教育学科生物ゼミでは H20 年度より、全国的に絶滅が危惧されているカジカとカワラナデシコの保全のための活動を学生とともに行なってきたが、H26 年度は研究を一旦お休みして、今後の保全活動のための準備期間とし、「都留カワラナデシコマップ」というパンフレット教材をゼミ生たちと作成した。この教材は、地域の方々や子どもたちにカワラナデシコについて知ってもらうことを目的とし、都留市内のカワラナデシコの分布や、栽培方法、受粉実験のやり方などを紹介している。また発展的な内容として、なぜ昔は身近にいた生きもたちが減ってきているのか、地域の生きものを保全するにはどうすればよいのかを考える、という構成になっている。当初は市内の小中学校に配布する予定だったが、現在のところ市民の希望者への配布に留まっている。今後は、このパンフレットを活用して地元の小中学校と連携して保全活動を進めたいと考えているが、それができていないことが現在の課題である。

#### 4. 地域を調べ、記録し、学び合う事業

部門では、地域の自然や人びとの暮らしの知恵にじかに学ぶことが大切だと考えている。そこで現場に出かけ、観察し、記録し、その成果を広く共有する活動をしている。その一つが部門の機関誌である『フィールド・ノート』である。この活動には学生が主体的に関わり、編集・発行するだけでなく、ビオトープ作業や展示活動など幅広く部門の活動に参加している。

#### 4-1. 部門の機関誌『フィールド・ノート』の編集・発行

部門の機関誌『フィールド・ノート』は 2003 年に創刊し、2015 年 3 月で 84 号の発行に至った。学生が編集作業の主体となり、地域で取材した人は延べ 600 人を超える。年 4 号、各号 500 部を発行し、近年は教職員・学生・市民のみなさんが編集部にバックナンバーや最新号を求めて来られるようになった。また学内の授業での資料として活用されるようにもなった。

編集には学科や学年の枠をこえた学生の参加があり、自ら企画を立て、アポイントを取り、記事作成からレイアウトまで一連の作業を担っている。市民からも温かい励ましだけでなく、人との対応の仕方、暮らしの知恵に至るまで実地に学ぶ。この経験は座学ではなかなか学べない貴重なものとなっているようである。学生は互いの経験を話し合い、記事の内容について検討し合う。こうした学び合いにより、書く技術を身につけ、市民と経験を共有する喜びを味わい、地域を見る目を養っていく。

2014 年度に発行した 81 号(2014 年 6 月発行)では、新しいことに挑むことをテーマとした「挑戦者」を特集した。82 号(2014 年 8 月発行)では、都留にあるさまざまなつどいを取材し、なぜそこに人が集まるかを探った「つどう」を特集した。83 号(2014 年 12 月発行)では、都留の自然の移り変わりを記録する「変化を見つめる―自然編―」を特集した。84 号(2015 年 3 月発行)では、都留に遺る行事や習慣、建物がどのような変化を遂げてきたのか、学生それぞれの方法で都留の歴史を辿った「変化を繙く―文化と人とその時代―」を特集した。

このような編集の経験を活かし、編集部の卒業生のなかからも各地で地域の魅力を発信する冊子の発行を始めるケースが出てきた。山梨県道志村の地域おこし協力隊で働く香西恵さん(2013 年卒業)は、活動の一環として『道志手帳』を創刊し、2015 年 2 月現在で 6 号を発行している。東京都で出版会社に勤務する崎田史浩さん(2013 年卒業)は、葛飾の冊子づくりに賛同してくださったかたがたと一緒に『ヨコガオ』という雑誌を創刊した。崎田さんはこの雑誌づくりの経緯について、「『フィールド・ノート』は、冊子にするまでの過程に濃い時間があります。学生同士の意見交換や取材を通しての人との交流、自分との対話。この経験を通じて、身近な人や自然から学べることの尊さが刻まれていたこともあり、この経験を葛飾の冊子でも得たいとの思いが強くありました」と述べている(『地域交流センター通信 26 号』、27 頁)。

なお、『フィールド・ノート』は、近年オープンキャンパスにおいて増刷され、訪問した 高校生に配布されている。2014年度も、前年度のオープンキャンパスで『フィールド・ノート』を読んだ高校生が本学に入学し編集部に入った。

さらに、以前より各方面から要望のあったテーマごとの編集に 2014 年度は取り組み、『富士道を歩く会』を発行した。これは2年間にわたって郷土研究会の有志とともに歩いた富士道の記録を編集したもので、500 部を発行し好評を得た。このようなテーマごとの編集による冊子も今後は企画していきたい。

『フィールド・ノート』は部門の機関誌として高い評価を受けるようになってきたが、課題もある。冊子は、部門に関心のある人や突然の来訪者にも成果を目に見えるかたちで伝えることができる効果的な媒体である。だが、部門の予算のなかでも印刷費は大きな割合を占めている。レイアウトまでの一連の編集作業をすべて仕上げてから入稿するなど、可能な限り印刷費を抑制しようと努めてきた。『フィールド・ノート』に記された情報は、どれもが学生と市民とによる貴重な地域の記録である。一人でも多くの人に読んで頂き、また共感の輪を広げていくためにも、全頁カラーとし、今後も一冊の単価をなるべく抑制しつつも冊子の質は落とさない努力を続けていきたい。

#### 5. 地域の自然や生活の記憶を収集し、保存し、活用する事業

地域の暮らしや文化のありようを考えるうえで、過去に学ぶことは重要な意味をもつ。また現在の自然や文化の様子などを記録として残したり、学内に保存してある標本類を整理して地域の小中学校の教材として活用したりすることは、博物館として大きな役割の一つであ

る。部門では、「地域の資料や記憶の保管庫」としての役割を果たすため現代 GP 採択を契機に「オープン・アーカイブ」事業を始めた。効果的な活用の方法を検討する必要があるなど課題はあるが、多くのかたがたのご協力のもと、過去から現在までの地域の自然や文化の記録や記憶が蓄積されるようになってきた。

### 5-1. 「オープン・アーカイブ」 事業

この事業を部門の取り組みとして位置づけたのは、現代 GP の採択が契機となっており、それ以来、過去に地域で撮影された写真や生活の記憶、自然関連の映像資料や標本資料を収集し、保存し、活用する活動をしている。また「ミュージアム都留」とも連携して、地域の写真を集め、保存する取り組みも始めた。この成果は、『わたしたちの都留アルバム』として記憶などのデータとともに製本としてまとめた。この製本のなかには写真 1,000 枚が収められている。これまで部門がデジタル化し保存してきた写真の総数は 2014 年度末で約 6,000枚となっている。

課題として、まずこの事業が部門の他の事業の基礎になるにもかかわらず、デジタル化や基本データの入力などの作業量が多いため事業の進行が遅いことが挙げられる。また地域の小中学校の教材としての活用も、まだ標本の整理が進んでいない。地域の自然や文化のデータは大学と地域との共有財産となる。地域の人びとと直接交流する機会となる観察会の運営とあわせて、地域の自然や文化に関する基礎的なデータの収集と管理を担当する専門的な職員がいれば、部門の事業の運営は現在よりも効果的に進み、兼担教員の負担も大きく軽減されるだろう。

#### 6. 展示・出版活動

部門の活動を多くの人と共有し、共感の輪を広げていくために特に展示活動は重要である。 部門では、富士急行と連携して都留文科大学前駅の駅舎を分館と位置づけ、キャンパス周辺の自然案内や部門の取り組みを展示している。ここでは、地域交流研究Ⅱや博物館実習での学生の学習の発表の場などにも活用している。さらに、ミュージアム都留と連携して企画展示にも取り組んでいる。

#### 6-1. 他団体との連携による展示活動

他団体との連携として、本学の華道サークルがここでいけ花を展示しており、駅の利用客からも「いつも素敵なお花が飾ってあるのを楽しみにしているんです」といった反響がある。華道サークルの部員である遠藤桂花さん(国文学科4年)と藤森春奈さん(英文学科4年)は、駅舎の展示について「花には癒やしや気持ちを元気にする力があります。富士急の駅を訪れた人がほっと一息つくような空間にできるよう、また、都留文科大学を訪れるときの玄関口でもある駅舎で、都留文科大学のサークルとしておもてなしができるよう、心を込めて作品をいけていきたいと思います」と感想を述べている(『地域交流センター通信26号』、21頁)。フィールド・ミュージアムには決して大がかりな施設は必要ない。この華道サークルの展示は、小さな空間であっても、理念を共有した共同の取り組みが温かい交流の輪を確実に広げていくというモデルとなるものであろう。

#### 6-2. ミュージアム都留との連携による展示活動

部門の「オープン・アーカイブ」(5-1を参照)に保存されている地域の写真資料およびミュージアム都留と連携して集めた写真をもとに、2014年3月22日から5月6日にかけ

て、ミュージアム都留において企画展「写真が伝える都留の思い出―未来へ贈る地域の記憶 ―」を開催した。会期中には約900名のみなさんにご来館いただいた。本企画展では、収集 した写真のうち70枚ほどを選び、「街並みと自然の記憶」、「産業と建設の記憶」、「祭りと風 習の記憶」、「生活と教育の記憶」、「市制周年記念事業を振り返る」のテーマで展示をした。また豪雪被害の記憶を風化させないよう、雪害の写真と記憶を収集する特設コーナーを設置 した。

市内の博物館との連携は、部門が保存・管理する資料やデータの活用にもなり、また協同で作業をすることで多角的な視点から地域を見つめ直したり、市民との交流の輪を広げたりする契機となる。

#### まとめ

部門では、取り組む内容や成果・課題についてできる限り共有しながら、本学らしい事業とは何かを問いながら進めてきた。また、担当する教員・職員・学生にとって過度の負担とならないよう、関連した事業を有機的に結びつけるなどの整理をしながら毎年の事業計画を立ててきた。

どの事業も1回限りというものは少なく、時間をかけて地道に取り組んできたものが少なくない。大学教育という面からも、ビオトープ作業や『フィールド・ノート』の編集、自然観察会への参加など、学生にとって実地に理解を深めていく貴重な機会となっている。学内外に広く私たちの活動や理念を共有するという課題についても、本学のホームページでの定期的な情報の更新やパンフレットの発行など私たちにできることから始め、多くのアクセスや感想が寄せられるなど手応えを感じられるようになってきた。このように本学の教育・研究の特徴を活かした活動になりつつあり、その意味でも本学らしいフィールド・ミュージアムができつつあるといえるだろう。

だが、まだ多くの課題を抱えている。その一つが部門の体制の問題である。たとえば自然 観察会は、学生が自ら企画を立て解説をするのだが、市民との実地の交流により回を重ねる たびに着実に学生たちが成長していく様子を見ることができる。毎年、参加を希望する学生も増え、参加する市民のリピーターも少なくない。だが、土日の開催となること、事前観察 や準備・学生の相談に丁寧に対応しなければならないこと、また教員一人では観察会当日の 対応は難しいことなど、担当教員の負担は大きい。学生の学習機会を保証するためにも、要望が大きいこの事業を継続していくためにどのような体制が必要かを検討する必要がある。

本報告の2-1でも述べたように、観察会は学生が市民と自然観察を通して直接交流する 貴重な経験の場でもあり、また市民にとっても学生とともに地域の魅力や課題を発見する学 び合いの場でもある。同様に、地域の自然や文化に関するデータの収集や保存も、地域の共 有財産である。こうした部門の基幹をなす事業を担う専門職員がいれば兼担教員の負担も軽 減されるだろう。

二つ目が体制にあった事業の見直しである。本報告では6つの項目に整理して事業の概要や成果を報告したが、兼担教員の負担が大きい現状では、無制限に事業を拡大するのではなく、教員にとっても教育や研究をより豊かにしていけるような身の丈にあった事業にしていくことが課題である。

三つ目が施設の問題である。部門の機関誌である『フィールド・ノート』の編集室における、騒音と振動の問題が長年の大きな課題であった。「はじめに」で述べたように、センターのフィールド・ミュージアム部門では学生が学科や学年の枠をこえて参加しており、部門にとどまらず各種事業の大きな担い手となっている。歴代センター長、関係者の粘り強い努力

により施設の移転構想が進められている。もちろん予算・物理的な制約もあるが、可能な範囲内で学生や市民が参加し活動しやすいような配慮が欠かせない。

四つ目が本学に発足した COC 推進機構との連携の課題である。センターは COC 推進機構とどのように役割を分担しながら事業を推進していくのか、対外的にも説明できるようにセンター全体でもお互いの組織の理念などを共有しておく必要があるだろう。

近年、部門の取り組みに対する外部の評価も高くなってきた。たとえば 2014 年 4 月には 法政大学多摩地域交流センターからのセンター視察があり部門の取り組みについての意見交換がもたれた。また学長時代に「都留自然博物館」を構想された大田堯氏はその著書のなかで次のように述べておられる。「とくに都留文科大学の地域交流研究センターの活動はめざましく、センターが発行する旬報のほか、学生諸君の手による『フィールド・ノート』は、年四回発行される。その写真と文章による編集は魅力あふれるものです」(『大田堯自選集成3』 2014 年、藤原書店、209 頁)。

教育学者の新藤浩伸氏は、次のようにセンターのフィールド・ミュージアムの取り組みを 評価している。「同大学(都留文科大学)で編まれ、地域で学んだ知恵や生きものの情報を 発信する『フィールド・ノート』は六○号を、環境教育の教材研究に役立つ『フィールド・ キャンパスだより』は一○○号を超える。そこには、地域に息づく人の知恵、生きものの生 態、それをとらえる学生のみずみずしい感性とたしかな観察眼をよみとることができる。(中 略)大田(堯―筆者注)はこうしたフィールド・ミュージアムを、歴史以前の歴史から人間 が生きる地域をとらえ、生命のきずなの中で人間関係を再生していく試みとしてとらえてい る。〈パブリック・アーケオロジー(市民考古学)〉の実践にかかわる大田の提起は、前述の 平和の問題も含め、自分ひとりの存在を超えた、多様な生命が息づく場所としての地域の姿 を、そして、そのような地域の姿について思いを馳せる場所としての博物館が存在しうるこ とを、考えさせる。〈都留フィールド・ミュージアム〉の活動にかかわる畑潤は、地域で人々 が〈記憶し想起するいとなみ〉を行う場としてミュージアムを位置づけている。人々が地域 に深く学んでいこうとする、これら一連の実践は、さまざまな命と、その命が育まれる地域 の記憶をよびおこす場所としての博物館の原点にもかかわる問題を提起している | (「博物館 構想の展開と地域学習 | 、佐藤一子編『地域学習の創造―地域再生への学びを拓く』 2015 年、 東京大学出版会所収、220頁。なお引用した原文の「|は〈〉とした―筆者注)。

このように、部門の実践が外部から評価されつつあるのも、センター発足前からの長い実践と それに関わってこられた教職員・学生・市民による貴重な取り組みや思想が柱になっていること は言うまでもない。またセンター長はじめ他の部門を担っている教員の理解と協力、通常の学務 をこえて部門の取り組みを担っている兼担教員や、さまざまな事業の準備や広報活動を支えてい る事務局の職員の存在なしに現在のフィールド・ミュージアムの諸実践は成り立たない。

今後は、学内に設立された COC 推進機構とどのように役割を分担していくかといった検討や、部門の事業の見直しといったことが必要になってくる。しかし、現在の部門の体制ではこれまで積み重ねてきた諸実践を継続できないことが明らかな今、部門が取り組んできた事業にはどのような意義があったのかを問い直すとともに、センター全体としても組織の理念などについての認識を共有し将来の構想を明確にしておくことも今後の事業の推進には重要ではないかと思う。

(文責:北垣憲仁・別宮有紀子)

## II-2. 発達援助部門 II-2-1. SAT事業

#### 1. SAT 活動の目的

SATとは、都留文科大学から都留市内の小中学校に派遣される学生アシスタントティーチャーのことで、活動の形態には3つの異なるタイプがある。①放課後指導に継続的に関わる SAT -A、②授業中に $T \cdot T$ (チーム・ティーチング)の一人として子どもに関わる SAT -B、③「学力不振」「不登校傾向」「障害」などの困難を示す子どもに対して個別支援を行う SAT -C である。こうした SAT 活動の目的は、重層的な「子ども体験」にもとづく実践的指導力を持つ教師養成の深化・発展を図ることとされている。

運営にあたってはSAT運営協議会を設けて、都留市教育委員会・都留文科大学・市内の小中学校の三者が協力して行っており、このような学校間連携・ネットワークの構築も地域を基盤とする教師養成教育の実践活動でもある。

#### 2. 活動の内容

前年度に続き、2014年度も、市内すべての小中学校においてA・B両タイプの活動を行った。なお、Cタイプについては一定の専門的知見が必要なこともあり、臨床教育学専攻の学生のみの活動となっている。子どもの状態に合わせた適切な支援が必要なこともあって、年度当初に各学校から出される要請を勘案しながら学生を配置している。

2014年度は、以下のような参加状況のもと、SAT の活動を行った。

学校名	SAT - A	SAT - B	SAT - C	合計(学校ごと)
谷村第一小学校	22	18	7	47
谷村第二小学校	5	10	0	15
文大附属小学校	15	5	2	22
東 桂 小 学 校	14	14	8	36
宝 小 学 校	0	12	3	15
禾 生 第 一 小 学 校	12	12	6	30
禾 生 第 二 小 学 校	6	11	5	22
旭 小 学 校	6	4	0	10
都留第一中学校	7	28	1	36
都留第二中学校	5	9	0	14
東 桂 中 学 校	12	9	3	24
合計 (SAT 種別ごと)	104	132	35	271

#### 3. 2014 年度の活動の総括

都留市 SAT 運営委員会では、2015年2月26日(木)に一年間の活動の総括を行った。 その際、各学校から出された意見の主なものを抜粋すると以下の通りである。

- ①担当教諭と学生の打ち合わせをする時間が少ない。すなわち、担当教諭の側には学生に関わって助言や指導を行いたいという意思があり、学生の側からも打ち合わせを欲する声が上がっているものの、十分な時間を確保できていない。
- ②学生によるが、挨拶や態度の問題、記録簿の内容の薄さ、提出書類の不備が見られる。
- ③Bタイプの学生とCタイプの学生で配置重複・過多になっている時間帯があり、B・C担当との情報の共有化が必要である。
- ④ SAT の時間帯の授業と学生の専門性とに不一致が生じている場合がある。学校として、学生の専門性を十分に生かしきれない。また、学校側の SAT のニーズのある時間帯と学生の希望する時間帯がずれていることがあり、曜日や時間帯の調整が課題である。
- ⑤学生の感想で SAT 活動の効果が感じられた。SAT 活動の意義を感じた。

SAT 事業が歴史を重ねていく中で、学生派遣のシステムに諸々の不具合が出てきており、 再構築を必要とする時期に差しかかっていると指摘できる。教員の異動・退職に見られるよ うに、そもそも、学校という場は、きわめて流動性の高い場所・空間である。SAT に理解 のある教員たち(立ち上げに携わった教員たち)も、徐々に異動や退職を迎えている。したがっ て、冒頭で述べた、大学の掲げる SAT 事業の目的が、毎年度、市内の全学校の教員との間 でしっかりと共有されているとは限らない。だからこそ、学生と担当教諭との間の「打ち合 わせ|「調整|だけでなく、大学と各学校との間の現場レベルでの確かな「打ち合わせ|「調整| が必要不可欠となってくる。しかし、「言うは易し、行うは難し」で、「打ち合わせ」「調整」 は各学校側、大学側双方の労力を要する。結局は、大学と地域の学校との関係性や関係者の モチベーションの問題なのかもしれない。代表者のみで行われている SAT 運営委員会を現 場レベルにまで拡大し、地域の学校のニーズは何なのか、学生のニーズは何なのか、大学の ニーズは何なのかを今一度突き合わせる中で、対等な「対話」の関係性を取り戻し、SAT 活動を、今の都留の地域に「しっくりくるもの」に改変していく必要があるといえるだろう。 関係者のモチベーションを喚起していく意味でも、折にふれて、このような再構築の機会が 必要なのかもしれない。SAT 活動が、学生のためだけでなく、都留地域の子どもたちに利 益のあるものであるように、少なくとも不利益をもたらすものにはならないように、注意し ていく必要があるだろう。

(文責:堤 英俊)

#### Ⅱ-2-2. 地域教育相談室

#### (1) はじめに

地域教育相談室の活動は本年度で 12 年目に入り、以下の活動を行った。概要については (2)(3)(4)(5) に、まとめについては (6) に記述した。

- ①来室、訪問、電話・ファックス・電子メール等による相談活動
- ②教育委員会等が主催する教職員研修への講師派遣やサポート
- ③校内研究等への講師派遣及びサポート

- ④公開教育講座等の研修会の実施
- ⑤都留市教育研修センターと連携した現職教員学級経営サポート
- ⑥山梨教育カウンセリング研究会との共催による活動
- (7)その他(地域の教育関連団体からの依頼への対応)

#### (2) 相談、研修依頼件数と種別

平成 26 年度に、地域教育相談室で受けた相談、講師依頼の概要については以下の通りである。 ①の「その他の事務的対応」とは、講師派遣や研修会のサポート活動に必要な事務的な対応である。この数には含まれていないが担当者の携帯電話への連絡相談が増えた結果、休日や出張先で対応せざるを得ない状況が生まれている。②は研修会の内容や進め方についてのアドバイスと事務処理を分けてカウントすることが難しいため、その両方をあわせて集計したが、年々、現場の状況を説明し、研修内容のコンサルテーションを求めるところが増えている。①~④の相談件数をさらに集計した総数を⑤にまとめた。

ここ2年間、北麓・東部地域やそれ以外の山梨県内への対応が増加していたが、今年度は日程調整がうまくいかずやや減少した。相談室の現状から70件が妥当と考えている④の訪問による活動は今年度は96件とやや減少したものの、5月下旬から8月末の時期に集中するため、活動の見直しや改善が必要である。訪問活動の内容は、Q-Uの結果を活用して学級の実態を把握し、授業改善に活用するためのサポートが少しずつ増えてきている。

#### ①電話& FAX による相談活動の概要(担当者が携帯電話で行った対応は除く)

相談内容		合 計		
加 畝 四 台	北麓・東部	県 内	県 外	台 計
児童生徒の問題行動についての対応	0	0	1	1
校内研究・調査・研究の進め方や内 容についてのコンサルテーション	7	0	16	23
その他の事務的対応	32	14	74	120
合 計	39	14	91	144

#### ②メールによる相談活動及び事務処理の概要(応答を1回とカウント)

相 談 内 容		合 計		
相 飲 四 台	北麓・東部	県 内	県 外	合 計
研修会の進め方・事務処理	81	60	281	422
学級・学年経営、メンタルヘルスなど	3	0	22	25
合 計	84	60	303	447

#### ③来室による相談活動の概要

相談内容	地域別対応件数			V ⇒T
性 談 内 台	北麓・東部	県 内	県 外	合 計
研修会及び会議の進め方など	1	1	0	2
学級・学年経営、メンタルヘルスなど	2	2	1	5
その他	0	0	0	0
合 計	3	3	1	7

#### ④訪問による相談活動

相談内容	地域別対応件数			合 計
11 畝 四 台	北麓・東部	県 内	県 外	合 計
Q-Uによる学級集団の理解と対応のポイント	4	0	8	12
Q-U の結果に基づく学級コンサルテーション	7	1	33	41
学級集団育成の具体的な方法について の理論 と体験	0	6	26	32
その他	1	0	10	11
合 計	12	7	77	96

#### ⑤形態別による相談活動の概要

形態	地域別対応件数			合 計	
1	北麓・東部	県 内	県 外	] <u>H</u>	
電話 & FAX	3 9	1 4	9 1	1 4 4	
メール	8 4	6 0	3 0 3	4 4 7	
来 室	3	3	1	7	
訪問	1 2	7	7 7	9 6	
合 計	1 3 8	8 4	472	6 9 4	

#### (3) 教育関連講座・研修会の実施

地域教育相談室主催の公開講座を例年通り2回実施した。

#### 1) 第1回公開講座

日 時:2014年5月16日(金)18:30~20:15

内容:「いじめを生じさせない学級づくり」

講 師:鹿嶋真弓氏(高知大学教育学部附属教育実践総合センター准教授・カウンセリング科学博士)

場 所:都留文科大学 2 号館 2101 教室

参加者: 205 名 (教育関係:一般 80 名、学生 125 名)

概 要:まず、学校の危機管理の目的からいじめを捉え、最優先されるべきは生命を守ることであり、学級集団の体質改善を通したいじめ対策、児童生徒の充実感の向上によるいじめ行動の抑制が必要であること、また、全体への対応から支援ニーズの高い児童生徒への個別対応までを統合しながら学校内の全教職員による組織的な対応が必要なことなどを話された。

次に、「人間関係軋轢タイプ」「遊びタイプ」「非行タイプ」からなるいじめの3つの態様と「ソーシャルスキルトレーニング」「感情交流のある構成的グループエンカウンター」「自尊感情を高める」というそれぞれへの対応のポイントについて説明された。さらに「いじめの4層構造」「ペッキングオーダー」、ストレスといじめ加害との関係、学級集団におけるいじめ発生のメカニズムなどについて説明され、友人関係、集団づくり、社会性の育成が重要であることを指摘され

るとともに、その具体的な方法については実習を交えて紹介していただいた。

最後には、今の自分の気持ちや感情や様々な気づきをふりかえり言語化する作業「シェアリング」の大切さとその段階的な実施方法をお話しいただき、それを受けて参加者同士が2~3人グループでシェアリングを行った。

様々な実践の紹介やエピソードに鹿嶋先生の人柄が表れ、参加者の感想にもあるが温かく穏やかな気持ちになるとともに明日への希望や勇気をもらった講演だった。

#### <参考> 参加者の感想(抜粋)

#### 1. 学生の部

- ○現場を体験した方だけが伝えることのできる話を聞かせていただき、大変参考になりました。やはりいじめをなくす、生じさせないためには、地道な日頃からの実践が必要で即効性の強いものは存在していないと思いました。 (社会学科)
- ○いつでも自分の工夫を忘れない教師になりたいと思いました。生徒はいつも一生懸命生活をしていて、自分の心を守ろうと懸命なのだなと思いました。そのような生活の中でも見えてくる、生徒の良さを認めつづけたい、見出し続けたいと思います。 (科目履修)
- ○とても心があたたかくなる授業でした。先生の経験談など実践をもっと聞きたかったです。いいなー、こんな力ほしいなぁーと羨ましく思いましたが、それは鹿嶋先生がたくさんの経験をされたからですよね。私も、沢山経験を積みたいなと強く実感しました。すべて、上手くいくという訳ではありませんが、私も今後頑張りたいと思います。もっと、もっと教育について学んでいきたいです。(初等教育学科4年)
- ○楽しませつつ集中させるという発想があれば、教育実習で生徒をもっと楽しませることができたのにと悔しく思いました。これから教員採用試験を受けるにあたり、小論文や面接だけでなく、現場で活きそうな実践を聞くことができて感動しました。また、現職の先生がたとお話する機会があって嬉しかったです。 笑顔とリアクションが大切だと思いました。 (国文学科4年)
- ○心は目に見えないからこそ、傷つけてはいけないという言葉はすごく納得しました。 子どもがいじめをしてしまう時、他に楽しいことがないということも1つの原因だ と分かり、子どもにとって学校生活の中で大部分を占める授業をまず楽しくするこ とが大切だと思いました。教師の言葉による働きかけによって、子どもの行動が変 わってくるということは、面白いなと思いました。 (初等教育学科3年)
- ○今日の1限の授業内容が不登校といじめについてでした。鹿嶋先生の経験談を踏まえた話がその1限の授業内容をより深め、講座に参加して本当に良かったなという思いです。私の中で、学級経営に対する不安が正直一番を占めている気がします。講座を経て、もう少し教科とかよりも学級に視点を置いてみようと思いました。プラスの言葉かけについては私ももっと知りたい、学びたいと思います。
- ○もっと堅苦しい話かと思って身構えてきたのですが、たのしく聞けて安心しました。 私は、教師は期待されすぎているのが嫌で先生にはなりたくない!と思っているの ですが講座を聞いていると実際に教室に入ってみたくなります。私にもできるよう な気がするというか…。他者にアプローチする前に、自分はそうする段階にいるの だろうか?なぜその段階にいけていないのかと思いなおす機会になりました。あり

がとうございます。

(社会学科2年)

- ○私は、教職をとる予定がなく、いじめをテーマに卒論を書こうとしていたので受講させて頂いたのですが、お話を聞いているうち教員を目指す他の学生が羨ましくなりました。教育者として大変な思いをすることが多いのでしょうが、こんな楽しげな手法で子どもと成長していけるなんて、興味を催さずにいられません。仕方がないので教育現場外からいじめ問題について取り組みたいです。ありがとうございました。 (社会学科4年)
- ○私は、授業などで最近の教育状況について、ひどく難しいことばかりを聞き、教師になってやっていけるのか、教師になっていいのかと悩んでいた。しかし、今回の講座を聞き、学級づくりからまた、教師から変わっていくとクラスが変化することを知り、私が教師になって子どもたちを変えていこうと思った。(初等教育学科3年)
- ○子どもたちがどう思い、どう行動するかをよく理解した。彼らの行動のメカニズムは、我々が考えるより複雑で難しいことがある。「大人なら何でもわかる」という考えは危険で、いつでも彼らの"心"をしっかり様々な側面から考えていく必要がある。また、これらの考えは大学生の自分にも言えることがあり、これらのことを"前提"ではなく"条件"として考えてみるべきだなと思った。このような講演会をもっと色々な人に伝えていければなとも思えた。 (比較文化学科3年)
- ○本日はありがとうございました。短い時間ではありましたが、非常に勉強になりました。現在学校ボランティアで困難を抱える子どもの支援をしています。「ババア」と言われたり、「きもい」と言われたりする中で、やはり援助者側も傷つくことはあります。今回のお話を聞き、「困っている子」という意識、そしてその子の"できていること、いいところ"を認めていく大切さを改めて実感しました。これから実践的に生かしていきたいと思います。 (初等教育学科4年)
- ○「いじめ」がテーマだったので、とても深刻でかたい感じを想像していたのですが、面白い部分もあってリラックスして聞くことができました。教育に限らず、普段の人とのやりとりや関わりの中で今日聞いたことを活かせると思います。教員にはならないのですが、後輩というかわいい年下と関わる機会が増えたので、後輩たちを少しでも良い方向へ導けるように役立てたいと思います。 (社会学科2年)
- ○自分自身の脳には沢山クセがついてしまっていると感じました。先生の言葉が子どもたちに与える影響はとても大きいものだと思っており、子どもは先生のことを「まねる」は本当にその通りだとうなずくお話でした。鹿嶋先生のお話にも出てきた実践の数々、大変勉強になりました。子どもに限らず"みんなって「すごい」"と思うことは自分にとって大きな意味のあるものだと思います。とても有意義なお話をありがとうございました。 (初等教育学科4年)
- ○今回の講座を聞いて、自分の引き出しになかったものをたくさん聞けて、満足感でいっぱいです。教師として、捉え方や生徒への投げかけは、重要なものであり、とても勉強になりました。プラスに捉える練習をもっとしていきたいと思います。教育実習の前にこの講演を聞けて、本当に良かったです。参加できて、鹿嶋先生の話を聞けて光栄です。また来てください!! (国文学科3年)
- ○プロフェッショナルを見て感動して、鹿嶋先生は尊敬する先生の一人になりました。このような形で、お会い出来ると思わず、貴重なお話を聞かせて頂けて、感謝しています。私は来年度から教員になることを志望していますが、学級づくりに重きを置いて子どもたちと向き合うことのできる教師を目指していきたいです。本日はお忙しい中はるばる来校いただき、ありがとうございました。 (英文学科4年)

- ○鹿嶋先生の講座はとにかく巧みであると感じた。生徒を叱らないで築き上げる指導を行うという点で、自分が実際に教壇に立った際に是非とも参考にしたいと思う。また、「他者との交流は自分の成長につながる」という言葉を聞いて、教師も十人十色の生徒との交流を通して、成長していければと思う。 (英文学科3年)
- ○大学での講義では、その先生のいじめ対応や学級経営の実践、経験談を聞くことが 多くイメージがしにくいこともあった。しかし、今日の講演では、脳科学の視点からの話や、様々なアプローチからの話を聞くことができたし、これなら自分が将来 教員になったときにできるかもという気づきもあったので良かった。

(英文学科4年)

○今日は、とてもためになり、教師になってから、実際に実践できるような活動も紹介していただき、勉強になりました。児童支援という立場から、自分の声かけを見直すことの大切さ、自分がイラッとしてしまうようなことがあっても、その子どもの考えをプラスに考える大切さ等、これから教師を目指す自分にとって、指導の基盤となることをたくさん学べました。ありがとうございました。(初等教育学科4年)

#### 2. 一般・教育関係者の部

- ○新年度が始まって1ヵ月。うまくいかないことばかりだなと思うことが多い日々でした。でも、時間もかからず準備もいらず、言葉がけ1つでできる手立てがあったので、早速やりたい。久しぶりに月曜日が楽しみです。 (20代・教職員)
- ○一つ一つの内容が具体的でイメージがつきやすかった。ソーシャルスキルを身につけさせるためにエクササイズなどを来週からとりいれながら学級経営をやっていきたいと思う。 (20代・中学校教員)
- ○鹿嶋先生はプロフェッショナルで拝見し、今回の講義を楽しみにしていました。私は、4月から全校生徒約80人の小学校で、算数の授業の補助(1~6年生)をしています。全校の子どもたちを見ることができる立場にあるので、子どもたちの日々の変化に気づき、声がけをし、他の先生方と子どもたちの話をしていきたいと思いました。学ぶことは真似るという言葉を大切にしていきたいと思います。

(20 代・小学校教員)

- ○「子どもは親の思うようには育たない」という言葉「親のようには育つ!!」という言葉が胸に「ずーん」と残りました。子どもの言動の背景に目を向け、その子どもやその周りの子、また私自身が気持よく過ごせるような手立てを考えていきたいと思いました。とても貴重な時間になりました。 (20代・小学校教員)
- ○私は、毎日自分の学級のことで悩んでいます。(男女不和・乱暴な男子・いじめ・からかいの習慣化) しかし、本日鹿嶋先生のお話を聞き、自分にできること、やっていくこと、子どもとの関わり方を少しずつ変えていこう、チャレンジしていこうと思えました。自分がモデル(よいモデルとなる)として、そのモデルをうけついでくれる子ども、リーダーを増やしたいと思います。ありがとうございました。

(20代・小学校教員)

- ○とても温かい時間でした。今日の自分を振り返り、一つ一つの事に共感できました。 子どもの心を、他の心を感じとれるまで育てるために私たち、身近な大人が行動す ることが必要、みんなに伝えたい今日の感覚でした。 (50代・中学校教員)
- ○楽しみにしていた講座でした。期待以上の講座内容で大満足です。現場の教師(小学校)をしていますが、まさしく先生のお話は、明日からすぐに実践できものばか

りでした。はじめにあかんべーをしたサルの映像はショックでした。赤ちゃんのころから学ぶということは、小学生になって不適切な行動をしている児童を良い方向に導くのは、並大抵なものではないと強く感じました。集団の力で子どもたちの心をやわらげ良い方向に導いてあげることは、長い人生を考えると根気よく、子どもたちに向き合っていくのが大切だと実感しました。 (50 代・小学校教員)

- ○今、6年生の担任をしています。4月からクラス替えもあり、クラスが落ち着きない状況になり、毎日眉間にしわをよせて叱ってばかりいる自分が悲しいです。でも、まず授業が楽しくないからかなとか騒いでいる子にばかり目がいってしまったのか…。本当に反省することができました。明日(来週)からがんばる具体的目標ができました。やってみます!ありがとうございました。 (50代・小学校教員)
- ○今回の講座を聞き自分が今日、子どもたちにかけた言葉や態度を振り返り、子ども に適切な対処を考えていく必要があると感じました。子どもたちに具体的な行動を いくつも持って向かい合っていければと思いました。今回の講座を受けて感じたよ うな温かさを感じさせたいと思います。ありがとうございました。

(30 代·小学校教員)

○1つひとつのお話がすごく具体的で、目の前に子どもの姿が浮かぶようでした。先生の考えがこちらに分かりやすく伝わってきました。月曜日からの実践に役立つ内容で、学校に行くのが楽しみになりました。ありがとうございました。

(40代・小学校教員)

○先生のお話を伺ってとてもあたたかい気持ちになりました。現場で直接子どもたちと対応する先生方がうらやましくもなりました。先生たちと共有しながら、先生たちと共に学ぶ(真似る)カウンセラーでありたいと思います。

(50代・スクールカウンセラー)

- ○"いじめ"は今日的課題であり、子どもと関わる人間がその対応に、真剣に取り組まなければならないことです。現場で子どもたちと向き合うと十人十色です。個別対応の必要性を実感しています。ただ、個別対応だけではなく、個々の児童との関係の問題をクリアしながら学級集団をつくっていくのは難しいです。(特に価値観の多様化、家庭の教育力の低下などが著しい最近では)このような講座を受講し、どのように対応していったらよいか考えることができました。ありがとうございました。
- ○現場に合った内容をありがとうございました。鹿嶋先生は、NHK プロフェッショナルで見て素晴らしい先生だと知っていました。お話の内容がさすが現場の教諭を経験された方で、私たち教諭にとって日々当たり前の様におこっていることでした。なので、先生のお話は明日から現場ですぐに生かせることで、来て本当に良かったです。ありがとうございました。 (40 代・小学校教員)
- ○自分の学級、自分の学校を思い浮かべながら聞いていました。シェアリングの良さ、大切さを感じました。組織的対応の大切さを痛感しました。いろいろな見方をすること。私も大切にしたいと思います。語尾を上げることもこれからも大切にしたいです。お話が聞けて良かったです。ありがとうございました。 (50代・教職員)
- ○色々な先生方の指導法、ちょっとした工夫を知ることができてとても参考になりました。なかなか、他の先生方の授業の指導のコツを知る機会がないので、とても面白かったです。遅れて来てしまい、申し訳なかったですが、聞けなかったところがとても残念でした。ありがとうございました。今後に生かしていきたいと思います。

(20代、中学校教員)

- ○思いあたる事例も多く、大変共感できました。先生のすばらしい実践をもっとお聞きしたいという思いが残りました。秋に、本校(現勤務校)で開催する SPTA の会で、今年度は「いじめ」を取り上げることになっています。(私の勤務校では PTA に、S-Students を加え、3者での行事企画や研修会を企画しています。) 学校に戻って、また、有意義な研修になるように、がんばってみます。 (40 代、高校教員)
- ○遅れての参加になってしまい申し訳ありませんでした。特に印象に残っているのは、 扉の開け方と、漢字が隠れているエクササイズでした。自然と周囲とシェアリング したくなる状況になって、強制力はまったくなく、とても心地よい時間でした。と ても参考になりました。やってみたいと思います。 (20 代、学校等の教職員)
- ○児童・生徒に対してだけでなく、大人に対しても多くあてはまり有効なスキルと思えるものが多々ありました。特に役割の話については新社会人の育成に対しても共通していると思い、明日から実践していきたいと思います。 (30 代、市役所職員)
- ○「エンジェルハート」「語尾を上げる」、簡単にできることを月曜日から実践していきたいと思います。自分の発する言葉、行動がモデルになっていることを忘れずに頑張りたいなと思いました。 (30 代、中学校教員)

#### 2014年5月27日 山梨日日新聞掲載



#### 2) 第2回公開講座

日 時:2015年2月7日(土)13:00~16:30

内 容:「集団づくりに活用する構成的グループエンカウンター」

講師:品田笑子(本学地域交流研究センター特任教授)

箭本佳己 (本学保健センターカウンセラー)

場 所:都留文科大学1号館 1301教室

参加者:14名(教育関係:一般7名、学生7名)

概要:甲府で実施された全国規模の教員研修会の関係で県内の教員の参加がなく少人数であったが、様々な立場の教育関係者や一般の方と学生が交流する場となった。前半は構成的グループエンカウンターについての講義、後半はエクササイズの体験学習を中心に行われた。実施したエクササイズは、「ペンネーム」「スタッフを知るイエスノークイズ」「ひたすらジャンケン」「あいこジャンケン」「2人組インタビュー・他者紹介」「足し算トーク」「足ジャンケン」「☆いくつ」「たこ八」「二者択一」「新聞紙タワー」「感じ事典」であった。

#### <参考> 参加者の感想

- ○心理の授業に似た感じがして、授業を受ける前に受けてみたかったなあと思いました。いろいろな年代の方々と関わることができ、いい経験になりました。 (学生)
- ○今まで新聞紙タワー…立ったことがないので、またリベンジしたいです。

(30代・小学校教員)

- ○自分自身を受け入れる、ポジティブな面を知ることができるといった活動を紹介していただき、子どもたちが人間関係を築いていく活動のひとつとして、取り入れてみたいという機会になりました。ありがとうございました。 (20代・中学校教員)
- ○楽しかった、特に緊張もなかったと思っていたが、終わってみたら結構つかれていた。 (学生)
- ○大変楽しく為になりました。人間関係のあり方など、参考になり感謝です。

(60代・女性)

- ○大変素晴らしい体験をさせていただきました。短い時間でこんなに『触れ合える』 ものは、そんなにありません。先生方のご努力に感謝申し上げます。(60 代・男性)
- ○グループエンカウンターについて、大学の講義で学べなかったことも学ぶことができてよかったです。最初は知らない人ばかりでしたが、楽しむことができたので、とても有効なものだと思いました。もし教員になった時には使っていけるように、さらに勉強したいと思います。 (学生)
- ○楽しいだけで終わらないのが大切だと思った。相手や自分がどんな人なのかたくさん考える機会があった。自分を作らず素直になって参加できた。 (学生)
- ○学級づくりのヒントをいろいろと得ることができてとても勉強になりました。リーダーのあり方や、グループエンカウンターを行う上での留意点もたくさん勉強になりました。 (20代・中学校教員)
- ○集団でこのようなワークショップを行うのは初めてでしたので、とても新鮮で楽しかったです。また、行って頂きたいです。 (学生)
- ○最初は、どうなるんだろうと不安な気持ちで一杯でしたが、終わってみると、とて も充実した時間を過ごせてあっという間に感じたという印象でした。 (学生)
- ○大学の講義では扱われなかったエクササイズもあり、大変勉強になった。実際に、 経験してみないと分からないこともあるので、良い機会となった。初めて会う人と 話ができるチャンスになりました。(学生)
- ○初対面の方とも楽しく話をすることができました。宿泊だと恋に発展しちゃうのも わかります。 (30代・女性)
- ○親しみや楽しさの共感の作り方についてヒントになりました。 (50代・女性)

#### (4) 山梨県内の教育委員会及びその他の教育関係団体との連携

## 1) 都留市教育研修センターと連携した現職教員の学級経営サポート

今年度からは気軽に活用しやすいようにと都留市教育研修センターの担当者と相談し、「都留市現職教員メンタルヘルスサポート」という名称から「現職教員学級経営サポート」に変更した。例年通り年10回20枠を設定し、都留市新転入・新採用教員の研修会で学級経営についての講演と相談室の利用の仕方についての説明を行った。

しかし、今年度も1つの学校を2回訪問し、述べ11学級のコンサルテーションを実施したにとどまった。3学期にセンターの担当者の発案で市担教員の授業参観を4回、授業に関するアドバイスを7名に行った。なかなか研修の機会に恵まれない内、市担教員にとっては有意義だったようであるが、時期的にもっと早めに実施できれば良かったという反省が残った。地元での活動の難しさを痛感しつつも、次年度からは今回のような地元とつながるための新しい展開を考えていきたい。

#### 2) 南都留教育相談ネットワーク会議

地域の教育、福祉関係の担当者が年3回集まり、連携を目標に情報交換をしたり、活動を紹介し合ったりしている。これまで年1回の提案や発表を行ってきたが、今年度からは3年に1回となり、教育相談室の担当は27年度の予定である。

#### 3) 富士吉田市教育委員会

本年度も引き続き「富士吉田市問題を抱える子ども等の自立支援事業」の運営協議会の代表として協力し、年2回の会議では座長を務めた。また、富士吉田市教育研修所の依頼を受け、Q-Uの基礎講座と自分の学級のデータを持ち寄っての事例分析会を2回担当した。昨年度計画していて大雪で中止になった実践発表会を今年度は実施することができた。行事等の関係で中学校の発表は無かったが小学校の2実践が発表され、その講評を担当した。

#### 4) 山梨教育カウンセリング研究会

共催の形で昨年度は計9回の研修会を実施したが、今年度は9月、10月、11月の3回にとどまった。研修会後に参加者のQ-U結果の分析や学級経営のアドバイスをした他、学校公開のときに事例提供者の学級の授業を参観した。

#### 5) 甲州市教育委員会

塩山中学校のスクールスーパーバイザーとして塩山中学校区で1回、甲州市勝沼・大和地区学習会講師として1回学級経営に活用するグループアプローチ(構成的グループエンカウンター及びソーシャルスキルトレーニング)についての研修会を行った。

#### (5) 内容別講師派遣先

1日研修で午前と午後で内容が異なる場合、研修会の前後に学級コンサルテーションを依頼される場合、授業研で1学級に重点的に関わりさらに全学級の分析とコンサルテーションを依頼される場合など様々なケースがある。活動の内容を分かりやすく整理する都合上、午前の内容もしくは代表的な対応で整理した場合と内容別に分けた場合があり、「④訪問による相談活動」の件数とは一致しない。

派遣先を見ると、やはり数年継続しての依頼が相変わらず多い。また、学級集団づくりに

活用するグループアプローチを、実習を交えて学習する内容の依頼が増え、ソーシャルスキル教育に関する内容はひきこもりなどの若者援助の方法としてのニーズが出てきた。学級診断とそれに合わせた対応策のコンサルテーションなど実際の学級経営に直接かかわる内容も多かった。 2) は事前に送ってもらったQーUデータを分析し、1学級を短時間で解説した数である。そのデータを見ながら全学級の授業を見て回ったケースもある。データには賞味期限があるので教師が自力で分析検討ができるような援助をしていくべきだと思っているが、なかなかうまくいっていないのが現状である。自校での事例検討会をリードする人材を育てていく努力をしていきたい。 3) はQーUデータと担任の観察データを統合して学級状態を分析、指導案を見ながら1時間の授業参観をし、その後の協議会で分析や助言をした数である。この2つを合わせると、今年度直接対応した学級数は延べ278学級であった。

#### 1) Q-Uによる学級集団の理解と対応の基礎講座及び事例研究の仕方の研修会

<山梨県内>富士吉田市教育研修所(2回)、石和南小学校、

< 山梨県外>那須塩原市教育委員会、練馬区教育センター、北九州市立教育センター、 佐賀市立金泉中学校、鳥取県法勝寺中学校、千葉市教育センター、三条市 教育委員会、可児市教育研究所:自主研(3回)、専修大学附属高校、葛飾 区立堀切中学校

#### 2) Q-Uの結果に基づく学級コンサルテーション及びスーパーバイズ(述べ248学級)

<山梨県内>富士河口湖町立西浜中学校(3学級×2回)、富士河口湖町立小立小学校(12学級×2回)、富士吉田市教育研修所(15学級+7学級)、都留市立旭小学校(5学級+6学級)、上野原市立上野原小学校(3学級)、那須塩原市立西小学校(10学級×2回)、市川三郷町立市川中学校(6学級)、富士吉田市立吉田小学校(4学級)

<山梨県外>葛飾区立堀切中学校(9学級×2回)、桑名市立多度青葉小学校(5学級+6学級×2)、郡山市安積中学校区内小学校(2学級×2回)、那須塩原市立黒磯中学校(8学級×2回)、那須塩原市立南小学校(10学級×2回)、那須塩原市立大原間小学校(10学級×2回)、那須塩原市立厚崎中学校(10学級)、木曽町立福島小学校(6学級)、練馬区立八坂小学校(12学級)、杉並区立第二小学校(12学級)、那須塩原市立東那須野中学校(8学級)、二本松市立安達中学校(9学級)

#### 3) Q-Uの結果に基づいた授業研究の助言者(述べ30学級)

<山梨県内> 南アルプス市立大明小学校(1学級)、富士河口湖町立小立小学校(1学級)

< 山梨県外>郡山市立安積中学校(1学級×2回)、三重県いなべ市立三里小学校(1学級)、可児市立旭小学校(3学級+2学級)、那須塩原市立黒磯中学校(2学級×2回)、那須塩原市立大原間小学校(2学級×2回)、那須塩原市立大原間小学校(2学級×2回)、那須塩原市立厚崎中学校(2学級)、那須塩原市立西小学校(2学級×2回)、香川大学附属坂出小学校(1学級)、那須塩原市立東那須野中学校(1学級)

#### 4) 構成的グループエンカウンター及びソーシャルスキル教育

<山梨県内>山梨県教育研究所、南アルプス市立櫛形北小学校、石和南小学校、甲州市教育委員会、都留市青少年育成市民会議、甲州市立塩山中学校区、南アルプス市立小笠原小学校、

<山梨県外>葛飾区総合教育センター(4回)、可児市立旭小学校(2回)、逗子市教育研究所、札幌市学級経営研究会、那須塩原市教育委員会、日光市教育委員会、郡山市教育委員会(2回)、三重県津市教育委員会、練馬区立大泉北中学校、松本養護学校、目黒区めぐろ学校サポートセンター、練馬区立橋戸小学校、中野区立桃園小学校、杉並区立西宮中学校、伊賀市教育センター、新潟市若者支援者養成講座、柏崎市立第三中学校区、杉並区立第二小学校、裾野市立西中学校、魚沼市教育委員会

#### 5) その他

桑名市立多度青葉小学校(4回)、郡山市教育研修センター、南都留地区小学校生徒指 導担当者研究協議会、南アルプス市教育委員会、富士吉田市教育研修所

#### (6) まとめ

昨年度より山梨県教育カウンセリング研究会と共催で研修会を実施してきたが、そのネットワークを通した研修依頼や来室しての指導依頼が増え、地域とのつながりが広がりつつあると感じている。都留市教育研修センターとの連携による現職教員のサポートは年20回の枠を用意し、ボランティアで対応する事業である。今年度は利用のしやすさを考え「メンタルヘルス」から「学級経営」を強調する事業に名称を変更したが活用は依然として少なかった。しかし、年度末にセンターの黒部相談員の提案で市担教員の研修の場として活用してもらったことは今後の展開のヒントとなった。予定日以外の日を指定されると苦しい面もあるが、教師サポートを通した地域貢献ができるように、援助の内容や展開の仕方について検討していきたいと考えている。

第1回の公開講座は参加者が200名を超え、テーマと講師が地域のニーズにマッチした企画だったのではないかと考えている。アンケートや感想からは内容に満足していることが伺える。また、今回は事務局のスタッフの尽力で広報の仕方、申し込み方法などを改善できたことも参加者が増えた一因である。この場を借りて感謝したい。次年度も多くの地域の方々に情報が伝わる工夫をしていきたいと考えている。2回目の公開講座は第1回公開講座と同レベルの広報活動をしたが、前述のように県全体の教職員を動員する大きなイベントの影響が出て参加者が限定された。次年度は事前に確認して実施日を決めたいと考えている。

山梨県教育研究所を通した依頼が、今年度は今までとは違う地域から来るようになった。 学級集団理解のツールであるQ-Uを自治体単位で実施するところが多くなっていることに よる影響と考えられる。今後は自校で自力で分析できるようにサポートしていきたい。

南都留教育相談ネットワーク会議では、今年度から提案が3年に1回になり、一つの提案に対して丁寧に話し合うことができ有意義であった。また、そこでの出会いが新たな連携を生むきっかけになるので大事にしていきたい。

富士吉田市教育委員会の要請で平成19年9月より参加してきた「富士吉田市問題を抱える子ども等の自立支援事業」では平成22年度から運営協議会の代表を務めているが、年2回の情報交換の機会を活用して不登校の子どもの居場所づくりの実現を後押しするなど、地道な成果を上げてきている。また、市全体でのQ-U導入が実現し、最初は中学校から始まっ

た導入が徐々に広がり、現在では小学校中学年以上となった。それには教育長の参加するこの協議会での情報交換が影響していると感じている。さらに今年度は、教育研修所と連携し、学級経営の理論を学ぶ基礎研修、参加者が自分の学級のQ-U結果を持参して行う事例検討会(年2回)、Q-U結果を学級経営に活用した具体的な実践事例の発表会(昨年度は大雪で中止になった)などを通して、結果を学級経営に活用するプロセスについて丁寧な研修を行うことができた。この展開方法を可能な限り他でも実現できるように努力をしたいと考えている。

#### <H27年度の活動計画>

- 1. 研修会の企画・運営
  - ・公開講座を年2回程度実施

#### 2. 山梨県内の学校教育サポート

- ・富士吉田市教育委員会、山梨県教育研究所、甲州市教育委員会との連携
- ・その他、各校内研修会への講師派遣

#### 3. 地域の活動への協力

- ・南都留教育相談ネットワーク会議への参加
- ・都留市教育研修センターとの連携による教師サポート
- ・「富士吉田市問題を抱える子ども等の自立支援事業 | への協力
- ・山梨県教育カウンセリング研究会との共催による活動

#### 4. 相談活動

- ・教師の学級経営のコンサルテーション及びアドバイス
- 教師・教育関係者個人の臨床的問題への対応
- ・卒業生の学級経営サポート

#### 5. その他

- ・横浜市スクールスーパーバイザー
- ・那須塩原市教育委員会との連携
- ・郡山市教育委員会との連携(被災地支援を含む)

(文責:品田笑子)

#### Ⅱ-2-3. 地域情報教育

#### 1. 活動指針

2007 年度(平成 19 年度)から地域交流研究センターにおける活動の柱の一つである「発達援助部門」の中の分野の一つとして「地域情報教育」が取り込まれた。

「地域情報教育」における活動の指針として、当初提示されたものからは、周りの環境の変化とともに修正をしつつ、現在は、次の(1)~(3)を掲げている。特に 2011 年度からは、初等教育学科図工・美術教室の鳥原先生が中心となって活動している、地域への美術教育支援プログラムの中で、都留市内では旭小学校をフィールドとした、図工・美術と情報

の連携した新しい図工・美術教育システム作りプロジェクト (たからばこ作戦) を活動の一つとして加えたことによって、より注目度の高い活動をしている。

- (1) 小中学校への情報リテラシー・ネットワーク・セキュリティ教育支援
  - ・都留市情報教育研究委員会(教育委員会、全小中学校情報教育担当者)への参加
  - ・ICT を利用した学校業務に関する研修会の開催
  - ・それぞれの学校の情報教育への支援
- (2) 遠隔授業の実施と支援
  - ・大学と小中学校間での遠隔授業の実施
  - ・小中学校間の交流プログラムの支援
  - ·e-learning への取り組み
- (3) 図工・美術と情報の連携した教育システム作りプロジェクト (たからばこ作戦)
  - ・旭小学校、こどもアトリエ(兵庫県西宮市)を協力校・組織とする。
  - ・保護者への説明、作品の撮影及び利用に関する許諾を得る
  - ・交流支援

これらの活動の中において、(2) 遠隔授業の実施と支援においては、これを実施するための、各小中学校における事前準備の負担からか、積極的に取り組んで活動を実施することができなかった。しかし、(3) の旭小学校における実践活動のために、旭小学校校舎3階の図工教室、パソコン教室をカバーできる無線LANの設置工事を実施、今後の効果的な活用に向けて検討を行っていくことにした。

#### 2. 平成 26 年度の活動

☆平成26年5月21日(水)(杉本、鳥原、舘山)

旭小学校において、大学研究紀要論文に関する原稿の確認。

☆平成 26 年 5 月 25 (日) ~ 26 日 (月) (杉本、鳥原)

兵庫県西宮市「こどもアトリエ」の『さつき展 2014』に参加、搬出作業、今後の活動 計画に対する打ち合わせ。

☆平成 26 年 5 月 29 日 (木) (杉本、鳥原)

都留市教育長室において、「たからばこ作戦」についての説明と旭小学校における活動 に対する説明、承諾を得る

☆平成26年6月9日(月) 東京都台東区上野(杉本、鳥原、大輪)

「たからばこ」システムにおける、データベースの今後のシステム変更や活用について (株) CMS コミュニケーションズの担当者との打ち合わせ

☆平成26年7月6日(日)(杉本、日向)

教員免許状更新講習「情報」(デジタル教材の新しい世界と情報モラル教育の指導)を 担当、受講申請:41 名、出席者:39 名

☆平成 26 年 9 月 27 日 (土)

第10回地域交流研究フォーラムの開催

テーマ: 「センターの歩んだ10年と新たな挑戦(図工・美術教育からの提案)

「たからばこ作戦」についてのカンファレンスを実施

☆平成 27 年 2 月 20 日 (金) (大輪)

旭小学校舎3階への無線LAN設置工事実施

#### ☆平成27年3月13日(金)~14日(土)(杉本、鳥原、舘山、大輪)

主催:京都大学高等教育研究開発推進センター

会場:京都大学吉田南1号館他

「図画工作における ICT を活用した新たな活動」(「たからばこ作戦」の実践と小学校教

員を目指す学生の教職教育の可能性) と題して研究発表

## 3. 平成 27 年度における活動予定

- ①小中学校への支援計画について都留市教育委員会や教育センターと協議
- ②遠隔授業・交流プログラムの実施にむけて新しい方向性の検討
- ③「たからばこ作戦」の実践

(文責:杉本 光司)

#### Ⅱ-2-4. 地域美術教育

#### 1. 活動指針

平成23年度より、地域交流研究センターの『発達援助部門』の新分野として「地域美術教育」が認められた。これにより図工・美術教室全体で地域の美術教育に関わる地域貢献活動として実践することとなった。26年度もこれらの事業を継続した。主な活動は以下の3つである。

- (1) 都留市教育協議会美術研究部学習会(都留市内小・中学校教員との勉強会)の運営
- (2) たからばこ作戦 (都留市立旭小学校と兵庫県の造形教室の連携による研究活動)
- (3) 都留市・県内各地の美術教育活動への協力支援

#### 2. 平成 26 年度の活動実績

#### (1) 都留市教育協議会美術研究部学習会

都留市近隣の小・中学校の教員と本学図工美術教室の教員で杉板を使った教材研究 を行い、意見交換を行った。

平成 26 年 8 月 20 日 (水)

於:美術研究棟 参加者:小学校教員4名 中学校教員1名 鳥原、舘山

#### (2) たからばこ作戦

- ①平成26年5月21日(水) 大学研究紀要掲載論文に関する打ち合わせ 於:旭小学校 参加者:鳥原、杉本、舘山、渡邊(旭小)
- ②平成 26 年 5 月 26 日 (月) 「たからばこ作戦」打ち合わせ 於:こどもアトリエ(西宮市) 参加者:鳥原、杉本、上田(こどもアトリエ)
- ③平成26年5月29日(木)「たからばこ作戦」についての説明と旭小学校における 活動に対する承諾

於:都留市教育長室 参加者:梶原教育長、杉田教育次長、鳥原、杉本

④平成26年6月9日(月)打ち合わせ「たからばこ作戦のシステムについて」

於:(株) СМ Sコミュニケーションズ (台東区上野)

参加者:寺田、永井((株) CMS コミュニケーションズ)、杉本、鳥原、大輪

⑤平成 26 年 9 月 24 日 (水)・平成 27 年 1 月 11 日 (日) 「たからばこ作戦」における 研究協力者 (渡邊雅彦教諭) への取材等

於:都留市立旭小学校 参加者:舘山、渡邊(旭小学校)

⑥平成26年9月27日(土) 発表「センターの歩んだ10年と新たな挑戦(図工・美術教育からの提案)|第10回地域交流研究フォーラム

於:都留文科大学 2102 教室 主催:地域交流研究センター

参加者: 〔発表者〕 鳥原、杉本、舘山、大輪 〔助言者〕小松佳代子(東京藝術大学 准教授)〔研究協力者〕渡邊雅彦(旭小学校教諭)、上田由紀子(西宮市造形教室こ どもアトリエ主宰者)

⑦平成 26 年 10 月 論文「図画工作における ICT を活用した新たな活動概念の一考察 - たからばこ作戦の活動を通して-|

掲載誌:都留文科大学研究紀要第80集

著者(共著):鳥原正敏、杉本光司、舘山拓人、大輪知穂

⑧平成 26 年 10 月 29 日 (水)・平成 26 年 11 月 5 日 (水) たからばこ作戦のデータベースを活用した鑑賞活動及び児童に向けたメッセージカードの制作

参加者: 舘山、図工·美術教室学生

⑨平成27年3月13日(金)~14日(土) 発表 第21回大学教育研究フォーラム 於:京都大学吉田南1号館他 主催:京都大学高等教育研究開発推進センター 参加者:舘山、鳥原、杉本、大輪

#### (3) 都留市・県内各地の美術教育活動への協力支援

- ①宝保育所造形教室
  - i) 平成 26 年 4 月 9 日 (水) 打ち合わせ「昨年度の状況と今後の日程について」 於:地域交流研究センター 出席者:小林、佐藤(地域交流研究センター)、 鳥原
  - ii) 平成 26 年 11 月 12 日 (水) 打ち合わせ「今後の活動内容と実施日程について」 於: 宝保育所 出席者: 佐藤園長、鳥原、杉本
  - iii) 平成 26 年 11 月 28 日 (金) 打ち合わせ「部屋、材料等の確認」 於:宝保育所 出席者:鳥原、藤木 (3年)、高尾 (3年)、佐藤園長
  - iv) 平成 26 年度 12 月 5 日(金) 打ち合わせ「日程の最終確認」 於: 図工・美術研究棟 出席者: 鳥原、舘山、早坂(専攻科)、本学学生 3 名(3 年生)
  - v) 平成27年1月30日(金) 造形教室「お弁当をつくろう」於:宝保育所 参加者:年長組(15名)指導・運営:藤木(3年)、内田(3年)、本橋(2年)、鳥原、舘山
  - vi) 平成 27 年 2 月 5 日 (木) 造形教室 「おもちゃをつくる」

於:宝保育所 参加者:年長組(15名)

指導·運営:藤木(3年)、鷹野(3年)、早坂(専攻科)

②全国&関東甲信越静地区造形研究山梨大会

平成 26 年 10 月 30 日 (木) 全国 & 関東甲信越静地区造形研究山梨大会に鳥原が助言者として参加、また舘山が一般参加 於:山梨大学附属小学校 参加者:鳥原(助言者)、舘山

#### ③陶芸講座

平成 26 年 10 月 18 日 (土) 谷村第二小学校において陶芸講座を開催 於:谷村第二小学校 参加者:地域の親子 (計 41 名) 運営・指導:鳥原、舘山、竹内紋子 (本学非常勤講師)、長谷川 (4年)、石原 (2年)、加藤 (2年)、西野喜人 (2年)

## 3. 平成 27 年度の活動計画

- (1) 都留市教育協議会美術研究部学習会の運営を継続
- (2)「たからばこ作戦」の継続
- (3) 都留市・県内各地の美術教育活動への協力支援を継続

(文責:鳥原正敏)

## Ⅲ. インターフェイスとメディアの活動

## Ⅲ-1. 第10回地域交流研究フォーラムの開催

『センターの歩んだ 10 年と新たな挑戦(図工・美術 教育からの提案)』

平成26年9月27日(土)に第10回地域交流研究フォーラム『センターの歩んだ10年と新たな挑戦(図工・美術教育からの提案)』が開催されました。以下にその概要を報告します。

地域交流研究センターが本学の地域交流推進の礎として 2003 (平成 15年) 年4月1日に設立されてから 10年が経ち、これまでの歩みを振り返ると同時にこれからのセンター運営に対する方向性を見いだす機会として、また、『たからばこ作戦』と名付けた図工・美術教育と情報教育の連携による新たな研究活動について発表させて頂く場として、平成 26年9月27日(土)に第10回地域交流研究フォーラム



を開催いたしました。当初、本年2月22日(土)の開催を計画しておりましたが、2月14日から降り続いた積雪被害の影響により延期とさせて頂きましたが、ようやく開催することができました。

当日の日程は、第1部としてこれまで歩んだ10年を改めて振り返り、第2部では、センターにおける三つの部門活動「フィールド・ミュージアム」「発達援助」「暮らしと仕事」の一つであります「発達援助部門」における新しい活動として、図工・美術教育と情報教育の連携による、子どもたちの作品を撮影し画像・映像化した作品をデータベース化することを目的とした取り組み『たからばこ作戦』の実践について、ここに関わる人々による活動の概要、これまでの成果そして今後の計画について発表しました。

13:00 開会 司会:佐藤優美(初等教育学科4年生)

第1部「センターの歩んだ10年」

杉本光司 (地域交流研究センター長)

13:30 第2部 図工・美術教育からの提案『たからばこ作戦』

司 会:鳥原正敏(初等教育学科教授)

助言者:小松佳代子(東京藝術大学准教授)

☆研究協力者の紹介

渡辺雅彦(都留市立旭小学校)

上田由紀子(兵庫県西宮市造形教室「こどもアトリエ」主宰者)

#### ☆発 表

- ・『たからばこ作戦』について概要:鳥原正敏
- ・システム『たからばこ』の操作と紹介:大輪知穂(情報センター職員)
- ・システム『たからばこ』について説明:杉本光司(情報センター教授)

・ 『たからばこ作戦』の実践について:鳥原正敏

・研究成果の報告:舘山拓人(初等教育学科特任准教授)

☆意見交流

16:00 閉会

なお、当日の感想につきましては、「地域交流センター通信 26 号」46・47 ページに参加者の方々の感想を掲載しております。また、フォーラム全体の詳細につきましては、当年報の前半部において報告させて頂いておりますので、ご一読頂きたいと思います。

(文青:杉本 光司)

会場: 2号館 2202 教室

## Ⅲ-2. 各種講座の開催

#### (1) 都留文科大学現職教員教育講座

#### 〈講座の趣旨〉

## テーマ:『教師の子ども理解と学習指導』

現在、日本の子どもたちの学力をめぐっては、さまざまな角度から「問題」とされております。とりわけ、子どもの読解力をどうつけるのか、そして子どもの算数・数学嫌いをどのように克服していったらよいのかをめぐっては議論の中心になっているといってよいと思います。しかし、残念なことに、これらのテーマを十分に研究・検討する前に「学力向上」対策が、それぞれの学校や教師に求められているのが現状であるといわざるを得ません。

今回は以上をふまえ、一人ひとりの子どもを理解することをベースに、子どもの思考や感情・感覚に即した学習のあり方を探ることとしたいと思います。特に、学校での生活の大部分を占める授業の場面で、子どもを支える学習指導のあり方を深めていくことを追究したいと思います。 (大学 HP 開催情報ページより抜粋)

日 時: 平成 26 年 7 月 24 日 (木) ~ 7 月 25 日 (金)

場 所: 都留文科大学 2号館 2202 教室

主 催 : 都留文科大学地域交流研究センター、初等教育学科

#### 日程と内容

#### 【第一日目】7月24日(木)

午前 9:30 ~午前 9:45 受 講 **受 付** (本学 2 号館) 『講座の趣旨について』 午前 9:45 ~午前 10:00 説明:杉本 光司(地域交流研究センター長) 『子ども理解と学習指導』 講師:山﨑 隆夫(本学非常勤講師) 午前 10:00 ~午前 12:00 内容:子どもに寄り添い、支えるとはどういうことなのか を考えるとともに、その手立ての中心となるべき学 (参加者:34名) 習指導のあり方を実践的に検討します。 『学習意欲を引き出す学びづくり』 -社会科教育を通して-講師:田所 恭介(本学非常勤講師) 午後 1:00 ~午後 3:00 内容:暗記科目と言われがちな社会科ですが、子どもの瞳 (参加者:30名) が輝くような学びをどうしたらつくり出せるのか を、具体的な教材を通して考えます。

#### 【第二日目】7月25日(金)

午前 10:00 ~午前 12:00 (参加者:31 名)	『教科に関する研究講座 I 』 -子どもがわかる授業を作る・ 理科- 講師:平野 耕一(本学初等教育学科准教授) 内容:実験キット等ではなく、身の回りにある道具を用いて手軽にでき、生徒の興味を引くような、有効な実験の方法を多数ご紹介します。
午後 1:00 ~午後 3:00 (参加者:28名)	『教科に関する研究講座Ⅱ』 -算数を楽しむ授業をつくるー 講師: 岡野 恵司(本学初等教育学科講師) 内容: 本講座では、身近なものを使って、生徒に算数のお もしろさを伝える話題を紹介し、その中にある数学 的意味を考えます。

会場: 2号館 2202 教室

この講座に関する出席者の感想は、「地域交流センター通信 26 号」35 ページに掲載しております。 (文責: 杉本光司)

## (2) 都留文科大学子ども公開講座

平成 24 年度に、新たな試みとして、都留市教育委員会学びのまちづくり課の主催する「放課後子ども教室」事業と本学の市民公開講座を連携させ始めた新しい形の市民公開講座であるが、平成 25 年度からは市民公開講座と別に新たに「子ども公開講座」と名づけて、放課後子ども教室事業プログラムの中に位置づけて開催することになった。この形式で開催されるようになった平成 25 年度・26 年度の開催状況は次の通りである。

#### 平成 25 年度:合計参加人数 147 名

開催日	テ ー マ	講師	出席者数
6月30日	都留は自然の博物館	北垣憲仁 特任教授	21 名
8月1日	音楽を楽しもう!	清水雅彦 教授	23 名
8月6日	葉脈しおりの入ったしたじきを作ろう!	吉住典子 名誉教授	37 名
8月9日	読み聞かせから読書の楽しさを(宝小学 校)	日向良和 講師	17名
8月19日	Hello! 英語でワクワク	奥脇奈津美 准教授	28 名
10月3日	折り紙を使った算数	寺川宏之 教授	8名
1月6日	読み聞かせから読書の楽しさを(谷二小 学校)	日向良和 講師	13名
		合 計	147 名

平成 26 年度:合計参加人数 216 名

開催日	テ ー マ	講師	出席者数
8月5日	かたちをつくろう	寺川宏之 教授 岡野恵司 講師	30名
8月6日	葉脈しおりの入ったしたじきを作ろう!	吉住典子 名誉教授	27 名
8月11日	読み聞かせから読書の楽しさを	日向良和 准教授	12名
8月18日	Hello! 英語でワクワク	奥脇奈津美 准教授	29 名
8月18日	楽しく走ろう! Run, RUN, ラン!	麻場一徳 教授	27 名
8月19日	読み聞かせから読書の楽しさを	日向良和 准教授	25 名
8月20日	読み聞かせから読書の楽しさを	日向良和 准教授	1名
8月21日	読み聞かせから読書の楽しさを	日向良和 准教授	35 名
12月7日	ムササビに会いに行こう!	北垣憲仁 特任教授	15 名
12月14日	ムササビに会いに行こう!	北垣憲仁 特任教授	15 名
		合 計	216名

なお、講座講師としてご担当して頂いた、麻場一徳先生による詳細な報告が「地域交流センター通信 26 号 | 34 ページに掲載されている。

(文責:杉本光司)

#### (3) 県民コミュニティーカレッジ講座

#### 1. 地域ベース講座

講座名:『映画から見る韓国事情』

#### 講座概要:

かつて「近くて遠い国」と言われた韓国。文化・経済の交流が盛んになり、行き来する人も増えた現在、韓国に対して親近感を抱く一方で、情報が増大したがゆえに、理解しがたいと感じる場面も多くなっているようです。

本講座では、韓国の映画作品を通して、韓国の文学、歴史、文化、生活を具体的に見ていきます。ヒューマンドラマあり、コメディあり。大学教員として7年間韓国に暮らした経験を持つ講師が、生活実感に基づいた韓国事情をお伝えしたいと思います。(大学 HP 紹介文)

会 場:都留文科大学 2号館 2102 教室

講 師:加藤 敦子(本学国文学科准教授)

#### 講座内容:

【第 1 回】10 月 18 日(土曜日)午後 1:00 ~ 2:30

「現代韓国若者事情」~英語は必須?整形美人は得?~ 受講者:27 名

【第2回】10月18日(土曜日)午後2:40~4:10

「古典が伝える伝統的価値観」〜男は出世、女は貞淑?〜 受講者:27 名

【第3回】10月25日(土曜日)午後1:00~2:30

「軍事政権と民主化」〜お父さんはオロオロするばかり?〜 受講者:21 名

【第 4 回】10 月 25 日(土曜日)午後 2:40 ~ 4:10

「格差と断絶を越えて」〜地方、高齢者、外国人の今〜 受講者:18 名

受講者合計:93名

今回の講座は、隣国の文化という身近なテーマについて、映画の様々な場面の鑑賞に解説を加える、従来とは趣を異にした斬新な形での開催となり、受講者の皆様から好評を頂きました。

#### 参加者から寄せられました感想の一部を紹介いたします(一部省略)

- ・日本と韓国は近い国ではありながらも、考えや価値観は全く異なっていて、その点におもしろさを感じました。良い職に就くためなら「整形して綺麗になる!」というような考えや「子どもの将来のためならお金でも時間でもかける!」という考えはまさに韓国と日本の意識の大きく違う部分だと思いました。今日、映画を観ながら韓国の事情を学びましたが、本当にあの短いシーンでギュッとその国の文化が凝縮されていて為になりました。私も何か日本の文学を研究する際には他国と比較して再度日本のことを見つめ直すのも良いなと思いました。 (10代・女性)
- ・第3回:映画を通じて1960年代、70年代の韓国政治事情の解説をしていただいた。 お隣の国のことだが、なかなか知る機会がなかったので良い機会となった。講師の 説明が分かりやすかった。第4回:韓国における、都市部と地方の格差事情の説明 をしていただいた。韓国においても都市部と地方の経済格差が激しいことを知るこ とができた。経済が発展してくると、都市部と地方の格差がでたり、過疎化が進ん だり、貧富の差が出たり、少子化が進んだりと、そういった問題が発生している。 そのような事情は日本と似ている。しかし、根底にある文化の違いはしっかりと理 解しなければならないと感じた。異文化のことを少し学習できて良かったです。

(50代・男性)

- ・毎日を平々凡々と過ごしている自分が出席させて頂いて、隣国韓国という国の歴史 や考え方を知ることができました。ものすごく興味がわき、わくわくした授業でし た。また、見たい聞きたいという気持ちになりました。 (50代・女性)
- ・今まで知らなかった、韓国について、その根幹となるような知識を頂きました。私たち、言い換えますと私にとって韓国という国柄について、少しでも知ることは、テレビのニュースなどでは知る術もない日韓関係の改善や、理解し合うことにつながるのではないか、そんな大切なことへの大きな力となる。1st step となってくれるのではないかと思っています。かつて日本が隣国韓国へ一体どんなことをしたのか真剣に振り返る必要があると感じました。 (50代・女性)
- ・日本人にとっては昔から近くて遠い国と言われてきた韓国ですが、あらためて私たち日本人があまりにも隣国を知らなすぎたことを思い知らされました。今日の加藤先生の講義は、今、現代の韓国のことをリアルに教えていただきました。あまりにも日本との違いにびっくりいたしました。「彼女の重さ」では学校において見た目を重視して指導していることがカルチャーショックです。本当の意味での健康とか、心のケアーはどうなっているのでしょうか? (70代・女性)
- ・韓国のことは、余りよくわからなかったが、報道以外に別の観点から少しだけ理解できたような気がする。 (60 代・男性)
- ・解説付きの映画観賞。なんて、素敵な時間だったでしょう。映画を見ながらだと、 むずかしい社会情勢など分かりやすくてよかったです。来年も期待しています。加 藤敦子先生、有難うございました。 (60 代・女性)

「地域交流センター通信 26 号」43 ページに、本講座講師の加藤敦子先生の報告を掲載しておりますので、ご一読ください。

(文責:地域交流研究センター事務局)

## Ⅲ-3.『地域交流センター通信』の発行〔第26号〕

#### 1. 本年度の発行の特徴について

これまで『地域交流センター通信』の発行および編集を担ってこられた畑潤編集長が退職されたことにより、本誌の発行の意義や編集体制について地域交流研究センター(以下、センターと記す)の会議で議論した。そして本誌が、①センターの諸実践を多くの人びとと共有する機能を果たしていること、②本学の地域交流の実践を記録として残す機能を果たしていること、③センター内で実践を共有できるだけでなく実践に参加した教職員・学生・市民との紙面を通した交流の場となっていること、などが話し合われ、2014年度も継続して発行することになった。ただし、センターの各部門や編集業務を担当する教員・職員の負担などを考慮し、年1回の発行とした。またこれまで表紙と編集後記をカラーとしてきたが、諸実践の紙面に使用されている写真にも貴重なものが多いため、全紙面をカラー化することとした。なお、本誌の発行にあたっては、センター事務局職員に原稿の取りまとめや校正などの実務を担って頂いたことを記しておきたい。

## 2. 『地域交流センター通信』26号の体裁および配布先の概要

A 4 判、オールカラーで総頁数 48 頁、発行総数は 4000 部である。配布先は別紙資料の通りである。また 2014 年度本学卒業生および 2015 年度本学入学生にも配布した。

#### 3. 紙面の特徴について

巻頭文は、長年にわたり本紙の編集長を務めてこられた畑潤氏(本学名誉教授)に依頼し、センター設立とその理念について記していただいた。その内容は、氏がセンター発足当時から関わってこられた経験をふまえ、センターの諸実践の意義を評価するというもので、私たちが今後の活動を見通すうえで貴重な示唆に富むものであった。26 号では、「地域交流研究センターの一年を振り返る」と題し、センターの活動の内容が把握できるよう、諸実践を部門ごとにまとめ、関連の事業をトピックスとして整理した。各記事にはリードを付け、取り組みの概要が理解しやすいよう工夫し、教職員・学生・市民との記事を通した交流を目指して参加者の感想を中心に紙面を構成した。

#### 4. 2015 年度の発行に向けて

『地域交流センター通信』は、すでに 26 号を発行し、多面的な役割を担うメディアとなっている。センターの活動を広く共有し、部門の諸実践をさらに深めていくうえで、この冊子が果たす役割には大きなものがある。将来の発行に向けての課題は、次の通りである。

- ①編集作業は、毎年2月から3月初旬にかけて多忙な時期を迎える。年度末の作業だけにさまざまな業務と重なり編集小委員会だけでなく原稿を依頼する教員の負担も少なくない。編集業務の軽減をいかにはかるかが今後の課題の一つとなる。
- ②センターは、現在、本誌とともに『地域交流研究』という年報を発行している。両誌にはそれぞれ重要な役割があるが、センターの教職員の作業をできる限り軽減する方法を検討していく必要があるだろう。

(文責:北垣憲仁)

# 地域交流研究センター通信配布先

H 26 年度 2015.03.16 発行

印刷数 4000 部

## 第26号

配 布 先	部数	配 布 先	部数
執筆者	65	市役所	54
市役所学びのまちづくり課を含む内容 関係者	52	市役所ロビー	30
食育都留推進委員会 (内容関係団体)	20	都留市議会事務局	20
本学 名誉教授	42	盛里コミュニティーセンター	15
本学 教授会	80	禾生コミュニティーセンター	15
本学 非常勤の先生がた含む	289	宝コミュニティーセンター	15
センター会議・運営委員会メンバー	7	東桂コミュニティーセンター	15
本学 同窓会各支部	100	ミュージアム都留	30
本学 各学科事務室 (初教)	10	ネイチャーセンター	30
″ (国文)	10	いきいきプラザ	30
<i>"</i> (英文)	10	市立図書館	20
″ (比文)	10	ぴゅあ富士	20
″ (社会)	10	エコハウス	20
<i>"</i> (音楽棟)	15	まちづくり交流センター	40
<i>"</i> (美棟)	10	まちづくり連絡会議	10
〃 (理棟)	30	山梨県立図書館	2
文大附属図書館	30	都留市立病院	3
卒業生	800	各公立大学 地域交流センター	83
入学生	800	国中教育委員会	30
フィールド・ノート同梱用	200	東部富士地域小中学校教育委員会	15
畑 先生	200	東部富士地域小中学校	68
大田 先生	100	県内高校	133
高校訪問	80	県内大学	24
山梨ことぶき勧学院	90	県内支援学校	39
		配布合計	3,821

## Ⅲ-4. 学部共通科目の開講

## (1)「地域交流研究Ⅱ」-生きもの地図をつくる-

地域交流研究Ⅱでは、2011年より前期に「生きもの地図をつくる」をテーマに、身近に見られる生きものの分布調査を実施している。定量的な調査をおこなうことで、季節の変化にともなう生きものの動態を把握し、ここで得られた情報を地域に公開する手法を学び、生きもの地図が地域交流に果たす役割を考察することが授業の目的である。

調査対象は受講生の人数により年によって若干異なるが、2014年は昨年とほぼ同様のタンポポ、12種の樹木、ツバメ、イワツバメ、スズメを対象に調査を実施した。受講生自身が決めた調査対象について、2~10名ほどのグループにわかれて調査をする。例年、調査のさいには事前に用意した簡易図鑑を配布し、生きものに詳しくない学生にもデータが取れるように配慮している。生きもの地図をつくるにあたっては、対象とした種の識別とその生きものがいつ、どこに、どのくらいいたのかを把握することが重要になる。種名が不確かで数量的な記録を伴わないデータは情報量が乏しい。そのため、調査対象の種を正確に識別し、個体数を記録することが重要である。

この授業では野外に出て調査をすることに重きを置いている。生きものに関する知識は、本やインターネットを介して、室内に居ながらにして触れることができるが、自分の足を使って得た情報はとても大事で、直接的な多くの学びはこのような経験のなかにあると考えるからである。受講した学生には、大学周辺の身近な自然に触れ、その意味を考える時間を持ってもらいたいと願っている。

調査をおこなった後はまとめをして、グループごとに1枚のパネルを作製する。ここで作製したパネルは、都留文科大学前駅の待合室に展示し、その成果を広く公開することに努めている。調査、まとめ、パネル作製という一連の作業をこなすことで、調査対象を知り、調査結果から明らかになったことを理解し、その成果を公開することには、どのような意味があるのだろうか。自分たちがおこなった調査から得られた情報を多くの人々に知ってもらうための工夫の仕方、その楽しさ、重要さに気づいていただけたら幸いである。受講生からは「自然に触れ合えるよい機会でした」、「フィールドワークが楽しく、またこういう授業があれば是非とりたい」という意見が寄せられた。

大学の周辺に自然に親しむ環境があるのは、都留文科大学の特徴である。このような立地 を活かした授業運営を今後もおこないたいと考えている。

(文責:「地域交流研究Ⅱ | 担当 西教生)



2014年の授業における調査の様子

## (2)「地域交流研究Ⅲ - 「山梨 を知り、歩き、知らせる-

この科目は、山梨県観光部における「やまなし観光カレッジ事業」との提携により、表に示すように、県内各分野の第一線で活躍している方を講師に招いての 10 回の講座、土曜日開催の 2 回のフィールド・ワーク、そして 1 回以上のイベント・ボランティア参加という 3 つの要素から構成されています。

## 【2014年度講座】

日 程	テーマ	講師	所 属
4月17日(木)	開講式、山梨県の概要 と観光振興	観光部職員	山梨県観光部
4月24日(木)	山梨と富士山	白井 浩隆	ひめねずみ社
5月8日(木)	山梨の歴史	近藤 暁子	山梨県立博物館
5月15日(木)	郡内織物の新しい挑戦	前田 市郎	甲斐絹座(前田源商店) 取締役
5月22日(木)	甲州印傳	上原 勇七	(株)印傳屋上原 会長
5月29日(木)	山梨の果実	堀内 圓	甲斐いちのみや金桜園 社長
6月5日(木)	地域活性	赤松 智志	富士吉田 地域おこし 協力隊
6月12日(木)	山梨のワイン	長谷部 賢	長谷部酒店 勝沼食堂 Papasolotte
6月19日(木)	山梨の方言『Can you speak 甲州弁?』	五緒川 津平太	作家(本名:大堀 卓)
6月26日(木)	都留市の魅力	依田 博江	都留市役所 産業観光課

#### 【2014年度フィールド・ワーク】

日 程	方 面	視 察 先
5月31日(土)	郡内地域	山梨県富士山科学研究所、河口浅間神社、フジヤマ ミュージアム、山梨県立富士ビジターセンター、尾県 郷土資料館
6月28日(土)	国中地域	サントリー白州工場、道の駅「はくしゅう」、白州・ 尾白の森名水公園べるーが、甲斐いちのみや金桜園、 シャトー勝沼

山梨県知事発行の修了認定証を受け取るためには、①7回以上の講座出席、②1回以上のフィールド・ワーク参加、③1回以上のイベント・ボランティア参加、④山梨県観光行政に対する提案レポート提出、という4つの条件をクリアしなければなりません。今年度は受講者数209名となってしまい、上記条件の一つ、フィールド・ワーク参加は、「どちらか一回」ということに変更して対応することにしました。また、授業時期が前期ということもあり、県内におけるイベントや催しの開催そのものが少ない時期にあたり、イベント・ボランティア参加は授業終了後の夏休みや秋の桂川祭への参加も認めて頂くことにしました。しかし、このような柔軟な対応にも関わらず、修了認定者は当初予定者を下回る97名という人数と

なってしまいました。授業の開講時期や成績の仮認定評価法についても課題が提示されましたが、平成27年1月27日(火)の昼休みには、この97名に対して福田学長や山梨県観光部の関係者の出席を頂き、「やまなし観光カレッジ」修了認定証授与式が開催されました。

しかし、科目『地域交流研究Ⅲ』そのものの受講者数はこれまでの最大人数となり、受講のきっかけも先輩から薦められたという声も多く、この講座が着実に浸透していることが覗えます。毎回の講座でも気になったことばや感想を提出してもらい、それを講師の方にお送りしております。

講座だけでなく、実際に現場に出かけて行き、その魅力に触れる機会としてのフィールド・ワークを実施していますが、今年度は、上記一覧にあるとおりの二つのコースで実施しました。ここではミニ・レポートとして視察先に応じた設問が用意され、一日の感想も記入して提出します。また、教養科目『地域交流研究Ⅲ』としての成績認定のためには、更に別な課題レポートの提出が必要です。

この報告内容は、「地域交流センター通信 26 号 | 29 ページにも掲載されています。

(「地域交流研究Ⅲ | 担当:杉本光司)

## (3)「地域交流研究IV」 - 地域の交流誌をつくる -

## 1. 授業のテーマと構成

「地域交流研究IV」は、地域でのインタビューによる実地の学びを言語化し、編集作業を通して多くの人と共有することを目的とした授業である。フィールド・ミュージアム部門(以下、部門と記す)が目指す「人と自然との交流」をインタビューのテーマとしている。部門で実践してきた『フィールド・ノート』の経験を活かし可能な限り実践的な授業を心がけた。地域に出てじかにインタビューしその結果を記事にするという本授業は、今年度で8年目となる。授業では①学生自ら取材の企画を立てる、②アポイントを取りインタビューをする、③見開き2頁の目安となる約2000字の記事を書く、④グループで記事を読み合い、互いに校正をする、⑤冊子作成に向けたレイアウトの手法を学ぶ、⑥レイアウトした記事を冊子としてまとめる、⑦取材先などに冊子を配布する、⑧半期の授業のまとめとして、一連の編集作業が地域との交流に果たす役割を考察する、という校正にした。①から⑧までそれぞれ1~2時間を充てた。

本授業では、インタビューや企画の立案などなるべく丁寧に対応する必要がある。そのため、あらかじめシラバスにも「少人数のゼミ形式を想定する」と明記し、ガイダンスでもその旨を説明した。授業は、全学科、全学年から23名の受講となった。

#### 2. 授業の感想

本授業を受講した学生からは次のような感想が寄せられた。

- ・自分は観光関係の仕事に就きたいと考えていますが、残念ながらこの大学でそれを 学ぶことはできません。今まで踏み切れずにいた一歩をこの講義が後押ししてくれ ました (社会学科1年)
- ・授業を通してじっさいに地域で実践できたので、座学よりも分かりやすく身をもって学ぶことができてよかったです。座学がほとんどの国文学科の私にはとても新鮮でもあり、楽しかったです (国文学科1年)
- ・地域の人と触れあえて、より良い文章をつくるために何度も考え、何より他の人の 記事を読んで都留市の一つの顔も見ることができた気がします。今自分が住んでい るこの町にはこういう人たちがいるんだとほんの一部ですが、知ることができて良 かったです。都留が前よりも好きになりました (英文学科1年)
- ・毎回、このクラスの人の意見を聞くことで新たな発見が生まれ、感受性が豊かになっていくのを実感してきました。もともと文章を書くことは好きだったのですが、「地域交流研究IV」を通じて自分の文章を書くことへの意識が良い方向へと向かっています (環境・コミュニティー創造専攻1年)

#### 3. 課題

「地域交流研究IV」では、じっさいに地域に出てインタビューをし、その体験を記事にまとめた。また記事を全員で読み合うことで自分とは異なる体験を共有し、理解を深めていくことを目指した。地域を知るということは半期という物理的な制約のもとでは難しい部分もある。しかし、さまざまな実地の体験や考え方を共有することを通して地域の自然や人の暮らしを多面的に検討でき理解が深化していく。「(地域について) 新たな発見があった」という感想が多かったことからも、本授業は地域を知るための役割をささやかではあるが果たしているように思う。

だが、課題もある。取材の企画から記事の編集、冊子の編集まで、授業の一連の内容が多いため授業の展開が駆け足になってしまう。また最後には取材対象者に記事を読んで頂き感想を持ち寄って受講者全員で検討したいが、その時間が取れない。今後はもう少し丁寧な授業の展開を心がけたい。

(文責:北垣憲仁)

## IV. 地域貢献活動

## Ⅳ-1. 山梨県地域教育フォーラム南都留集会

平成26年10月に第17回山梨県南都留地域教育フォーラムが富士吉田市で開催された。 運営主体は南都留地域教育推進連絡協議会・富士東部教育事務所・山梨県教育委員会であり、 南都留の9教育委員会、教育長、校長会、教頭会など地域のすべての教育関係団体が含まれ ている。これだけ多くの関係団体が集まる教育フォーラムは他地域ではなかなか見られず、 南都留地域の教育に対する関心の高さを感じた。

テーマは「子どもたちの教育は地域全体で担う」であり、サブテーマとして「みんなで育む地域連携・地域交流」である。テーマ設定の趣旨は子どもを巡る困難な課題を地域全体で考え、解決していこうとするものである。

当日は富士吉田市立下吉田第二小学校を会場にして、約300人の教育関係者やボランティア団体が集まった。はじめに全体会があり、主催者として南都留地域教育推進連絡協議会の小笠原幸夫会長が挨拶し、次に来賓代表として堀内茂富士吉田市長が挨拶した。その後、7分科会に分かれて研究協議が行われた。幼・小・中・高の連携、行政・地域団体・学校の連携などまさに地域が一つになった教育フォーラムが行われた。

分	<b>科</b> 会	分科会テーマ	本学からの助言者
第1分科会	幼稚園・保育所(園)・小学 校部会	滑らかな接続のために	筒井潤子
第2分科会	小学校・中学校部会	学校間連携	品田笑子
第3分科会	中学校・高等学校部会	地域がフィールド	西本勝美
第4分科会	小学校・中学校・高等学校 児童生徒部会	つなげて膨らめる	亀田孝夫
第5分科会	行政・地域団体・学校部会	未来へつなぐ地域の力	金山光一
第6分科会	特別支援教育部会	わかり合い、高め合う	
第7分科会	PTA部会	子どもを守る	

ここからは筆者が参加した第5分科会 行政・地域団体・学校部会について述べる。

この分科会では南都留地域の学校、地域、そして行政が一体となって子どもから大人に至るまで生涯にわたる学習を進めていることを発表した。ここでは世界文化遺産「富士山」の持つ魅力を十分に生かし、それを世界に向けて発信していこうとする発表者の強い意志を感じた。しかし、その道のりは困難であり、この活動を広げるのは並大抵の努力では成し得ないが、二人の発表者は一歩一歩、確実に活動を広げていこうとしていた。

### ○「連携への一歩を踏み出そう」 ~忍野ユネスコこどもクラブの試み~

この活動は富士山の麓、忍野村の豊かな湧き水と清流を次世代に引き継ぐことである。 そのために長田五月会長を中心に、ボランティア団体である忍野ユネスコ協会が環境保護 活動に取り組んでいる。活動の主体はボランティアと地域の青少年、関東一円の学生であ る。さらにこの活動には企業も協力を申し出ている。具体的な活動は「地域の川に蛍を呼

発表 忍野ユネスコ協会 事務局 目向 治子

び戻す」を目標に①水質検査②観察会③幼虫の飼育と放流などに取り組んでいる。 課題としてはメンバーの高齢化で活動の継続が今後、難しくなることである。そこで地 域の小中学校や忍野ユネスコこどもクラブとの連携をすすめて課題解決に取り組もうとしている。

## ○「学校教育」との連携をどう図っていくか ~富士山学習支援事業の取り組みを通して~ 発表 山梨県富士山科学研究所 環境教育・交流部 堀内一義

この研究所は「富士山の過去と現在を探求し、自然と暮らしを未来につなぐ」ことが大きな理念でまさに富士山の世界文化遺産の大きな要素である自然を世界に発信する施設である。これまでも年間4万人の利用者があり、環境教育事業への参加や地元の小学校が林間学習や校外学習で利用している。

近年、施設に環境学習で訪れる小中学生が減少傾向にある。それは平成24年から学習指導要領が改訂されて総合的な学習の時間が削減されて、環境教育に時間をかけて取り組むことが困難になってきたことと学力問題やいじめ問題など学校に課題が山積していることによると思われる。そんな中でも施設として充実した体験活動を提供して、学校と連携しながら地域が世界に誇る富士山を子どもに伝えていきたいと考えている。

地域にとってあまりにも身近な富士山は、ともすると地域の教育課題として忘れがちになる。しかし、この二つの団体はこの活動を広げていこうと努力している。そのために地域の人が集まり、自分の考えを語り合うこの教育フォーラムは大変、有意義な活動であると考える。研究会が終了した後、駐車場で大会参加者の様子を見ていたのだがそれぞれが自然な状況の中で本日の研究会について語り合っていたように感じた。私はこの様子を見て子どもの未来のためにみんなが協力して取り組もうとする地域だと感じた。これからも是非、続けていってもらいたいと思った。

この報告内容は、「地域交流センター通信 26 号」36 ページにも掲載されています。ご一読いただきたいと思います。

(文責:金山 光一)

### Ⅳ-2. 都留市放課後子ども教室事業

#### 1. 「放課後子ども教室」事業について

本事業は、文部科学省の「子どもの居場所づくり事業」(平成 16 年度)および「地域教育力再生プラン」(平成 17・18 年度)を発展的に引き継ぎ、都留市子ども教育連絡協議会を推進主体として、都留市教育委員会学びのまちづくり課生涯学習担当が事務局を担って実施している事業である。「学校の体育館やグラウンド、図書室等に安全・安心に活動できる拠点を設け、地域の住民、大学生、社会教育関係者などを活動指導員として配置し、小中学生を対象とした放課後や週末などにおける遊び、スポーツ、体験活動、学習支援などの様々な活動を行う」もの。本学の学生には学生指導員としての協力・活動が期待されており、平成 16 年度から 20 年度までの5 年間は、本学教員の西本勝美(初等教育学科)が、21 年度からは杉本光司(情報センター)が大学側のコーディネーターとして、「都留市子ども教育連絡協議会委員」として担当している。なお、平成 19 年度より、市町村が費用の3分の1を負担することとなり、県下の多くの類似事業が廃止となる中で、都留市がいちはやく事業の継続と費用負担を決定したことは特筆に値し、平成 21 年度からは、福祉課が担当する「放課後児童クラブ」(学童保育)事業との連携も開始されたことにより、4 地区(東桂、宝、

谷村第二、旭の各小学校区)のみでなく、市内全地区への拡大を希望する声も多かった中、 今年度からは新たに禾生第二小学校区が加わり5地区となった。

学生指導員の活動の中心は「遊び」と「読書と学習支援」であるが、5地区の住民の協力体制が整ってきたこともあって、当初に比べて学生指導員の要請が回数、人数ともに若干減少する傾向にある。また、各小学校が体育館やグラウンドを開放できる日時が、本学学生が参加しやすい日時と一致しない平日の場合もあり、学生が多数参加できる日時の設定となるよう、事務局にはたびたび意見を出している。

そうした日時の制約にもかかわらず、今年度も積極的に参加する学生がおり、リピーター学生が少なくない状況からも学生たちに高い評価を得ている結果としてとらえることができる。また、市側のコーディネーターからも、学生の活動への高い評価をいただいている。学生にとってはささやかな取り組みではあるが、3年次以降の教育実習や「学校参加(SAT)」とはひと味違った、より気軽に子どもたちと接する機会が持てる2年次推奨の活動として定着しつつある。都留市内の小中学校と本学とのつながりを太く、豊かなものにしていくうえで、本事業の継続と発展は重要な一環を占めることになろう。

## 2. 今年度の活動状況

前年度に引き続き、東桂、宝、谷村第二、旭の4小学校区と、新規に開始された禾生第二が加わった5地区において、各地域協働のまちづくり推進会などの協力を得て子ども教室が実施された。小学校のグラウンドや体育館、公民館などの小学校周辺の公共施設、野外などにおいて、遊び、自然・農業体験活動、料理、文化的活動、ものづくり活動、その他特別活動や交流活動が実施された。

教室名 (開始年度)	実施回数	延べ参加者数 (登録者数)	延べ指導員数 (学生含む)	主な活動内容
桂子ども教室 (H16)	42 回	865 人 (163 人)	231 人	・遊び(スポーツ、昔の 遊びなど)
宝っ子クラブ 七里 (H18)	39 回	407 人 (37 人)	247 人	・自然体験 (野菜作り、 山歩き、釣りなど) ・ものづくり (手芸、陶
三吉子ども 体験教室 (H18)	40 回	486 人 (54 人)	218 人	芸、工作など) ・料理(収穫した野菜を 使った料理、もちつき、 お菓子作りなど)
旭子ども教室 (H19)	47 回	761 人 (69 人)	303 人	・その他(絵画、将棋、 囲碁、書道、学習支援、
禾二っ子クラブ (H26)	42 回	930 人 (85 人)	396 人	ボランティア活動、公 開講座など)

本年度(平成 26 年度)は、東桂小、谷二小、宝小、旭小、禾二小の 5 拠点校から、年間で計 49 回・92 名の学生指導員派遣の要請があったのに対し、計 42 回(20 年度:34 回、21 年度:59 回、22 年度:56 回、23 年度:28 回、24 年度:40 回、25 年度:38 回)、延べ70 名(20 年度:52 名、21 年度:90 名、22 年度:97 名、23 年度:40 名、24 年度:60 名、25 年度:62 名)の学生を派遣することができた。昨年度に引き続き本年度にも連続して積極的に参加してくれた学生もいた。参加プログラムと学生たちの応募の状況は次の通りである。

2014 年度「放課後子ども教室」 学生スタッフ募集状況

1 6月25日 水 遊び     ゲートボール(雨天時、自由遊び)     東桂小     グラウンド雨天体育館     15:30 ~ 16:45     15:30 ~ 16:45       2 6月25日 水 遊び     フットサル     旭小     グラウンド雨天体育館     14:50 ~ 16:30       3 7月2日 水 遊び     フットサル     谷二小     グラウンド雨天体育館     15:00 ~ 16:30       4 7月9日 水 農業体験     きゅうりの収穫     谷二小     滝口さん畑(法能)     15:00 ~ 16:30       5 7月16日 水 遊び     ゲートボール(雨天時、自由遊び)     東桂小     グラウンド雨天体育館     15:30 ~ 16:45	注 注 2 2 2 1
2 6月25日 水 遊び     フットサル     旭小     グラウンド雨天体育館     14:50~16:30     :       3 7月2日 水 遊び     フットサル     谷二小     グラウンド雨天体育館     15:00~16:30     :       4 7月9日 水 農業体験     きゅうりの収穫     谷二小     滝口さん畑(法能)     15:00~16:30     :       5 7月16日 水 遊び     ゲートボール(雨天時、自由遊び)     東桂小     グラウンド雨天体育館     15:30~16:45     :	2 1
3   7月2日 水 遊び   フットサル   谷二小   グラウンド雨天体育館   15:00 ~ 16:30   2   4   7月9日 水 農業体験   きゅうりの収穫   谷二小   滝口さん畑(法能)   15:00 ~ 16:30   5   7月16日 水 遊び   ゲートボール(雨天時、自由遊び) 東桂小   グラウンド雨天体育館   15:30 ~ 16:45   5	
4     7月9日 水 農業体験     きゅうりの収穫     谷二小     滝口さん畑(法能)     15:00 ~ 16:30       5     7月16日 水 遊び     ゲートボール(雨天時、自由遊び)     東桂小     グラウンド雨天体育館     15:30 ~ 16:45	0 0
5 7月16日 水 遊び ゲートボール(雨天時、自由遊び) 東桂小 グラウンド雨天体育館 15:30 ~ 16:45	2 2
	2 2
6 7月18日 金 ものづくり 木工工作 コリントゲーム作り 宝小 多目的ホール 13:30 ~ 15:30	2 2
	2 1
7   7月22日 火   学習   夏休みの宿題をやってみよう   旭小   図書室   10:00 ~ 11:30   1	1 1
8 7月22日 火 学習 夏休みの宿題をやってみよう 谷二小 図書室 13:00 ~ 14:30	1 4
9 7月22日 火 学習支援 計画を立てよう自由研究な どの相談 禾二小 ホール 10:00 ~ 11:30	2 1
10   7月24日 木   自然体験   畑の草取り、鹿留自然散策   東桂小   野外(畑) 東桂のまち   9:00 ~ 11:30   1	1 2
11   7月25日 金   ものづくり   手芸小物作り   東桂小   コミュニティー   9:30 ~ 11:30   2	2 2
12   7月28日月   ものづくり   ビーズ小物作り   宝小   多目的ホール   13:00 ~ 15:00   1	2 1
13   7月29日 火   自然   川の石を拾ってアート♪   与縄営農指導センター   与縄の川   9:00 ~ 10:30   3	2 2
14   7月29日 火 ものづくり   石と流木で作品作り   与縄営農指導センター   与縄営農指導センター   10:30 ~ 12:00   1	2 2
15   7月30日 水 遊び   おもいっきり自由遊び   宝小   グラウンド雨天体育館   9:30 ~ 11:00   1	2 0
16   7月30日 水   自然   川の石を拾ってアート♪   盛里公民館   旭の川   9:00 ~ 10:30   2	2 2
17   7月30日 水   ものづくり   石と流木で作品作り   盛里公民館   盛里公民館   10:30 ~ 12:00   10:30 ~	2 2
18 7月31日 木 自然 川の石を拾ってアート♪ 谷二小 玉川 9:00 ~ 10:30	2 2
	2 2
20 8月6日 水 遊び 将棋 谷二小 多目的ホール 13:00 ~ 14:30	2 2
	2 4
	2 2
23 8月22日 金 自然体験 大根の種まき、夏狩自然散策 東桂小 野外(畑) 東桂のまち 9:00 ~ 11:30	1 2
	2 5
	2 2
- ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	2 3
27 9月22日 月 ものづくり 手芸小物作り 東桂小 コミュニティー 9:30 ~ 11:30	2 2
28 10月3日 金 ものづくり 手芸小物作り 宝小 多目的ホール 13:30 ~ 15:30	2 0
	2 2
	2 4
	2 9
	2 1
	2 0
	2 2
	2 2
	2 0
	2 0
	2 2
	2 1
	2 6
	2 4
	2 2
	$\begin{array}{c ccccccccccccccccccccccccccccccccccc$
	$\begin{array}{c ccccccccccccccccccccccccccccccccccc$
	$\begin{array}{c ccccccccccccccccccccccccccccccccccc$
	$\begin{bmatrix} 2 & 1 \\ 2 & 2 \end{bmatrix}$
	$\begin{bmatrix} 2 & 2 \\ 2 & 3 \end{bmatrix}$
	$\begin{bmatrix} 2 & 3 \\ 1 & 0 \end{bmatrix}$
	$\begin{array}{c ccccccccccccccccccccccccccccccccccc$
49   2月4日 水   遊び   昔の遊び・かるた   谷二小   多目的ホール   15:00 ~ 16:30   15:00	1 1

活動総数:49 定員数合計:92 学生応募数(延べ):99 学生参加数(延べ):70 登録学生実数:35名

### 3. 放課後児童健全育成事業(放課後児童クラブ=学童保育)との連携について

平成 21 年度からは、全4 教室において、学童保育の子どもたちにも「放課後子ども教室」への参加を積極的に呼び掛け、学童保育を実施していない日(日曜日など)にも、一緒に活動できる居場所として「放課後子ども教室」を開催し連携を図った。

## 4. 大学主催の市民公開講座との連携

開催日	テーマ	講	師	出席者数
8月5日	かたちをつくろう		教授 講師	30 名
8月6日	葉脈しおりの入ったしたじきを作ろう!	吉住典子	名誉教授	27名
8月11日	読み聞かせから読書の楽しさを	日向良和	准教授	12名
8月18日	Hello! 英語でワクワク	奥脇奈津美	准教授	29 名
8月18日	楽しく走ろう! Run, RUN, ラン!	麻場一徳	教授	27 名
8月19日	読み聞かせから読書の楽しさを	日向良和	准教授	25 名
8月20日	読み聞かせから読書の楽しさを	日向良和	准教授	1名
8月21日	読み聞かせから読書の楽しさを	日向良和	准教授	35 名
12月7日	ムササビに会いに行こう!	北垣憲仁	特任教授	15 名
12月14日	ムササビに会いに行こう!	北垣憲仁	特任教授	15 名
		合	計	216名

(文責:杉本光司)

## IV-3. 文大ボランティアひろば

## 1.「文大ボランティアひろば」とは

本事業は、平成20年度に開始された取り組みである。平成20年5月に、都留市社会福祉協議会と、都留文科大学地域交流研究センターとで相談・打ち合わせをおこない、「地域のボランティアニーズと本学学生を引き合わせるシステム」の構築を目指すこととなった。ただし、福祉系の学部・学科を持たない本学では、授業とタイアップした取り組みは難しく、「大学ボランティアセンター」の設置はさらに難しい。そこで、学内にある学生ボランティアサークルを土台として、緩やかな「連絡協議会」的な会合を持つところから始めることになった。相談過程で重視し、両者で共有した「原則」は、

- ①ボランティアはあくまで自発的なものでなければならず、大学やセンターが押し付ける ものではない。
- ②それぞれのサークルの個性や独自性を最大限に尊重し、新たな負担をかけない。

③活動の蓄積のある既存サークルこそが新しい取り組みの中核である。 といった事項であった。本事業の発展的継続にあたっては、常にこれらの「原則」に立ち戻りつつ、取り組みを見直していくことが肝要であろう。

こうして、社会福祉協議会からの呼びかけと日程調整を経て、平成 20 年 6 月から会合をスタートさせることができた。主軸となるサークルは「つくしの会」、「Σソサエティ」「つる子どもまつり事務局」の 3 団体であり、平成 21 年度からは、学内の「Work — Waku 都留」も主軸サークルの一つとして参加した。平成 23 年度からは「I K I (いこいのひろば支援サークル)」が、さらに平成 26 年度からは「Re; Tsuru (リ・ツール)」が新たに加わった。会合の内容は、前回の会合以降の各団体からの活動報告、社会福祉協議会からのボランティアニーズの情報提供、各団体からの協力呼びかけや新事業の提案、また、時には市民の方からの直接のボランティア募集の告知などが中心である。社会福祉協議会にとっては、とりわけ大学生対象のボランティアニーズを持ち込む「窓口」ができたことが大きく、サークル各団体にとっては、地域のボランティアニーズを問知できること、相互の活動に触れて刺激を受け合えること、これらを通じて各団体の活動が活性化されることが大きい。また、会合の名称については学生たちの発案に委ね、最終的に『文大ボランティアひろば~だれでもどうぞ~』(略称:ぼらひろ)と命名された。この名称は、各サークルには所属していない個人としての学生や、一般の市民の参加も歓迎するという意味合いも持っている。

さて、「ぼらひろ」は発足以来、基本的には第4水曜日の午後6時30分から4号館2階会議室にて開催されることとなったが、回数を重ねるにつれて、各サークルの活動を超えて、参加サークルや個人が協働して行う活動への期待も高まり、先ず「ペットボトルのキャップを集めて世界の子どもたちにワクチンを届ける」活動に取り組むことから始めた。学内の5カ所に回収ボックスを設置し、各サークルが当番で回収し、毎月、都留市社会福祉協議会に届けている。さらに、ボランティアひろばでは、新しい取り組みを始める際には、その都度、新しいプロジェクトチームを立ち上げて対応することにした。こうした中から、平成21年度には「障がいのある方々の余暇活動支援」について新たな取り組みが開始され、同時に、ここに参加する学生もこれまでのような部活動やサークル活動に属しない個人参加学生も迎え、定例会には毎回20名を超す学生・社会人が参加するようになり、徐々にではあるが、学生たちの間に着実に浸透しつつあることを実感できるようになった。学生と社会人とをつなぐ調整役として地域交流研究センター職員も出席している。平成26年度も8月、9月、2月を除く月1回の月例会を9回開催した。

### 2. 「いこいのひろば」の誕生

ボランティアひろばでは、社会福祉協議会や市内の組織・団体を通して募集される、学生ボランティアの要請に対して、積極的に多種多様な活動に参加してきたが、以前から、そのボランティア活動に参加している、市内の授産園「みとおし」で働く人たちとの交流の中から、日常的に、障がいのある方々への支援が、何かできないだろうかという声により、平成21年5月に「ここに集うメンバーで、とにかく何か一緒に始めてみよう!」という新たな目標が掲げられた。そして、当初から中心メンバーの一人として参加している、授産園「みとおし」の佐藤保成さんから提案されていた、「障がいのある方々への余暇活動支援」の実現のための取り組みを行うことにした。「文大ボランティアひろば」の交流から派生したプロジェクトとして位置付けることにより、関心のある人たちが気軽に参加できる場として、その名称も『いこいのひろば』と名付けた。「障がいの有無に関係なく、地域に住む人たちみんなが楽しく充実して過ごせる地域」を目指し、学生だけではなく、地域に住む方々と共に、1ヶ

月に1度イベントや企画を定期的に行えることを目的としたプロジェクトである。そこで、障がいのある人たちとその身近にいる人たちの声をじっくり聞こうということで、この新しい活動は平成 21 年 7 月 1 日に始まり、2 回の試行活動後、平成 22 年 10 月から正式に「いこいのひろば」の活動が開始された。

この活動は基本的に毎月1回開くことを目標に、活動母体となる体制づくりから始めることにした。

先ず、活動指針となる企画書の作成であるが、先進組織としている、東京都渋谷区恵比寿にある、知的障害者恵比寿教室「えびす青年教室」で作成した企画書を参考とさせて頂いた。この、「えびす青年教室」は、渋谷区教育委員会が、主に知的障がいのある方々の社会教育活動の支援並びに、社会的ハンディキャップを背負った方の社会参加の一環を助成するため、障がい者ボランティアが一緒になって活動できる場・プログラムを提供することにより、障がい者とボランティアの人間的成長、相互理解・信頼関係の構築等を図ることを目的として、原則として毎月1回支援プログラムを開催し、積極的に活動している場所である。

## ☆「いこいのひろば」企画書(一部抜粋)

#### (1) 事業目的

障がいの有無に関係なく、地域に住む人たち全員が楽しく充実して過ごせる地域づくりを目的とする。

#### (2) 主催者

いこいのひろば実行委員会

#### (3) 対象者

知的障がいのある人で、都留市保健福祉センター「いきいきプラザ都留」まで通うことのできる 18 歳以上の人。および、こうした活動に関心のある人。

- ※原則として登録者が活動に参加できることとする。
- ※知的障がいのある人で、18歳以上の人のことを「参加者」と呼ぶ。
- ※参加費を毎回100円程度集金する(プログラム内容によっては追加料金あり)。

#### (4) 開催場所・同数・時間

- ○原則として都留市保健福祉センター「いきいきプラザ都留」で行い、プログラム内容 によっては館外で活動することもある。
- ○原則として毎月1回、第3日曜日、年間10回(8月・2月休み)。
- ○開催時間

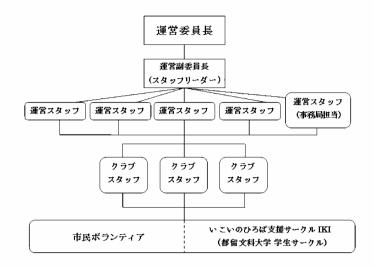
参加者:午前9時45分~午後3時30分。

スタッフ、ボランティア:午前9時00分~午後5時00分まで(事前準備、反省会含む)。

#### (5) 運営体制・組織図

本事業の目的を達成するために、参加者の要望をふまえたプログラムを安全かつ丁寧に実施していく必要がある。そのために、障がい者生活支援の経験のある方に組織に入ってもらい、スタッフ、ボランティアの勉強会も適宜行っていく。プログラムの企画・運営はスタッフとボランティア中心で行うが、希望やプログラムに応じて参加者も参加する運営体制をとっていく。また、ボランティアは、人数把握や個人情報保護の観点から参加者と同様に登録制とする。

### 【組織図】



平成 22 年 10 月 10 日に第 1 回目の「いこいのひろば」がスタートし、以来、年間 10 回のプログラム開催を継続し、平成 26 年度 3 月には通算 44 回目の「いこいのひろば」を開催した。

毎回の月次プログラムの実施に向けては、各回の担当者が中心となり、3回の打ち合わせ会を開き、入念な打ち合わせを実施する。1回目は主にプログラム内容について、2回目は、「いこい通信」の発送、3回目は、参加者の把握、当日のプログラムに合わせた役割、日程確認、準備すべきもの等について打ち合わせを行い、当日に向けての準備を行っている。

このような活動の継続的な実施に向けて、地域交流研究センターからも都留市社会福祉協議会に対して開催に伴う消耗品等の購入に係る費用の一部負担として負担金という形で予算化して拠出している。

(文責:杉本光司・佐藤理恵)

## Ⅳ-4. 地域交流研究センターサテライト

#### 1. 設置について

2013年度に都留文科大学地域交流研究センターのサテライト(分室)が都留市まちづくり交流センター内に設置されました。サテライトは地域の方々に大学をより身近に感じてもらい、さらに深く知って頂くことや大学と市民との交流促進を図ることを目的としています。

#### 2. 相談業務

学生ボランティアの募集や地域の講演会への講師派遣依頼、学生のイベント開催の支援など、大学や地域活動に関連する相談業務を幅広く行ないました。

## 3. 広報業務

地域交流研究センターや大学のイベントなどの情報やポスターを掲示するほか、地域交流センター通信、フィールド・ノート、大学案内の配架も行ないました。また、サテライトの存在を周知するため、「地域協働のまちづくり推進会連絡会」など、地域のかたが多数集まる集会やイベントに積極的に赴き、サテライトの設置と役割について説明をしました。大学ホームページ内でも地域交流研究センターサテライトのページを作成し、H26年度の活動報告を掲載しました。

### 4. ファミリー・サポート・センターとの連携

ファミリー・サポート・センターと連携したイベントを企画しました。2014 年度は、都留文科大学児童文化研究部による影絵のイベントを開催しました。

#### 5. 暮らしに役立つみんなの広場

まちづくり交流センターでは、さまざまな世代が気軽に交流できる場の実現のため、「みんなの広場」と題した、ミニ講座を定期的に開催しました。毎回、ボランティア講師による 多彩な特技や趣味を活かした講座を開講していて、都留文科大学の学生にも講師として協力 をしてもらいました。

2014年度は合計で23回開催しました。都留文科大学生には、1月と3月に講師となってもらいました。

### 6. 『協働通信』(都留市広報「つる」)

都留市広報「つる」の『協働通信』の欄を担当しました。毎月、地域で活躍しているかた や地域を元気にするような活動をしているかたを取材し、記事にしました。

#### 7. 2015 年度の展望

サテライトの存在をもっと多くのかたに知ってもらい、広く活用してもらうために周知活動を引き続き継続していく必要があります。また、学生への施設利用の促進、学生・市民から寄せられる相談・依頼への柔軟な対応を目指します。

(文責:佐藤理恵)

## IV-5. 文大名画座

文大名画座は、本学教員を広く市民の皆様に紹介するとともに、教員がおすすめの映画を 上映し、そのエピソードなどを語ったり、解説をすることを内容として、平成 18 年度から 地域貢献活動の一環として実施しています。平成 26 年度は次のとおり開催いたしました。

**日** 時: 平成 27 年 1 月 31 日 (土) 13:30 ~ 16:00

場 所:2号館101教室

担当教員:初等教育学科 堤 英俊 講師映画タイトル:『幸せの太鼓を響かせて

~ INCLUSION ~ |

本作品は、知的障がいのあるプロの和太鼓集団「瑞宝太鼓」のメンバーたちが家族や地域(長崎県雲仙市瑞穂町)とともに生活する姿を映し出したドキュメンタリー映画です。

上映前には、初等教育学科の堤ゼミ(障害児教育臨床ゼミ3年)の学生3名から「やりたいことを仕事にすること」に関して問題提起がなされ、私の方からは、映画のサブタイトルにある「インクルージョン」の説明とともに、自らの日常や地域のレベルでインクルージョンを具体的に考えていくことの重要性についてレクチャーを行いました。事前に学生3名は静岡、私は埼玉の自主上映会(および「瑞宝太鼓」の公演)に参加し、そこで直に感じたこと・考えたことを持ち寄って今回の前座の構成を考えました。

映画概要: INCLUSION インクルージョン =包み込む社会。障がい者が施設で暮らすのでなく、地域社会でともに暮らす。この考え方は、20世紀末から世界の動向となり、この方向性は、日本でも目指すべき社会の形として注目されつつある。長崎県の通称コロニー雲仙では、知的障がいのある人々が、コンクリート建ての立派な施設ではなく、ごく普通の地域社会で、職員や周囲の人々の支援と協力を得ながら自立して暮らしている。この映画の主人公はここで暮らす「瑞宝太鼓」のメンバーだ。リハビリ的なクラブ活動として始めたものの、ひたむきな練習で今やプロとなった和太鼓奏者たち。カメラは、彼らの素晴らしい





太鼓演奏はもちろん、日々の普通の暮らしを丁寧にすくいとる。それは、彼らが普通を手にするまでには、長い道のりがあったからだ。長い時間と長い闘いをへて、彼らはコロニー雲仙で「普通の暮らし」を手にすることができるようになった。普通の日常が呼び起こす大きな感動がここにはある。「瑞宝太鼓」の各メンバー、その家族や恋人、そして、かつて息子と別れて長く辛い日々を送った母親までもが、ありのままの姿でカメラの前に立ち、自分が生きてきた道を語るとき、それはきっと、どんな文献よりも、優しく強く、インクルージョ

ン INCLUSION の世界を示すだろう。

前日に積雪があったこともあって、開催自体が危ぶまれましたが、蓋を開けてみれば、160名近くの方に足を運んでいただくことができ、盛会に終えることができました。そして、郡内地域の教育・福祉関係のみなさま(当時者を含む)にも多数ご参加いただくことができました。以下は参加者の感想の一部です。

- ・たいこは、はく力がありよかったと思う。努力すれば出来ることが分かった。しょう害があっても何事も出来ると思った。ありがとうございました。 (10代・女性)
- ・和太鼓をやっている私にとっては太鼓を打ちならすことの難しさ、打ち込む思い の強さにとても共感することができました。和太鼓チームに焦点をあてるのではな く、それを取り巻く社会そのものが、どうであるべきか、考えさせらせた。ぜひ、 自分のまちをそういった視点で考えてみたい。ありがとうございました。

(本学学生・社会学科)

- ・感動の一言です。彼ら、彼女の生き様が、なんとも素晴らしく、たくましく、誠実で決しておごらず、感謝を忘れず前向きであることが、本当に私の心を打ちました。それは、和太鼓の、笛の音となって聞く人一人一人の心にちゃんと届いているのは不思議です。本物のたくましい音なのでしょうね。生きていくことの楽しさ、意味を考えさせてくれた映画でした。 (40代・女性)
- ・自分の居場所で、精一杯生きていること、やるべき事を全力でやっていること、今の時代の中で一番大切なのはそんなひたむきさではないかと思わせてもらった素敵な映画でした。彼らの背景にあるものでなく、純粋に太鼓で感動。プロ根性すごいです。 (40代・女性)
- ・すばらしい映画を見せていただきありがとうございます。太鼓の響きだけではなく、親子とは、夫婦とは生きるということとは、そして障がいとは、全てをいろいろと考えさせる映画でした。今、ちょうど子どもの事で色々と悩んでいたところだったので、自分の小ささに笑いたくなった気分です。感謝です。 (60代・女性)

なお、「地域交流センター通信 26 号」の 41 ページには、今回の名画座の前座を担当した 学生 3 名の感想を掲載させて頂いております。

(文責:堤 英俊)

## IV-6. 学級づくりの向上を目指す実践講座

平成 26 年度は7回にわたって開催された(参加者はのべ 129 名)。

- ・第1回 4月26日(土)講師 渡辺幸之助(勝山中学校) 「学級担任の夢と理想~人間性の「回復」と可能性の目覚め~」
- ・第2回 5月24日 (土) 講師 杉本賢二 (富士・東部教育事務所) 「急務!「学級づくり」こそ学力向上のキーワード」
- ・第3回 6月28日(土) 講師 鈴木輝英 (東桂小学校) 「小中連携で学級の力をどう伸ばし、可能性をどう広げるか」

- ・第4回 7月26日(土)講師 原 喜雄(加納岩小学校) 「学校経営として取り組む学級力向上プログラム」
- ・第5回 9月27日(土)講師 **芦澤稔也(増穂中学校)** 「学習意欲・学習習慣を支える学級づくり~自主学習ノートの取り組みを中心に~」
- ・第6回 10月25日(土)講師 秋山俊哉(韮崎西中学校) 「特別支援教育から培った生徒理解を学級づくりに生かす~思春期の荒れを理解する手だ てとして~|
- ・第7回 11月22日(土)講師 梶原宣仁(石和北小学校) 「授業づくりが学級集団の基盤をつくる|

毎回、現職の教員のみならず、本学の学生も参加している。学生にとっては、大学の講義だけでは分からない学級づくりの具体的な方法や事例を学べるだけでなく、現職の先生方とも身近に交流できるということが大きな魅力となっている。

平成27年度も、7回にわたって開催される予定である。

- ・第1回 4月25日(土)講師 渡辺幸之助(秋山中学校)「SNSに負けるな! コミュニケーションに満ちた学級づくり」
- ・第2回 5月23日(土)講師 金勝武鑑(富士学苑中学校) 「子どもたち、この素晴らしきもの」
- ・第3回 6月27日(土)講師 長谷川俊一(池田小学校) 「班やリーダーの意味は何?原則から今抱える悩みまで|
- ・第4回 7月25日(土)講師 渡邊克吉(吉田小学校) 「対話と話し合い活動を通して安小感のある学級づくりを」
- ・第5回 9月26日(土)講師 芦澤稔也(増穂中学校) 「自主学習ノートの挑戦! 学力保障から信頼関係づくりまで」
- ・第6回 10月24日 (土) 講師 清水佳子 (禾生第二小学校) 「子どもを信じ、認めることから学級づくりが変わる」
- ・第7回 11月28日(土)講師 三浦 淳(都留第二中学校)「Q-U 学級満足度 90%以上を目指す学級づくり」

(文責:鶴田清司)

## V. 地域交流研究教育プロジェクト

## V-1. 田んぼクラブ -稲作体験実習の取り組み-

プロジェクトメンバー

- ·西本勝美(代表·本学初等教育学科)
- ·畑 潤(本学社会学科非常勤講師)

#### 1. 本活動の経過と活動概要について

「田んぼクラブ」は、2005年度に、都留市職員の勧誘・仲介を受けて、都留市農業委員会および山梨県富士・東部農務事務所の協力のもとに始まった活動で、本学近くの水田(約6畝)で学生と教員の有志が稲作に取り組む、今年度(2014年度)で10年目の節目を迎えた活動である。

当初の2005年度~2007年度の3年間は農務事務所のはからいで山梨県の「ふるさと水と土基金」の助成を受け、続く2008年度・2009年度の2年間は「環境教育GP」の一環に位置付けられ、活動が大いに発展した。そして、2010年度からは、本学の「環境ESDプログラム」との関連(実習系への位置づけ)もあり、本学地域交流研究センターの「地域交流研究教育プロジェクト」に申請し採択されている。今年度は、プロジェクトとしての第2期2年目(通算5年目)であった。

2008 年度以降は農業委員会から自立し、「基本的にはすべての作業を自分たちでやる」ことを目標として、それまで市役所の農業リーダーや農業委員会に一任していた種籾の消毒・催芽といったところから、播種、田植え準備、水入れ、田植え、除草、稲刈り、はざ掛けはもちろん、夏期休業中の水見も曜日毎の当番制でやり切っている(代掻き等のトラクター作業と、脱穀・精米はJA等に依託)。無農薬・有機質肥料の使用による有機栽培米への挑戦も一つの目的としている。

2010年度からは「学生主体」の運営が目指され、ほとんどの作業を学生のリーダーシップで進めることができるようになってきている。

### 2. 今年度(2014年度)の活動について

プロジェクト5年目となる今年度(2014年度)の活動であるが、学生主体の農業系サークルとしての運営が定着し、学生組織としては、三代目の新学生代表と二名の副代表を置く形となった。

活動の大きな特徴としては、2011年度から「水苗代」と「一本植え」に取り組んでいることが挙げられる。これは2011年度当初に、一代目の学生代表を中心とする学生メンバーからの発案がきっかけとなり、学生数名で長野県の農家に研修に行き、ノウハウを教わったうえでの取り組みである。

「水苗代」は、田の一角に周囲を堀で囲った床をつくり、直に種籾をまいて苗を育てる育苗法で、農村でもほとんど見られなくなった古い方法であるが、これに取り組むことで米づくりの全行程をクリアし、発芽や苗の生長のようす、稲の旺盛な生命力を実感することができる。昨年度から、この水苗代の改良型として、木枠とブルーシートで浅いプールを作り、その中に播種した育苗箱を並べる方法を試みている。これは育苗中の雑草対策と、水管理の

合理化のための改良であったが、水の不足や温度の過上昇が一気に致命的なダメージとなること、プール内の水質が悪くなることなど、思いがけない困難も生じ、土(自然)と切り離した環境で苗を育てる難しさを痛感することにもなっている(土とつながっていれば、さまざまな変化が緩衝される)。

また、今年度は諸事情から播種の時期が例年に比べて2週間以上遅くなったことも一因となって、プール苗代の温度が上がりすぎ、発芽した芽がかなりの割合で枯死するという事態となり、途中からビニールトンネルを黒色の寒冷紗に架け替えるなどの対策が必要になった。この播種時期の遅れは後々まで悪影響を引きずることになった。

田植えは、上述のように 2011 年度から、通常の手植えの場合よりもさらに大きく育てた苗を、縦・横 30cm間隔(尺植え)で 1 本だけ植える「疎植一本植え」という方法でおこなっている。稲は 1 本だけ植えても根元から分けつして  $20 \sim 30$  本に増える。通常の植え方(3  $\sim 5$  本くらいを一個所に植える)ではわかりにくいが、「一本植え」では 1 本が 20 本に、また「一粒が千粒」になると言われている稲の生態をはっきりとつかむことができる(実際に収穫時に数えて「一粒が千粒以上」になることを確かめた)。これらの取り組みは、米づくりの工夫を知るという点でも、稲という作物を深く知るという点でも大きな成果を挙げている。

ただし、今年度は上述のように生育不良のため細くて短い苗が多く、田植えが困難であったのに加えて、苗の数も不足してしまった。これは後に、学生メンバーの一人が、知り合いの地元農家に残り苗を分けてもらい補充できた。また、昨年度に引き続き、学生メンバーが仕入れてきた都留市産の「黒米」を田の一部に植えた。こうした苗の補充や黒米の調達を、教員の手を介さず、学生たちの人脈と行動力によって実現できたことは評価に値する。

次に、ここ数年間と同様に、今年度も除草が徹底しておこなわれた。田植えの2週間後から出穂期まで数回、学生たちの主体的な除草作業が徹底しておこなわれたため、以前は大発生していたノビエをほぼ押さえ込み、代わって目立ってきたのは稲の生長に害の少ないコナギである(この雑草は除草剤をまかない水田に限って発生するとのことで、活動当初からの無農薬栽培の成果の現れでもある)。無農薬栽培のため、最初の1~2回は手押し式の除草機も併用してはいるが、除草作業は炎天下の重労働である。この労苦の多い作業を例年、学生主体でやりきっていることは、継続して関わりを持つ学生たちのなかに「自分たちの田んば」「自分たちの稲」という意識が芽生えてきたことを意味する。これは「農」という営みの本質に触れる部分であり、これまでの活動の蓄積・成果として高く評価できる。

今年度の困難は収穫時期にも続き、これまで脱穀を依頼していた元市職員の方の脱穀機が 故障とのことで、脱穀をどうするか学生メンバーに考えてもらったが難しく、はざ掛けした まま1ヶ月半以上も放置することになってしまった。最終的に、大学の職員の方に私(西本) が個人的に依頼して、なんとか脱穀を終えることができた。

さらに、今年度は活動開始から 10 年目の節目ということで、学生メンバーの企画・運営による「田んぼクラブ 10 周年記念イベント」が年末の 12 月 20 日に開催され、新旧のメンバーが懇親を深める機会となった。イベントでは初代からの学生代表が顔を揃え、会食では今年度収穫した米を主役としたカレーライスが提供された。また、10 周年記念の『資料・報告集』が編纂され、これまで本活動に関わりをもった教員のメッセージ、『地域交流研究年報』や『地域交流センター通信』等に掲載された紹介・報告等が一冊にまとめられている。

ここでもう一つ書き留めておきたいことは、10年にわたる無農薬栽培の成果である。今年度7月の地域交流研究センター運営委員会にて昨年度の「田んぼクラブ」の活動報告をした際に、上述のようにノビエに代わってコナギが増えてきたという報告に対して、初等教育学科の坂田有紀子先生から、「私はコナギが大好きなのですが、田んぼクラブの田んぼにコナギが復活したことに感動しました。無農薬栽培を10年近く続ければ、コナギが復活する

ことがわかりました」という発言があった。さらに、特任教授の北垣憲仁先生からは、「田んぼクラブの田んぼに行くと、トノサマガエルの鳴き声がします。都留市の他の場所では聞いたことがありません。トノサマガエルは山梨県では絶滅危惧種になっていますが、田んぼクラブの田んぼは、トノサマガエルが生息できる環境になってきているのだと思います」という指摘があった。私自身はそこまでの自覚はなかったのであるが、「田んぼクラブ」の10年にわたる活動が、絶滅危惧種が生息できる環境や生態系を回復させるところまできているという大きな「成果」を踏まえて、今後は学生メンバーともども、より自覚的・意識的な取り組みをしていきたいと考えている。

なお、一昨年度から本学の「環境 ESD プログラム」の「実習系」活動の履修(2年次)が開始され、「田んぼクラブ」は同プログラムの「ナチュラルライフコース」の選択履修対象に位置づけられているが、今年度は該当者がいなかった。

#### 3. 来年度(2015)年度の活動に向けて

2015年度は、今年度副代表をつとめた学生の一人が、四代目の学生代表として活動をリードすることになった。新メンバーの勧誘もうまくいったようで、かなりの人数で活動にあたっている。また、2014年度の反省を踏まえて、播種の時期を4月末に早めたことが奏功し、若干のトラブルはあったものの田植え時には過去最高と言える苗の育ち具合となった。今後の生長と収穫に大いに期待したい。

なお、「環境 ESD プログラム(ナチュラルライフコース)」の実習系としての参加者は2~3名となる予定である。

(文責:西本勝美)

# V-2. 食育つる推進プラン ~市民会議と大学の連携による学生主体の食育実践活動の試み~

初等教育学科 生活環境科学系 平 和香子

## <プロジェクトの概要>

都留市では、「第5次都留市長期総合計画」に掲げる「健康ではつらつと暮らせるまちづくり」の実現に向け、市民一人ひとりが自ら考え主体的に健康によい食生活を営めるような環境づくりを図ることを目標としている。

その具体的活動として、平成19年3月に「食育つる推進プラン」を策定するとともに、効果的な計画の推進と推進活動の充実を図るため「食育つる推進市民会議」を設置し、食育を推進する各主体の情報共有と協働により、様々な取り組みを実施している。

また、平成25年度からは、前プランに引き続き「新食育つる推進プラン」(~平成27年度)を策定し、内容の継承及び更なる推進を図っている。この新プラン活動開始時に、市民会議に生活環境科学研究室の学生も共に参画が可能となり、食育に関する現場での学びの機会を得る貴重なチャンスとなっている。

#### <目的>

- ①学生が、都留市における食育の現状やあり方、また保育や学校現場における食育教育について学んだ上で、様々な現場での活動や実習を通して、将来教員になる上での食育実践力や連携力を培う。
- ②学生が、市民一人ひとりが生涯を通じて健やかに暮らすことができるよう、健全な食生活の実現、食文化の継承、健康の確保等についてどうしたら良いか考え、市民参加型の取り組みに移す実践計画から運営までを主体的に検討する。
- ③学生が、自らの「食」について考える習慣、「食」に関する様々な知識、「食」を選択する 判断力、「食」を調理加工する実践力を身につける。
- ④学生が、世代を超えた市民の皆様との交流の中で、コミュニケーション力を高め、高齢者 の方々や乳幼児との接し方について学ぶ。

#### <平成 26 年度の報告>

平成26年度は年2回(7月、3月)開催される「食育つる市民会議」の中で、学生が都留市の食育改善に参画するにはどのような方向性が望まれるか、どういった協力を得られるか等について計画案及び実施準備を行った。

- ●第1回全体会議(平成26年7月25日・至ミュージアム都留)
  - ・食育つる推進市民会議実施計画案における重点目標に即し、年度内に市内教育機関への 栄養教育出前授業を提案した。
- ●さくら保育園栄養教育出前授業(平成 26 年 12 月 17 日)
  - ・さくら保育園の全園児を対象に、生活環境科学ゼミ学生 15 名が、好き嫌いをなくして 食べようをテーマに、ホールで食育劇やパネルシアター、ゲーム等を行った。
  - ※今年度は食育劇やパネルシアター、園児たちへ渡すプレゼントとして学生が作成する お弁当袋に用いる生地等に予算を充てさせていただいた。
- ●第2回全体会議(平成27年3月20日・至都留消防署)
  - ・さくら保育園での活動報告及び、学生からの提案(別紙)を発表させていただいた。これらの提案に関し、大いに関心を寄せていただき、来年度も新たな活動を実施予定である。

今年度も、都留市の主任栄養士や学校栄養教諭、幼稚園や保育所の代表の方々をはじめ、 食育の専門の方々が多く出席する会議の中で、自分たちの考えを理解してもらい、協力して もらえそうなことが分かり、学生たちはとても嬉しく感じ、やる気になっている。

来年度も引き続き、食育委員の方々や地域、学校関係の皆様から沢山のことを学ばせていただきながら、食育に関して学びを深め、都留市の食育活動に貢献できたらと考えている。

(参考資料)・活動報告及び学生からの提案(第2回全体会議配布資料)

#### 活動報告及び学生からの提案

都留文科大学文学部初等教育学科 生活環境科学専攻平ゼミ 3年

#### (1) 食べ物が私たちの口に運ばれるまでを知ろう!

対象:小学生 開催回数:1年間(月1~2回)

普段、口に運ばれている食べ物がどういった過程を経て、私たちの手元に届いているのかを知ってもらいたい。その過程を知ることで、残飯を減らすことや食べ物自体や関わった人たちへの感謝の気持ちを生み出すことにつなげたい。具体的な活動は、年間を通して、都留市の野菜農家の方に協力していただき、農業体験を行う。農業体験は子どもたちが「植える」「収穫する」にとどまらず、その間の「育てる」部分も体験し、子どもたち自身の体で学んでもらう。そして、最後には一緒に育てた人たちと収穫したものを食べる。できれば、都留市特産の野菜がよい。都留市特産の野菜で実施することで、地元への愛着が生まれ、地産地消に目を向ける機会をつくることができる。

(2)食べ物クイズ 対象:小学生~ 開催回数:1回(食育のイベントの際に)食べ物がどのように育ってきたのか、どうやってできてきたのか、ただ食べているだけでは関心を持つことは少ない。そこをクイズ形式で楽しみながら知ってもらう。「これはどうやって育ってきたの?」という素朴な疑問から、ただ食べるのではなく、食事の楽しさや、食品加工・農作物の素を知ってもらいたい。クイズを行う際に、イラストや写真、実物等を活用し、子どもたちが具体的にイメージしやすいようにする。これを機会に、食事に関心が向けられることで、質の高い食事へとつながっていくことを目的とする。

例:Q1 かまぼこは何でできているの? A. 魚

Q2 レンコンはどこで育つの? A.池

(3) 食事マナー講座 対象:小学生~(親子での参加も…) 開催回数:数回食事のマナーは家庭教育で行われてきたが、薄れてきているように感じる。そこで、講座を行った上で、実際に食事をし、実践する機会を設ける。具体的には、箸の使い方、フォークナイフの使い方、和食の配膳の仕方、三角食べ、その他食事の際のマナーの講座を行う。また、講座のあとに体験として参加者全員で食事をし、アドバイスを受けながら実践する。正しいマナーで食べることができれば、周りも気持ちよく食べられることを知ってもらいたい。また、日本の食文化だけでなく、外国の食文化を知ることで、より食事の楽しさにつなげられると期待している。

(4) 年中行事と食を楽しもう! 対象:小学生、大学生、地域の人 開催回数:数回 年中行事はどんどん簡易化されてきており、伝統が廃れ始めている。年中行事は日本の大 切な文化であり、各行事に意味があって行われてきた。その年中行事には、食も欠かせないものになっている。この現状を踏まえ、季節に合わせて各年中行事を楽しむきっかけとなるよう食を軸に講座を行いたい。年中行事の際に食されるものをつくり、食べて、さらに年中 行事の意味について考えるものとしたい。

# (5)食生活を見直そう!

対象:小学校高学年~ 開催回数:1回

食生活の乱れによって、生活習慣病につながることが指摘されている。しかしながら、手軽に食べられるお菓子や、ジュースには大量の糖分・塩分が含まれている。それを目に見える形にし、今の食生活を見直す機会にしたい。

具体的には、ジュースに入っている糖分を角砂糖等に置き換えて、どのぐらい入っている かはっきりとわかるようにする。スナック菓子に入っている塩分も、実際の塩で示したい。 そこから考え、食生活改善の方法を見出すように促す。

## (6) きれいに食べよう!

対象:小学生 開催回数:1回

残飯をする子どもが多くいるが、ただ全部食べようと呼びかけてもうまくいかないこともある。そこで、残飯でも多い魚に着目する。「魚は骨が多くて嫌い。食べるのが面倒だから嫌い」となっているのかもしれない。それを解消するきっかけとして、実物やイラストなどを使い、魚の構造を学んで、お箸でうまく骨と身を外す方法を知り、その後焼き魚等で練習を行う。お魚を食べる楽しさを知ってもらう機会としたい。

## (7) 親子料理教室

対象:小学生とその家族 開催回数:数回

1日3食のうちほとんどが家庭において取られているため、子どもたちの食育には、保護者の協力が欠かせない。そこで、家族と食について考える機会を持ちたい。母親に限らず、父親、祖父母にも参加してもらいたい。料理は女の人がするものという認識ではなく、家族みんなでやることも視野に入れてもらいたい。子どもたちが料理や食に関心を持ち、これを機会に、家庭で料理に挑戦してもらえるようにしたい。具体的には、子どもができる程度の1食分の食事をつくる。栄養バランスが取れた一汁三菜を意識したメニューを提案し、野菜のゆで方等の調理の際のポイントも学んでもらう。

#### (8) 食物アレルギーってなに?

対象:小学校高学年~ 開催回数:数回

調布市のアナフィラキシーショックによる死亡事故が話題となり、食物アレルギーが注目されている。食物アレルギーを持つ子どもだけの理解では、死亡事故が防ぎきれない。そこで、食物アレルギーを持たない子どもにも、食物アレルギーのことについて知ってもらうことで、死亡事故を防ぐことにつなげたい。また、食物アレルギーを学ぶことで、友だちへの気遣いや思いやりの心を育てることもねらいとしたい。具体的には、食物アレルギーを引き起こす食品の種類、症状、注意すること、対処法などを学んでもらう。

## V-3. 「谷二ラボ」活動について

申請代表者:初等教育学科 准教授 山森美穂 協 力 者:初等教育学科 准教授 平和香子

テーマ:谷二ラボ

~小学校教員志望学生の科学実験に関する実力向上と

小学生の科学への興味喚起の機会としての放課後実験教室~

#### 【目的】

①小学校教員をめざす学生が指導的立場で小学生とともに実験をする経験を積むこと、② 学生が実験内容の選定から安全な実験教室の運営までを行う経験を積むこと、③学生の自然 科学の素養を高めること、④理科実験教室への参加が子どもの理科への興味を高める効果を 検討すること、である。

## 【概要】

谷村第二小学校で放課後と夏休みに小学生を対象とした理科実験教室(通称「谷二ラボ」)を平成23年度からはじめた。実験教室の内容選定や準備、当日の進行は学生が中心になって行い、上記目的①~③の達成を目指す。また、参加した小学生を対象に、アンケートやインタビューを行い、理科実験教室への継続的参加が子どもの理科への興味を高める効果を検討する(目的④)。

同時に、指導的立場で参加した学生に対する効果も検討する。

## 【平成 26 年度の報告】

谷村第二小学校で、放課後と夏休みに小学生を対象とした理科実験教室を行った。今年度はすべての回で全学年を対象とした。

第1回:6月25日

「イクラみたい?ジュース入りマイクロカプセルを作ってみよう!」

参加者:小学生38名、大学生5名

第2回:7月31日

「紫外線」(紫外線下で発色する絵の具を用いた実験)

参加者:小学生30名、大学生5名

第3回:11月26日

「サインペンの色をわけてみよう!」 参加者:小学生33名、大学生5名

#### 第4回:2月25日

「炭酸飲料水を作ってみよう!」 参加者:小学生40名、大学生11名

平成 26 年度に意識した点は、1) 高学年児童の参加が少ない傾向があるため、全学年を対象とし、低学年も高学年も楽しさと手ごたえを感じられること、2) 児童が帰宅後に家族とともに実験内容をふり返る機会を作ること、3) 児童の興味をもたせやすい飲食物を素材とすること、である。第1回では、小分けにした持ち帰り材料を用意した。その他の回でも、家庭で話題にしやすいように、ワークシートの文言を学生たちと工夫した。第4回では、果物の味がするが材料に果物はつかわれていない清涼飲料水を意識させるという、食育の要素もあわせ持つ内容を試みた。第1回と第4回は「食べられるものを作る実験」として、家庭科室で行った。飲食物をテーマにする実験は児童の関心が高い一方で、「飲食物を作る」こと自体の盛り上がりが大きく、科学への意識も保ちつつ行うことの難しさを感じた。

## 【プロジェクト3年間の総括】

平成 24 ~ 26 年度で計 11 回、地域交流研究教育プロジェクトとしてではないが平成 23 年度を含めると計 14 回、実験教室を行うことができた。有難いことに、小学校からは好評をいただいている。備品の利用など多くの点でご協力をいただき、また学生に対するアドバイスもいただいている。

学生にとっては、準備実験での試行錯誤と本番の両方の経験があってこそ意義が大きいようである。学生が持ち寄ったテーマから準備実験を経てテーマを選定するのが理想的であるが、実際には教員側が決めて準備実験の御膳立てをするところまで行ってようやくスタートという年度もあった。実験内容が決まってからの進行・手順の計画やワークシート作成は、多くの学生が意欲的に意見を出し合って工夫を重ねる様子があった。

参加する児童は、高学年はほとんど固定メンバーとなっている。これは高学年児童ほど習い事等で放課後に曜日固定の用事がある率が高いためと推察される(小学校と大学教員の都合で、学期中は水曜日以外の実施が困難であるのが実情である)。継続的に参加している4年生以上の児童はさまざまで、同じ「面白かった」という感想でも、興味の間口が広く何でもやってみたい子から、やはり理科(科学)的なことが好きである子、友だちと一緒に参加することに重点がある子がいることが伺えた。実験テーマは学校での学習範囲とは独立して設定しているが、関連する内容がある場合には高学年児童には個別に声をかけることで、学習内容を想起することを試みている。

家庭でもう一度実験をするための材料提供は好評であった。本学職員のお子さんが参加していたため、家庭での実験の様子を伺うことができた。お母さんが盛り上げてくださったこともあって、家族に解説をしながら、真剣に実施し、成功して嬉しそうだったそうである。未就学の妹さんも、小学生になったら自分もやりたいと羨ましそうにしていたとのことであった。参加児童自身への定着や、より広い層に対する科学への興味喚起の機会として、とても意味があることが伺える事例であった。今後、この点の工夫を検討していきたい。

開催日程の点では、三吉子ども体験教室等、放課後に児童を対象に行われている他の行事との重複を避けることが望ましい。しかし、大学教員が立ち会うことが開催条件であることと、学生の自主的・能動的な取り組みを期待していることで、年度初めに年間計画として日程をあらかじめ定めることが困難であり、この点を意識的に対応するのは難しい。今後もその時々で可能な日程の中から、最良と考えられる日程で行っていくことで、理解をいただけ

たらと考えている。

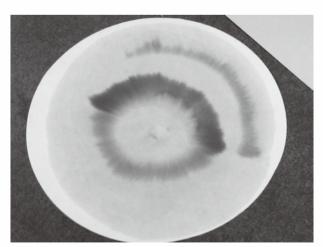
## 【おわりに】

平成 27 年度は担当教員(山森)の学外研究のため休止となりましたが、それを残念であるとのコメントをいくつかいただきました。嬉しいことです。地域交流研究プロジェクトとして支援をいただきありがとうございました。

(文責:山森美穂)



スポイトで一滴ずつ、コップの中の溶液に入れます (平成 26 年度第1回)



サインペンの色がきれいにわかれました! (平成 26 年度第3回)

### (付) 2014 (H26) 年度 地域交流研究センター担当教員

杉本 光司	情報センター教授	地域交流研究センター長 (前期) 地域情報教育担当
   麻場 一徳	初等教育学科教授	地域交流研究センター長(後期)
別宮有紀子	初等教育学科教授	フィールド・ミュージアム部門担当
鳥原 正敏	初等教育学科教授	地域美術教育担当 フィールド・ミュージアム部門担当
   堤 英俊	初等教育学科講師	地域特別支援担当 発達援助部門担当
品田 笑子	センター特任教授	地域教育相談室担当 発達援助部門担当
北垣憲仁	センター特任教授	地域交流センター通信編集長 フィールド・ミュージアム部門担当

## 2014 (H26) 年度 地域交流研究センター運営委員会委員

鳥 原 正 敏 広報委員長

西 本 勝 美 初等教育学科 別 宮 有紀子 初等教育学科

加藤浩司 国文学科 鷲 直人 英文学科

田 中 里 美 社会学科 分 田 順 子 比較文化学科

菊 地 保 学生課長 奈 良 健 三 企画広報担当

池 谷 廸 久 市民代表(都留市まちづくり市民活動支援センター長)

2015年10月14日 発 行

編集者 都留文科大学地域交流研究センター

発 行 者 都留文科大学

〒402-8555 山梨県都留市田原 3-8-1 電 話 0554-43-4341

印 刷 所 株式会社 佐野印刷

〒402-0052 山梨県都留市中央 2-7-3 電 話 0554-43-1611